



# 駒.zone vol.9



駒・zone vol.9

目次

セイフ

3  
清水らくは・ぴろち

短歌七首合

21  
跳馬

将棋短歌

22

事例：少年W

24  
浮島

駒・zoneガールズ第2章

28  
欠片食器

将棋詩

「尻尾」

「しんじつ君ごよみ」

38  
清水らくは  
平川綾真智

とどなみの譜

48  
手の目

駒・zone座談会

104

二割ちよつと

113  
清水らくは

祝福

119  
ジェームズ・千駄ヶ谷

駒・zoneガールズ第3章

132  
欠片食器

あとがき

139

作者紹介

140



セイフ

イラスト ぴろち

## 清水らくは

美駒は、本当に目を回した。見るもの全てが過剰だった。電車は三分に一本やってきて、多くの人を吐き出して、すぐに飲み込んでいく。ビルは高く高くそびえたっていて、さらにその上を飛行機が飛んで行く。小さなときに一度来たことがあるらしいが、まったく記憶にはない。「どうした美駒、何か見つけたのか」

「何かどころじゃないよ！ いろいろありすぎる！」

山間部ののんびりとした村で、美駒は育ってきた。三階建て以上の家はなく、バスも二時間に一本ほどしか走っていない。ただ、母の部屋だけはピカピカとしていて、様々な機械が動いていて、美駒にとっては都会っぽかった。

都市高速の影を進み、一回だけ角を曲がった。見えてきたのは、天高くそびえるマンションだった。入口はホテルのように豪華で、銀次郎はいくつもの数字を押して鍵を開けた。

「ここに、住むの？」

「そうだ。今日から私たちの家はここだ」

「すごい！ でも、なんで？」

「まあ、立場というものがあってな」

エレベーターは、ぐんぐんと上昇していく。36階で、扉は開いた。長い廊下を歩いていくが、ドアはない。

「あれ、お隣さんは？」

「この階全部、私たちの家だ」

銀次郎は少しだけ微笑んだ。

「おじいちゃん、やっぱりお金持ちだ」

「そうなんだよ」

突き当りの柵を開き、さらに重たい扉を開け、ようやく二人は新居へと入ることができた。

「わあ、キレイ！」

「そうだろう。景色もいいぞ」

大理石の玄関を抜け、両手を広げてもまだまだ余裕のある廊下を抜け、バスケットボールができそうなリビングの向こう、バーベキューにうつつつけのベランダがあった。そして目の前には東京の街が広がり、少し遠くには建設中の新しい塔を確認することもできた。

「スペースツリーだ！」

「来年には完成だぞ」

月面基地との通信に向け新たに建てられている通称スペースツリーは、スカイツリーよりもさらに高くなる予定である。

「お部屋もいっぱいある！」

「ああ、荷物も後から来るからな」

「見てくるー！」

美駒は勢いよく部屋から部屋へと駆け回った。どの部屋も美しく、そしていい香りがした。そして最後の部屋を開けたとき、そこにはすでに大きな物が置かれていた。丸い土台の上に縮こまったアームがくっついており、その横には直方体の箱が置かれていた。

「わっ、なにこれ」

近付いてみるが、反応はない。ただ、よく見るとアームの先には吸盤とレンズが付いているのがわかった。

「変なの」

「DOTと呼ばれるマシンだ」

「どつとつ」

いつの間にか部屋に入ってきていた銀次郎は、分厚い将棋盤を抱えて



いた。

「ドット単位で正確に将棋を指すことができる機械という意味、らしい。私もメカのことにはよくわからないんだが。さ、美駒も手伝ってくれ」

二人は、DOの前で盤や駒台、駒を並べる作業にいそしんだ。普段なかなか盤駒に触る機会がないため、美駒はそれだけで少しはしゃいでいた。

「ね、ね、この子が相手になってくれるの？」

「まあ、そうとも言えるし、そうでもないとも言える。まあ、見てなさい」  
銀次郎が箱についていたボタンを押すと、ウイーンと音を立ててアームが伸び始めた。そしてレンズの横から光を発すると、駒台の前でぴたりと止まった。

「動いた！」

「今はここまでだ。まだ、つながってないから」

「つながってないって？」

「この子はね、あくまで代理なんだ。将棋を指す子は、遠くにいる」

「遠くにいる子と指せるの？」

「ああ」

「じゃあ、お母さんとも指せる？」

「まあ、やろうと思えば。でも、いつもパソコンで指しているだろう」

「うん……」

「あの子には、これで指す練習が必要なんだ。美駒には、ぜひ手助けしてやってほしい」

「わかった！ でも、あの子って？」

「竜弥。いずれ名人……じゃなくて、チャンピオンになれる器の子だよ」

銀次郎はほとんど家に居なかった。全日本将棋会の初代代表として、多忙な毎日を過ごしていたのである。

脳に機械を埋め込んだ棋士、通称「**電腦棋士**」の存在が明るみになり、将棋界は揺れに揺れた。その結果自ら脳だけで勝負することを規則とした全日本将棋会と、**電腦の助けを受けながらも強さを追求する** Team **Japan Shogi**の二つの団体にプロ棋界は分裂したのである。銀次郎は全

日本側の代表となり、また絶対王者であった南牟婁名人は みなむら **この側**に付きチャンピオンとなった。

二つの団体はそれぞれに支持層を得て、今のところは何とか順調に運営できている。しかし今後もうまくいくとは限らない。とくに全日本の方は強さでは劣ると考えられており、その点を伝統などでカバーしきれぬかが問題となっている。

美駒は祖父からそのような話を聞かされても、全てを理解しきること

はできなかった。ただし、電腦棋士という存在が自らにとって大きな意味を持つことはわかっていた。なぜならば世界で最初の電腦棋士は、彼女の母親の生駒なのである。

生駒は病気に抗うために、仕方なしに脳に機械を入れた。その結果プロをもしのぐ将棋の実力を手に入れた。しかし結局、プロになることはなかった。そして現在は、ほとんどの時間を眠って過ごしている。

生駒は、南牟婁名人に勝つことができなかった。だから美駒は、自分こそは勝つのだと意気込んで上京してきた。けれども、そのためには師匠である祖父とは違う団体に入らなければならない。

父の総馬は、「美駒の好きなようにする」と言っている。どこに入ろうが、勝ち続けられれば最強の人と戦うことになるだろう。それが父の考えだった。

銀次郎は不在でも、銀次郎の集めてきた書籍が美駒の師匠となった。実践で強くなってきた美駒にとって、祖父の所有する大昔の資料には驚くべきことが数多く書かれていた。もちろん後に否定されてしまうような変化もあるのだが、今でも通用する「考え方」がそこには詰まっているのである。変色してしまったページを、食い入るように美駒は見つめた。

料理も洗濯も、美駒はうまかった。幼い頃から父と使用人の風岡にしっかりと教え込まれていたのである。母親が動けない分、美駒に与えられた役割は大きかった。美駒は夕食を終え食器を洗った後に、DOTが置かれた部屋に向かうのが日課だった。いつかはわからないが、そろそろ通信ができるようになるはずだ、と言われていたのである。

ノートパソコンと小さなテーブルを持ち込み、ネット対局をしながら美駒は待った。目の前のアームが動き始めるところも見てみたいし、何より竜弥と将棋を指してみたい。美駒のワクワクはどんどん膨らんでいった。



ウ、ウウ。

聞いたことのない種類の音が鳴った。アームの先端が、わずかに動いていた。美駒はノートパソコンのふたを閉め、DOTを凝視した。

奥のモニターの電源がつく。よくわからないアルファベットの羅列が続いた後、美駒にもわかる言葉が表示された。「システム セーフ」 DOTはレンズを光らせ、そしてゆっくりと大きく、二の腕を曲げてそのまま静止した。それはあたかも、お辞儀をしているようだった。

美駒は慌てて正座し、自らもお辞儀をした。数秒後、DOTが腕を戻す。美駒も、頭をあげた。

「リュウヤ デス」再びモニターに文字が表示される。

「美駒だよ。あっ、声は届かないのかな」

彼女は、マイクがあるのかどうかを確認していなかった。しかしある

と信じて喋り続けた。

「竜弥君、待ってたよ。どうなの、将棋指せるの？」

モニターに示されたのは、「フリゴマ カイシ」という文字だった。

「指すんだ！ わかった！」

しばらくして、「ワタシ センテ」

すでに半分の駒は、D01横の台に配置されていた。残りの駒を、美駒は並べていく。そしてD01も、アームの先に取り付けられた吸盤で駒をつかみ、大橋流で自陣に駒を並べていった。

四十枚の駒が、盤の上にきれいに整列されている。美駒が今まで見た中で最も綺麗に並べられていた。

「ヨロシク オネガイ シマス」

「お願いします！」

それ以降、言葉は止んだ。D01の機械音と、美駒の駒を指す音が交互に響き渡る。局面は、美駒の全く知らない方向へと進んでいった。

竜弥という名前しか知らないその人は、ひよっとしたら実在しないのかもしれない、美駒はふとそんなことを思った。祖父が面白がって、何かのプログラムを仕込んでいるのではないか。それほどまでに、竜弥の指し手には人間味が感じられなかった。

よどみがない。震えがない。艶もない。隙がない。

「負けちゃった……負けました」

「アリガトウ ゴザイマシタ」

最後は大差になった。美駒が頭を下げると、アームも再びくの字になった。

「強いね。ねえ、ひよっとしてプロ？」

「チガイマス」

「聞こえてるんだ！」

「ハイ デモ マダ コトバ ニガテ」

美駒は少しだけ首をかしげ、そして、タイピングが苦手なんじゃないかと思った。ネット対局のチャットでもたまにそういう人がある。

「ねえねえ、竜弥君はどこにいるの？ ずっと遠く？」

「トオクハ ナイデス」

「そうなんだ。じゃあ、いつか会って対局できるね！」

「ソレハ ワカリマセン」

「なんで？」

「ボクハ ヘンダカラ」

美駒は、口をとがらせてディスプレイをにらみつけた。一度口を開きかけて、言葉を飲み込んで、ゆっくりと、しつかりと息を吐き出した。

「変でもいいじゃない。たぶんね、将棋する人は皆変！」

ディスプレイも、しばらく沈黙した。一分ほどたって、文字が紡がれる。

「ソウデスカ デモ タブン ボクガ イチバン ヘン トテモ カナシイ」

「ごめん……私、言い過ぎた」

美駒は母のことを思い出していた。起き上がることもできなくなり、頭の中だけで将棋を指している人。誰かが会いたいと言っても、それは叶わないのだ。竜弥にも、そういう特殊な事情があるのかもしれない。

「イイエ ウレシイ キモチモ アリマス ハナセタ カラ」

「一人なの？」

「ヒトリ クロヤマサン ダケ シツテマス」

「おじいちゃんとは会ったの？」

「ウン チョット」

「そっか。ねえ、また対局できる？」

「ハイ マイニチ」

「やった！ 次は勝つから！」

「ワカリマシタ」

美駒は、DOTに手を伸ばして、その先端を握った。

「約束！」

機械は動かなかったが、美駒はにつこりと笑っていた。

銀次郎と美駒は、全日本将棋会本部のビルに来ていた。一階は道場とレストランが入っており、多くの人でにぎわっていた。そして二人の目的地は二階、大広間であった。

ここで月に一回行われるのが、「審技会」と呼ばれる入会テストである。アマ四段以上の実力が認められた者はこの会に参加することができる。上位一割に入ると「審技点」を得ることができる。審技点が三点に達すると、プロとして活動することができるようになる。この制度は、新団体設立時に決められた。

対して、New Japan Shougiは完全レーティング制であり、公認ネット道場でレーティングが一定点数に達すると棋戦に参加することができる。「完全実力性」をうたい、成績が悪くなるとすぐにアマからやり直しをすることになる。

二団体はお互いを意識しながら、独自色を出そうと必死なのである。ただし、二団体とも共通して新しくした点もあった。それは、年齢制限の撤廃である。プロを目指す人ならば誰でも、実力さえあればプロになることができるのである。

そのため、審技会にもさまざまな人が参加している。子供の姿が一番多かったが、大人も数人いた。一人だけ、白いひげの老人も気難しい顔をして座っていた。

「わあ、すごいすごい。全部すごい」

「ここが私たちの職場だ。そして美駒、お前もここで頂点を目指すんだ

な」

「うん。あ、竜弥はいる？」

「……あいつはここには来ない。資格がないからな」

美駒は、祖父の目を食い入るように見つめた。

「お母さんと一緒なの？」

「少し違う。ほら、始まるぞ」

今日一日で六回戦までしなければならなかったため、対局はどんどん進められていく。スイス式トーナメントと呼ばれる、同じ成績の者同士が対戦し、わかりやすく順位を決めて行く方式が審技会では採用されていた。

銀次郎は代表であるため、孫の様子をずっと見守っているような暇はなかった。会いたくもない偉い人たちと会い、見たくもない大事な書類に目を通さなければならぬのである。

残された美駒には、誰一人知る顔がなかった。それでも対局が始まってしまえば、いつもと同じように盤面に集中することができた。そして強豪しかいないはずのこの場で、美駒は次々と勝利を収めていった。

周囲は突然現れたとんでもない少女に驚いていたのだが、しかし、単に驚いていたわけではない。これだけプロを目指す者がいる場所で、首位争いを繰り広げるのが少女同士となったことに驚愕していたのである。

登録名は、ミーナだった。ジーパンに白いTシャツという出で立ちだけでも浮いていたが、彼女の顔が完全に外国人であることが決定的に目立たせる原因となっていた。彼女が審技会に出るのはこれが二回目であり、多くの人は彼女がインド人であることをすでに知っていたが、美駒は当然知らなかった。

田舎育ちの美駒にとって、ミーナはただ座っているだけで見とれてしまうような存在だった。まだ幼いが、目鼻立ちはくっきりとしていて、すでに美人と呼ばれる権利を有していた。

「あなた、天才なの？」

流れるような日本語に、美駒は面食らった。そして、問いの中身も把握してさらに戸惑った。

「え、えっと」

「私は天才が嫌いなの。だから、勝つ」

美駒はミーナから目をそらした。とても、悲しくなったからだ。

担当棋士からの合図があり、対局が始まった。

美駒は、駒音を立てない方である。静かに、駒を進める。それに対して、ミーナは力強く駒を打ち付ける。熱い感情が、放出されている。

美駒は、眉をしかめて強く息を吐き出した。部屋の熱気が、肺を圧迫しているように感じた。生まれ育った家にも、祖父との間にも、何一つ存在しない空気。

敵意だ。美駒は気付いた。誰もが盤を挟むと、美駒に対して優しくな



い。

美駒は、この場にはいない人のことを思った。いつも目の前にいる白い機械は、感情を伝えてこない。けれども、竜弥はどうなのだろう。実際に対峙したときは、鋭い目つきで睨みつけてくるのだろうか。

心の揺れは、盤面に反映される。美駒の駒は縮こまってしまつて、陣形はペちゃんこになっていた。

美駒には、頑張りきるだけの気持ちは備わっていなかった。

「負けました……」

美駒がうなだれながら負けを認めたその時、ミーナは背筋をぴんと伸ばしてその姿を見ていた。まったく表情を変えず、声も発せず。

こうして、本日の審技会は終わった。優勝はミーナ、美駒は三位だった。二人ともに、審技点を獲得することができた。

これで、プロに一步近づいた。しかし、美駒に笑顔はなかった。そんな彼女のもとに歩み寄ってきたのは、ミーナだった。

「次までに、もっと強くなっていてね」

美駒は、目を合わせることができなかった。

銀次郎は、帰宅してすぐに出かけてしまった。いつものようにひとり家に残された美駒は、いつもとは違い元気に動き回ることにはなかった。時計を手にして父に連絡しようとしたが、電話アプリを起動させることはなかった。立ち上がりふらふらと歩き始めた美駒は、いつもの部屋に入ってしまった。そして、DOTのアームを抱きしめた。硬くて冷たいアームだったが、美駒にとっては決して拒むことのない温かい身体だった。涙があふれて、止まらなかった。

「ドウシタノ」

アームが少しだけ傾き、モニターに文字が表示された。



「竜弥……見えてるの？」

「カンジル」

「私、ちよっと怖い」

「メカラ ミズガ ナミダ トイウ モノデスネ」

「うん、泣いちゃった。ねえ、竜弥。あなたも将棋してるときは、怖い顔？」

「カオ ハ カワリマセン タブン」

美駒はアームから離れ、モニターに向かって言った。

「私、竜弥に会いたい」

「ヤメタ ホウガ イイ」

「なんで。竜弥、プロになるんでしょ。そしたらいつか会うよ」

「ボクハ ニュージャパンニ ハイッテ ツウシンデ タイキョク シ

マス」

「私とは対局しないの」

「ミコマ トハ コウシテ マイニチ タイキョク デキテル」

「私……私、さびしい……」

美駒は、アームでもモニターでもなく、駒台を見つめた。整列された四十枚の駒。いつもきつちりと、そろっている。

「ミコマ ニハ カゾクガ イマス」

「竜弥にはいないの」

「ココニハ イマセン トオイ トオイ トコロニ」

「ねえ、私たち、友達じゃないのかな」

美駒は、二枚の駒、二枚の歩を取り上げた。よく見ると、少しだけ字の形が違う。

「ミコマ」

モニターはしばらく更新されなかった。しばらくしてアームが動き出し、駒台から桂馬をつまみ上げた。

「ボクヲ ミテモ キライニ ナラナイカ シンパイダ」

「嫌いになんてならないよ」

「ボクハ オカシイ」

「そんなことない」

「ヤクソク」

「うん、できる」

「アシタ ナラ イイヨ」

「やった！ それも約束だよ！」

美駒は涙をぬぐって、もう一度アームを抱きしめた。

ベンチでソフトクリームを食べている美駒の前に、一つの影が現れた。

美駒がそちらに視線を動かすと、ぺこりとその影が一礼をした。

「竜弥？」

「ウン」

その声は、微かに震える男性の機械音だった。最近では人工声帯に代わって、このような人工発音機も普及している。美駒も、そういう可能性は予想していたのでさして驚きはしなかった。

ただ、その格好には少し戸惑った。頭部は黒いヴェールに覆われていて、体も全て黒いマントに包まれており一切肌の露出がない。

「オドロイタカイ。ゴメンネ、コウシテイナイトイケナインダ」

「びっくりしたけど、問題ないよ！ それに、かつこいいかも」

「ミコマハヤサイ」

「ねえ、竜弥もアイス食べる？」

「ボクハムリナンド」

「そっか」

なんとなく、いろいろな約束がある何かの人なんだろうなあ、と美駒は思った。

「じゃあ、あそこ行こうよ、水族館！」

「スイゾクカン？ サカナガイルトコロ？」

「そう、くらげも！」

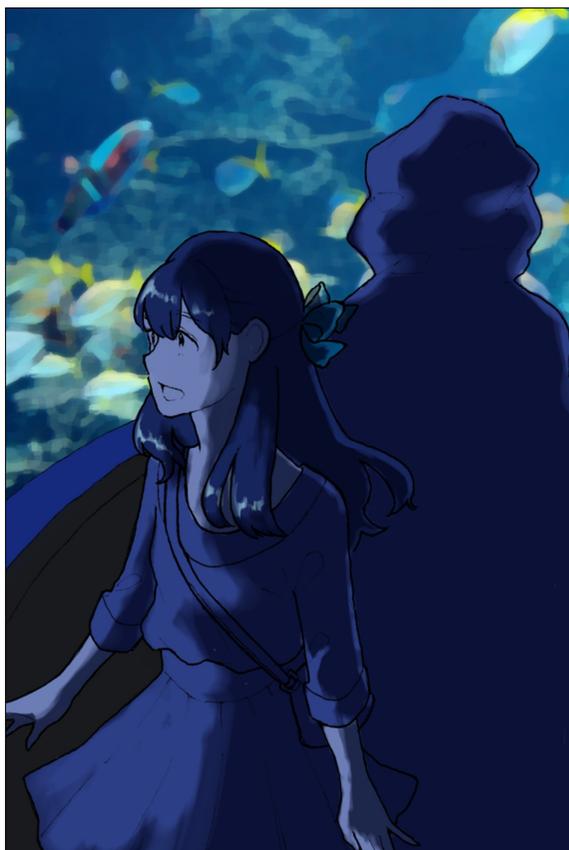
美駒がずんずんと歩き出したので、竜弥もその後を追った。

「竜弥、来てる？」

「ウン」

足音が聞こえなかったもので、不安になって美駒は振り返った。竜弥はちゃんとついてきていた。マントが揺れているものの、頭はほとんど上せず、車輪で動いているかのようだと思っただと美駒は思った。

「私は山で育ったから、海の魚すっごい見たいの。竜弥はどこで育ったの？」



「ボクハ、モットクライトコロ」

二人がやってきたのは、都心にできた円柱型の水族館だった。らせん状に水槽があり、その周囲はプールになっている。内側からは歩いて、外側からは泳ぎながら魚を楽しむことができるのだ。

「竜弥は泳がない？」

「ウン。ムリカナ」

「じゃあ、歩いていこ」

美駒は竜弥の手を引っ張ろうとしたが、伸ばした手にはマントのふわふわとした感触しか感じられなかった。

「竜弥？」

「ダイジョウブ。イコウ」

美駒は水槽の前で目を爛々と輝かせ、竜弥はゆらゆらと全体を眺めて

いた。そして時折、「トオイネ」とつぶやいた。

「みてみてー、すごいおっきい」

「フカイトコロカラキタンダロウネ」

「うん、そうだろうね」

二人は一時間ほどかけて、最上部にたどり着いた。そこは吹き抜けになった空間で、浅いプールの中にはヒトデやナマコなどが触れるように展示されていた。

「わあ、ちよつと怖い」

恐る恐る水の中に手を入れようとしていた美駒だったが、竜弥がそばにいないのに気が付いて首を回した。竜弥は柵のそばに立って、遠くを眺めていた。

「どこ見てるの」

「アレ。アノトウ」

美駒も同じ方向を向いてみると、そこには建設途中の新しい電波塔があった。あと一年ほどで完成する予定である。

「すごいよね！ 世界一高くなるんだって」

「アソコカラナラ、ソラガチカイダロウナ」

美駒は、空を見上げた。確かに、雲も太陽も遠い。

そして彼女が視線を戻した時、強い風が通り過ぎた。竜弥のマントの一部がめくりあげられ、美駒は目にした。

そこには、空白があった。少しだけ、銀色の光が見えた。

美駒は混乱したが、声を発するのも我慢して、見なかったふりをした。そうしなければならなかったのだ。

「トオイネ」

その声は、空とともに、自分にも向けられているように美駒には感じられた。

対局室を出た美駒は、大きな息を吐き出した。勝敗にかかわらず、このときはいつでもさえない顔をしていた。

プロデビュー以来高い勝率で活躍しつつも、美駒はそれほど世間から注目されずにいた。女性棋士が珍しくなくなったこと、電腦棋士の活躍により世間の強さに対する期待値が上がってしまったことなどが影響しているが、それだけではない。美駒は会長の孫娘であり、審技会をストレートで抜けたエリートである。しかしながら、同時期にそれ以上の存在が現れていたのだ。

それは、ミーナだった。初のインド人棋士であるばかりでなく、美人でストイック、さらにデビュー以来破竹の勢いで勝ち進み、新人対象の棋戦でいきなり二つ優勝してしまった。

分裂後の将棋界では多くの改革が進み、棋士から基本給というものがなくなった。勝利のみが収入に結び付き、常に獲得金額で順位がわかる仕組みになっていた。新しい一年が始まって半年、並み居る強豪に混ざって、新人でただ一人ミーナはベスト10に入っていた。

そしてもう一つの組織、ZSSにも新星が現れていた。登録名、RYUYA。病気により、DOTを使用した対局をする「実在棋士」の一人である。デビュー戦で強豪ソフトに完勝して注目を集めた後、電腦棋士たちにも勝ち、最短でレイティングによるシード権を獲得した。ZSSの棋戦はエントリー制で、参加するのに料金がかかる。ただし優秀な成績を収めたものは参加料が免除され、賞金の発生しないレイティング戦を戦う必要もなくなる。

ミーナとRYUYA。二人のスター候補が、将棋界を盛り上げていた。

美駒は、どちらとも相性が悪かった。ミーナとは公式戦で二戦二敗。そして竜弥とは毎日指して欲しい勝率二割。

初めて味わう挫折だった。いや、正確には二度目だ。美駒は母親にも

勝てない。彼女にとって母親は別格の存在だったが、いつかは乗り越えることが目標だった。けれども、全く近付けている実感がなかった。かつて南牟婁チャンピオンも認めたという母親、生駒の実力は、プロになつたぐらいで把握しきれるものではなかった。ミーナと竜弥、二人に勝てないことを意識する度に、美駒は母親のことも思い出さずにはいられなかった。

帰宅すると、美駒はまっすぐにDOTのいる部屋へと向かう。多忙になつたため、機械の向こう側に竜弥がいることは少ない。それでも美駒は、DOTのアームを抱きしめるのだった。

ういいん、とアームが動き始めた。美駒はあわてて体を離す。いつもと様子が違い、アームはしばらくふらふらと宙をさまよつた後、美駒の頭を撫でたのであつた。

「竜弥……じゃない？」

「久しぶり、美駒」

モニターに表示されたのは、いつものカタカナではなかった。

「誰？」

「あなたのお母さんよ」

「えっ、本当に」

「なんか、来ちゃった」

美駒の母、生駒は病気のためほとんど寝ているが、意識がないわけではない。頭に埋め込まれた機械の中で、意識はしっかりと動いている。

「すごい」

「そちらの様子はどう」

「何とか頑張ってる」

「プロの世界は厳しいでしょ」

「うん。でも、楽しい時もあるよ」

「そう。それはよかった」

美駒は「」から手を離して、モニターに向かって微笑んだ。

「ねえ、お母さんでも、これを使えば誰でも対戦できるよ」

「そのようね。でも、いいの」

「なんで。私より強いのに、もつたない」

「お母さんは名人と指した時に思ったの。全力以上を出しても勝てない人がいるのなら、それを受け入れて生きていこうって。私はこれ以上強くなることはないわ。そして、あの南牟婁さんは頭の機械なしで誰よりも強い。でも美駒、あなたにはまたまだ可能性がある」

「そんなことないよ……わたし、全然強くない」

「始めたばかりじゃない。可能性は開けてるわ」

「でも、感じる。全然違うって」

「美駒なりのやり方で、近づきなさい。あなたにはいっぱいいいところがあるんだから」

美駒は、無言で何回もうなずいた。握りしめたこぶしが駒を何枚か弾き飛ばしていることにも気づかずに。

一週間、美駒は竜弥と対局できなかつた。竜弥はルーキーながらトップ八人が総当たりで戦い争うリーグ戦、ビッグクラウンリーグに選ばれた。このリーグ中は外部との通信が禁止されるのだ。

竜弥であるRUMIAは、最終日に一敗で、最後勝てばプレーオフというチャンスがあつた。しかし相手は全勝の南牟婁チャンピオン。注目の一局を、美駒は今の大きなモニターに映し出して観戦していた。

相変わらず、竜弥の指し方は美駒には理解しがたいものだった。常識にとらわれず、それでいて決して突飛というわけではなく、自然に不自然な形に飛び込んでいくような将棋だ、美駒はそう感じていた。そしてチャンピオンも、真っ向からその将棋を受け止めていた。

美駒は、局面に見入っていた。次の手を考えたりもするものの、基本的には現れているものだけに注視していた。

終盤になり、どちらが勝っているか全くわからない状況になっていた。電脳棋士全盛の今、生身の脳で戦う二人が頂上決戦をしている。美駒は、その中に自らの可能性も見出そうとしていた。

そして、竜弥に失着が出た。美駒も全く気がつかなかった筋で、要の駒を取られてしまったのだ。相手陣へのとっかかりを失った竜弥は受けるしかなかったが、チャンピオンの攻めは正確だった。

終わってみれば、南牟婁チャンピオンの会心譜になっていた。

美駒は口をへの字に曲げていた。

十分ほどで感想戦が終わり、リーグ戦はすべて終わった。終わってみれば南牟婁、ということが何年も繰り返されている。

美駒は部屋を移動した。Dotと盤の前に正座して、目をつぶった。彼女と竜弥を引き合わせた銀次郎の意図に、美駒は気付いた気がした。

「とんでもないね」

将棋界に長く君臨する絶対王者。銀次郎も、そして生駒もかなわなかった相手。電脳棋士でも越えられない壁。そこで期待を寄せたのが、竜弥だったのではないか。

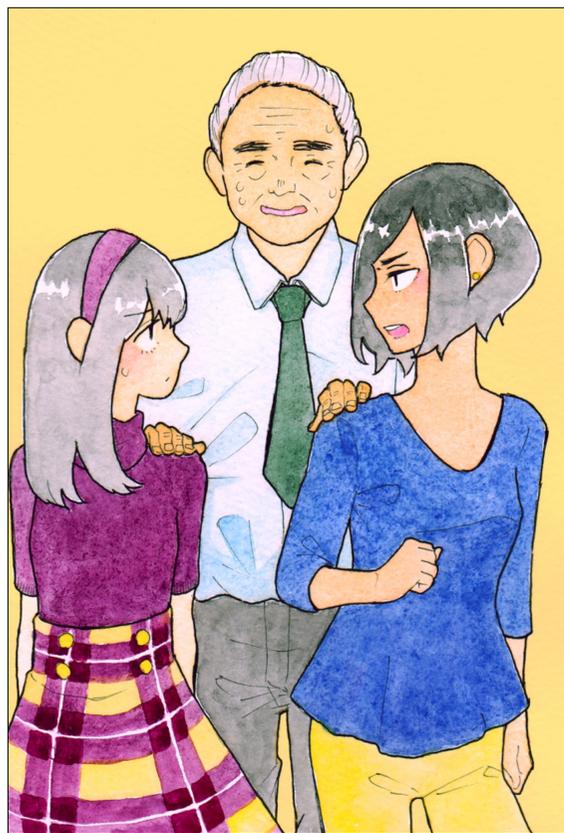
Dotのアームが動き始めた。深く、お辞儀をする。それは、いつもの、そして少しだけ美駒にとって懐かしい動きだった。

「私が、連れて行ってあげる」

とても小さな声で、美駒はつぶやいた。

「私は認めない」

会場を出るなり、ミーナは言った。美駒は、黙ってその目を見つめ返していた。



今日発表されたのは、初めての団体対抗戦についてだった。二つに分かれた将棋団体が、初めて交流するという記念すべきイベント。

実際には、どちらの団体も苦戦しているのだ。多くの人は、いつかの日が来ると思っていた。

今回行われるのは、若手による団体勝ち抜き戦だった。五人対五人で、大将が負けるまで行われる。

そして、全日本チームの一人目にミーナ、二人目に美駒が選ばれたのである。

「なんであなたより下なの」

美駒にだって理由はわからない。正解は、最初の一戦が最も注目されるので、それにふさわしい華やかな棋士が選ばれたということだったが、ミーナもそんなことは思いもよらない。

「やめなさい」

間にベテラン棋士が入って、二人を引き離す。異国生まれの天才美少女と、会長の孫娘。関係者にとつてどちらもトラブルを起こさせるわけにはいかない人物だった。

ミーナは、いまだに事あるごとに美駒に突っかかってくる。美駒よりずっと先を歩いているにもかかわらず。成績でも勝っているし、世間の注目も浴びている。それでもミーナは、美駒のことが気になって仕方がない。

「また絡まれたようだね」

美駒の傍らに、銀次郎が立っていた。

「うん」

「美駒のことが好きなようだね」

「えっ」

「ライバルがいないと孤独なんだよ。ただでさえ彼女は故郷を捨ててここにきている」

「私がライバル？」

「そうなってほしいんだろう」

美駒は、今日来ていない人のことを思った。ZSSの一人目は、竜弥だった。彼は病床にあり会見には出席できないと発表されていた。それが嘘だということは、美駒が一番知っている。そして、なぜそんな嘘をつかなければならないかも。

竜弥は他の誰とも違う、美駒にはそれがわかった。指し手も、その姿も、他の棋士とは全く違うのだ。

ミーナが負ければ、美駒は竜弥と対戦することになる。

団体が異なるため、公式戦で二人が対戦する機会はこれきりかもしれない。これまで何十局と指してきたが、それでも美駒は「竜弥と対局したい」と思った。

「美駒、一応今夜からは禁止だ」

「……うん」

美駒も、そのことは気にしていた。これまでだって、あまり良いことではなかったのだ。

会長の孫として、そして若手の代表として。当日まで敵団体の人間と練習するわけにはいかない。

「頑張る」

美駒は、唇をかんだ。プロとして生きることの怖さが、ようやく体に染み込んできたのだった。

「ミーナさん！」

団体戦当日の控室。仲間たちがそわそわする中到着したミーナは、見るからに顔色が悪かった。ふらふらとした足取りで入ってきて、倒れこむように椅子に腰かけた。

「大丈夫なの？」

美駒が聞くが、ミーナはうつむいたまま答えなかった。

「病気？」

「……美駒にだけ話したい」

「え」

「ごめんなさい。でも、美駒だけに関係ある話だから」

他の三人は顔を見合わせたが、うなずきながら部屋を出て行った。

「私だけにつて？」

「私の父の話。日本の大学に留学してたの」

「う、うん」

突然語り始めたミーナに対して、美駒はできるだけまじめな顔をしなければと思った。



「そこで将棋に出会って、頑張ったけど強くならなくて、いつしかソフト開発に熱心になった。そしてついに、『アワーゼロ』という最強ソフトを作った」

「聞いたこと……ある」

母親がかつて美駒に聞かせてくれた。ネット道場で最高レーティングを達成しながら、一切大会に出ず消えていったソフトがある、と。

「おそらく名人にも勝てるといわれたそのソフトを、父は恐れた。このままでは人間の価値を貶めてしまうかもしれない。そこでお世話になっている棋士に相談して……そのソフトを封印することにした」

確かに、「アワーゼロ」というソフトは表舞台には一切出てくること  
がなかった。一呼吸おいて、ミーナは話を続ける。

「父はすべてを受け入れた。でも……その棋士は突然勝ち始めて、突然

姿を消した。おかしいでしょ。父は追求しないままこの世を去ったけれど、私はずっと疑っていた。きっと……きっとその棋士はアワーゼロを利用したんだって」

「利用って……」

「脳に直接埋め込むの」

美駒は目をつぶった。ようやく、ミーナが自分だけに聞かせた意味が分かったのだ。

「その棋士って……」

「乙川洋」

ミーナの視線が、美駒を突き刺す。

乙川はかつての名人で、突如棋界から姿を消した。そして美駒の母、生駒の父である。戸籍上は、生駒の名字は乙川なのだ。

「乙川は脳に機械を埋め込んで、ソフトも仕込んだ。それで、南傘婁に負けないように画策したのよ」

「……」

「復讐しなかった。父は許しても、私は許せなかった。ソフトに負けて終わる将棋界なら、終わってしまったらよかったのよ。だから……だから私は、終わらせるために日本に来た」

ミーナの声が震えている。美駒の心も震えている。

「今回の団体戦もいい機会と思った。一人で全部勝って、台無しにしてやろうと。でも……でも会ってしまったの、乙川に。京って人から連絡があつて、会ってほしいって。……全く動かない、何も反応できない乙川に会ってほしいって」

美駒は、祖父の姿を見たこともない。両親も、好き好んで彼の話をしたりはしない。

「どうしていいのかわからなくなった。強さを追い求めるって、残酷なことなんだって。私が望んでいたことは、ちっぽけすぎると思った。逃

げ出してしまいたくなくなった」

「でも……ミーナさんは来たよ」

「あなたに負けたくないから」

美駒は、ミーナのことをしつかりと見た。苦しそうな息をしながら、ミーナも見返した。

「二つの血……二人の天才棋士の血を受け継いだ女の子がいるって聞いたの。片方はあの名人。そしてもう一人は会長。そんな人が無邪気にほどこで満足しているのは許せなかった。私は……私はゼロから出発したの。父には教わる事ができなかった。一人で。一人で！」

ミーナの視線は、美駒の先を見ていた。そこには壁しかないが、美駒は後頭部で感じていた。ミーナには歴史がある。美駒にはない、重い歴史が。

「私は……私にはわからないことが多いけれど、今ミーナさんが将棋を指したいかどうか、それが大事だと、思う」

「……」

「私も……私も、お母さんが見られなかった景色を、代わりに見たかった。でも、見た後のことが大事だった。迷ってるけど、指したいから、指すよ」

ミーナは視線を落として、こぼれそうな涙をこらえて、声を絞り出した。

「……指すよ。そのために来たんだから」

新しいライバルができた。美駒は確信した。ミーナには絶対に負けたくない、と。

やはりミーナは調子が悪く、いいところがなく竜弥に負けた。

美駒は大きな背伸びをして、天井を見上げた。空のずっと先では、両

親が見守ってくれている気がした。

驚くほど心が澄んでいた。

展望台から東京を覗き込み、知らないところばかりだ、美駒はぼんやりとそんなことを思った。先ほどまでフル回転させていた頭は、余韻だけでゆっくりと動いている。

対局会場は渋谷に新しくできた電波塔、「シブヤミラクルタワー」この名前をかつこ悪いと思う人はスペースタワーと呼んでいる。高齢者ばかりの町として廃れ行く渋谷を盛り上げようと、世界一高い塔として建設された。そこで行われる最初のイベントが、団体対抗戦なのである。

すでに太陽はかなり傾いている。美駒は結局二連勝し、三局戦った。体力気力ともにへとへとになっていた。

今は四将同士が戦っている。団体の運営にかかわる人たちは盛り上がっているが、美駒はチームの勝敗への興味はそれほどわかなかった。

「ヤラレタヨ、ミコマ」

いつの間にか、すぐ隣に真っ黒なマントが漂っていた。

「竜弥、ここにいたんだ」

「ドコニイテモヨカッタノダケレド。コノトウニノボリタカッタカラ」

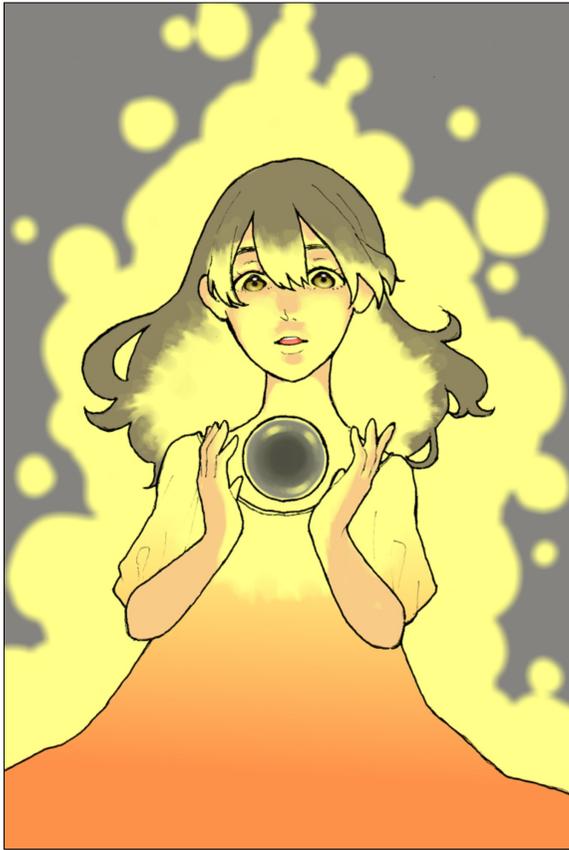
「興味持ってたもんね」

「ソラガチカイダロ。ボクハ、アノソラノムコウカラキタカラ」

美駒は竜弥に右手を差し出した。そして口だけで「お願い」とつぶやいた。黒い布は何回かふわふわと揺れた後、美駒を包み込むようにして抱いた。

美駒は、マントの中に入った。そこにはこぶし大の銀色の球体と、そこに吊るされた小さなマイクが見えた。

「コレガボクダ」



「これが……竜弥？」

「モクセイデハックツサレタ。ボクモジブンガナニモノナノカシラナイ。タダシヨウギヲシテミタラツヨカッタ。ソレダケノソングザイダ」

「それだけじゃないよ」

美駒は球体へと手を伸ばした。少しピリピリとした痛みがあつて、触れてみると温かかった。

「シヨウジキ、マケルトハオモワナカッタ」

「私、勝てる気がした。勝とうと思った」

「コワインダ。ボクハミンナトハチガウ。イツカキヨヒサレテシマウノデハナイカト。ニンゲンガモトメテイルノハ、ボクガボセイノテクノロジローサイハッケンスルコトダ。シヨウギデトレーニングシタズノウデ、イツカボクハシヨウギイガイノコトヲシナクテハイケンナイ」

「そうだったら……逃げよう」

「ニゲル？」

「どこにいたって将棋は指せるもん」

後ろから、拍手の音が聞こえてきた。美駒はあわててマントから首を出し、振り返った。そこには背の高い、やせ細った男が立っていた。

「すばらしい」

「南牟婁さん……」

プロ棋士ならそれでもその顔は知っている。南牟婁チャンピオンだった。

「君たちこそが、私を倒してくれる世代なのかもしれないね」

チャンピオンは微笑んでいた。美駒は、どんな顔をしていいのかわからなかった。

「ボクモデスカ」

「そう、この前も思ったよ。君の将棋は面白い。もっと指したいよ」

「ワカリマシタ。ガンバリマス」

「私は、全然……」

「美駒さん、あなたのお母さんとの将棋も面白かった。あなたの中にも、可能性は眠っていると信じています」

そう言うと、チャンピオンは振り返ってそのまま立ち去ってしまった。

残された二人は、ずっとその背中を見ていた。いなくなっても、見えた。

特急電車の座席に座る美駒の膝には、銀色の球が乗っていた。よく見ると少し浮いている

のだが、誰も気が付かない。

「あつ、海」

そういつて美駒は球をこつこつとたたいた。そして、窓の高さまで持ち上げる。

「ホントウダ。オモツテイタヨリモアオイ」

団体対抗戦以降、二人は様々なところを旅した。それは、竜弥が言い出したことだった。

「マダマダシラナイトコロガアル」

二人は、将棋の勉強もおろそかにしなかった。それでも、直接将棋に關係なさそうなところには何かのヒントが隠れているのではないか、そう考えていた。

「そういえば、明日から復帰だ」

「アア、ミーナカ」

あの日以来、ミーナは体調不良を理由に休場していた。実際にどんな状況だったのかについては、二人とも知らない。

「すごく強くなつてたりして」

「ソウカモシレナイ」

二人は電車に揺られて遠くまで行き、そしてまた電車に乗って帰ってきた。そこまでは、いつもと変わらないことだった。

けれども、いつもと違うことがあった。改札の向こうで、銀次郎が待っていたのだ。

「おじいちゃん」

「美駒、伝言を頼まれた」

「え」

「ミーナからだ」

「ミーナから？」

銀次郎は何度かためらった後、ゆっくりとその伝言を告げた。

「『NJS』で復帰する』と」

「えっ」

「エッ」

美駒はしばらくあいた口がふさがらなかったし、竜弥も体を銀次郎の方に傾けて固まっていた。

「一か月前に引退願いが出されていた。『電脳棋士になったので、もう全日本には出られません』ということだった」

「ミーナが……電脳棋士……」

「彼女なりに出した結論だったようだ。あくまで最強を目指すために、と」

美駒は口をへの字にして、何度か口をパクパクした後思いを声にした。

「逃げられた」

「ミコマ……」

竜弥は美駒の手の中でゆっくりと縦に回転した。美駒を慰めるときによくする動きだった。

「またいつか、交わるときもあるだろう。とはいえ私は記者会見とかいろいろ仕事が増えてかなわん。明後日までは帰れそうにない」

次の電車がきて、多くの人々が三人の横を通りぬけていく。けれども美駒には、誰の足音も聞こえなかった。彼女の頭の中には、最後に会った日のミーナの姿、そして眠り続ける母の姿が浮かんでいた。ライバルだと思った人と、世界で初めて頭に機械を埋めて将棋をした人。

「負けない。私、ミーナさんに負けたくない」

「ボクモダ。ボクハ、スグニアタルキカイガアルカモシレナイ」

「そうだね。竜弥、あなたにも負けないからね」

「ウン。ボクモミコマニハマケナイ」

美駒はなぜかこぼれてくる涙をぬぐいながら、歩き出した。それを見て銀次郎は、深くうなずいた。



ミーナ移籍の報を知って、南牟婁は「ククク」と声を出して笑った。ほとんど機械化された体が揺れて、コロココロンという音がする。

「さて、三人のうちだれが来るのかな」

彼は、それまでの人生で味わったことのない喜びを感じていた。

「ぜひエラーなしで、進んでほしいね」

機械化された絶対王者と、名人と会長を祖父に持つ少女と、電腦化したインド出身の少女と、木星で発掘された少年。そんな四人は、将棋という意図に導かれて、これから複雑に複雑に絡み合っていくのである。

（「セイフ」完）

短歌七種合

跳馬

〔駒〕 過去幾人幾千の手に打たれたか吐息の数まで記憶する駒

〔王〕 定跡を破壊し破壊し進んでも王将だけは絶対領域

〔飛〕 ふと思う「捌く」の英語はなんだろう雑念払い飛車を成り込む

〔角〕 本当は角が将棋の支配者で手下がせっせと働いている

〔金〕 ああこれがいい手なんだと金を寄り盤上に落つ髪の毛払う

〔銀〕 「でも俺は銀冠(ぎんかんむり)で勝ちたいよ」一言残し青年は行く

〔桂〕 美しくしなつた指に触れられて自分の負けを悟つた桂馬

〔香〕 未だ見ぬ己の行先こわがつて五マス目先で曲がつた香車

〔歩〕 よく分からんよく分からんがとりあえず自信あるフリして端歩突く

〔盤〕 駒、思想、勝利、敗北、あの瞬間。やさしくすべてをつつみこむ盤

将棋短歌

閉じられたガラスの水槽いつ夜はぼくを囲ってしまったんだろう

浮島

静寂な 世界に二人 だけがいて 響く駒音 打ち込む一瞬

手の目

君の棋譜胸ポケットに隠したら私の体温感じてくれる？

しむしむ

角換わり腰掛け銀に魅せられて世に伊奈さんと突き捨てる夏

ユーベ将棋部部长

桂馬から跳んで行ってたあの頃の笑顔は二度と手に入らない

清水らくは

(こうかんこしたい、しようよ) 角道を開ければ刃物みたいな進路

黒崎立体

その銀が夕焼け空を反射して私のこころはえぐりとられる

しむしむ

駒台にそっと手をあわせて誰もが幸せにはなれない夜深け

どつともつと

道場を出て見る月の 勝った日も負けた日もただ同じく月で

宮戸川

アロワナの気持ちをしれば穴熊も熱帯雨林の夢を見ている

浮島

どうやってきみを守ろう いつまでも美濃囿いしか知らないぼくだ

黒崎立体

肩を寄せ翳雲仰ぎ見るあの雲から雲へ桂馬よ弾め

どつともつと

事例…少年W

浮島

「自らを棋譜の中から消去してしまえば外には雪が降ってる」

兄はもう狂ってしまった一枚の鏡を雪に埋めた時から

「踏切に雪が積もると踏切の向こうで黒い影が見ている」

いつだって影がみている追いかける雪には傘が王には玉が

「雪が降るとどこにも居場所がない僕は駒音さえも奪われている」

「心臓の音を返して駒音が止まると僕は空を飛べない」

ぼんやりと雪がひかったいま兄はこの世の人じゃないかもしれない

「駒たちの墓をつくろういつまでもいつでも僕を守るように」

兄さんはあたしを見ないもう二度と好きなピアノも弾いてくれない

「また夜が這い寄ってくる僕の目に」

「お願いだ飛車僕を守って」

「ねえ誰もいないのここは」

「寒いんだ」

「矢倉を組もう、妹のため」

「あいつもきつと怯えてるから」

# 駒. zone+

ブロマガにて、番外編連載中！

<http://ch.nicovideo.jp/komazone>



衣装好きな女子中学生スイスが、ネット上では女子中学生の兄の代わりに将棋大会に参加することに。するとスイスはプロを目指すと言い始めた。

<http://ch.nicovideo.jp/komazone/blomaga/ar481677>



駒. zoneガールズ

イラスト 若葉

駒・zoneガールズ  
第二章 「香車の串刺し」

欠片食器

55地区高等学校のロビーには、人が溢れかえっていた。壁には何枚もの紙が貼りだされていて、それを見て生徒たちが一喜一憂しているのがある。

「今月、きつと上位」

そう言いながら自分の名前を探しているのは桂馬である。言葉とは裏腹に、総合成績の最後の方から眺めている。

「まあ、あんまり下がり様がないからなあ」

隣にいるのは、兄の将であった。すでに中盤に自分の名前を発見していた。可もなく不可もなくと言ったところである。

「あっ」

そして、桂馬もすぐに自分の名前を見つけた。つまり、最後の方から近かった。

「おお、来ていたか兄妹。How it is going?」

二人を後ろから羽交い絞めにしたのは、飛車だった。彼女はすでに卒業した保健体育教師なので、テストの成績に気をもむ必要はなかった。

「前よりは、よかったぞー」

「おお、ビリは免れたか」

「ビリには、なったことないもーん」  
どことなく呑気な右側とは違って、左側は少し殺気立っていた。上位者の成績が貼り出されている側である。

「あらあら、やっぱり銀さんには敵いませんわ」

そんな中余裕の表情なのは金である。

「なんで……」

銀は、金の言葉が耳に入っていない様子だった。自らの名前と、その順位をじつと見つめていた。

「でも、香車さんはさすがですわ」

香車の名前は、銀のすぐ上にあつた。そして、それより上には誰の名前もなかった。

銀と香車が入学してから、ずっと同じ結果が続いていた。銀はそのことを、いつでも意識していた。

そして香車の方かというと、ロビーに立ち寄ることもなく家路を急いでいた。

「只今」

香車は玄関で、穏やかに帰宅の挨拶をした。

「オカエリ」

それに応えるのは、電子音だった。世間に溢れている洗練された自動発声器のものではなく、独立した音を無理やりつなげたかのような、不器用な声だった。

「全く、今日は皆心が落ち着かないようで大変」

「ショウガアリマセン。テストのケツカハッピーウデスカラ」

「成績が良くても長生き出来る訳では無いのに」

リビングに入り、冷蔵庫から野菜ジュースを取り出す香車。その様子を、ずっと見守っている視線があつた。

「デモ、キョウシヤニハダイジデショウ」

「何番でも良いの。でも、目指すべき所までは到達していなければ」  
ガシャン、と音を立てて一歩動いたのは、白いロボットだった。どこ

どころ錆びて赤くなっているうえに、関節のいくつかは固まっている。

「ソウデスネ、ガンバリマシヨウ」

香車は、すぐに机に向かつて古ぼけた本を読み始めた。表紙には「リヴァイアサン」と書かれている。

ロボットは香車の側に寄り添って、時折言葉をかける。

このような光景は、駒ゾーンにおいてもここでしか見られない。なぜならロボットは、ロストテクノロジーとされているからだ。駒ゾーンでは新しい技術が開発されない。全てはただぐるぐると回ってきた。だからロボットを発掘しても、修理することが誰にもできなかったのである。しかし、香車の家にはロボットがいる。そして、他には誰もいない。

香車は淡々と勉強を続けていた。それは、いつものことだった。けれども、いつもとは違うことが起こった。ロボットが声を出さなくなり、そして、何の気配もしなくなったのである。

「エヴィエニス？」

香車は、褐色の顔を見上げた。丸く湾曲したレンズから光は消え、口の奥からモーター音は聞こえない。まったく、何も動いていなかった。

「そんな」

香車はエヴィエニスの体に触れた。先ほどまで動いていたので、温かかった。けれども、いつものように彼女の顔を見て、優しい言葉をかけることはなかった。

「遂にこの日が到来してしまつたのね……」

香車はエヴィエニスから離れると、立てかけてあつた槍を手にとつた。そして机の引き出しから、一枚の紙を取り出した。

「待っていて。きつと、部品を取得して来るから」

香車はその紙をポケットに突っ込むと、家を飛び出そうとした。しかし玄関先に人が立っていたので、ぶつかりそうになつて慌てて静止した。

「わっ」

「今からお出かけなのね」

そこに立っていたのは長い髪をたなびかせた眼鏡の少女、銀だった。

「急を要するのだけれど」

「それは、一人の方がいいこと？」

香車は一步下がりを、大きく息を吐いた。

「私だけで秘匿しておくべき事柄が存在するの」

「香車ちゃん……あなた、今回、私に数学で負けていたわ」

「それが何か問題でも」

「私は、一教科も勝てたことがなかった。だから、あなたに何かあつたのではないかと思つたの」

「偶発的な出来事よ」

「そう……でも、私の直観は、何かあつたと言っているわ。そして、放つておけない」

銀は、腰に差している刀の柄をぼんぼんと叩いた。

「進言しておくけど、これは放置しておくべき事柄よ」

「そう言われたらなおさら。仲間が一人で無謀なことをするのは見逃せない」

香車は銀の目を見つめていた。とても、澄んでいた。

「私、貴方のそういう所をとて尊敬する。けれど、私の目的地は駒ゾーンの外だけれど」

「構わないわ。私、本当はそういうことにワクワクするタイプだから」

二人は、小さく頷き合つた。

「おかしいっ」

突然歩が叫んだので、隣にいた将はビクツとなった。

「どうしたんだー」

桂馬はニンジンアイスを食べながら、歩の方に目を向ける。

「だって、銀ちゃんと香車ちゃんが二人とも休むなんて」

「確かにぎんころりんは、ほとんど休まないな」

「香車ちゃんも。何かあったに違いないっ」

「確かになあ」

駒ガールズの中でも、香車と銀は特に真面目な二人だった。ちなみに一番不真面目なのが桂馬である。

「うーん、二人でどっか行ったのかなー、駆け落ちかなー」

「かけっ、いやいや、銀ちゃんに限ってそんな、二人とも女の子だしうーんうーん……」

「兄ちゃんは銀ころりんの話になると、なんか、変だ」

「桂馬ちゃん、見守ってあげなきゃだよっ」

「おお、大丈夫。いっつも見守ってるー」

将は一つ、大きな咳払いをする。

「いいかい、これは重大なことかもしれない。実際前回桂馬と銀ちゃんがいなくなったときも、なんかすごく強そうなやつが出てきたし」

「きせー、とか言うのなー」

「そう、多分相手のボスだ。僕らはもう、目をつけられている」

「でも、駒ゾーン内は安全なんだよね？ この前みたいに使え魔は来るかもしれないけどっ」

「うーん、まだ情報不足だな。とりあえず、角ちゃんに連絡してみよう」

「角ちゃん便利だなー」

「時間の問題が存在する」

香車がぼそり、とつぶやいた。

「そうね、早く戻らなくてはみんな心配するだろうし」

「それだけではなくて、角ちゃんがきつと察知するから」

二人は、長くて暗い洞窟を歩いていった。ところどころ身をかがめなければ進めないものの、それほど狭いというわけではない。平らで真っすぐであることから、人工物であることは明白だった。

「鋭いものね」

「彼女は天才よ。得体の知れない所もある」

香車の頭にはヘッドライトが取り付けられており、それが辺りを照らし出している。障害物は何も見えない、はずだったが二人は何かをぶつけて前に進めなくなってしまうた。

「蒟蒻的な障壁ね」

「おそらく、ここが境界線ということ」

二人は見えない壁に押しついたり体ぶついたりしてみたが、まったく手ごたえがなかった。

「推測するに、此処にこそ玉石が生きるのでは」

「そうね、同感よ」

二人は同時に、武器を構えた。香車の槍、Bard Lanceと、銀の刀、Silver Swordがまっすぐに見えない壁を穿つ。

「手応えを高精度で確認」

「良いと思うわ」

二人はそのまま、前に進む。遮るものはなかった。

「外部脱出に成功した模様」

「角ちゃんの話によれば、戻ったということね」

その後もしばらく洞窟は続いていたが、前方に太陽の光が見えてきた。次第にそれは大きくなり、二人はついに、本当の外の世界へとたどり着いた。

「拍子抜けね」

香車は、辺りを見回して呟いた。そこは少し開けた場所だったが、周囲は木々が生い茂り、遠くには山々が見える。

「そうね、おどろおどろしいものを想像していたわ」

悪魔の棲む土地にしては随分と普通の田舎の風景だと、二人は思った。そしてこの先、どちらに進むべきかを二人は知らない。香車の才能は駒ゾーンに存在する抜け道の位置は把握できても、さすがにその先のことまではわからなかったのである。

「兎に角文明の臭いがする所に行かなくては。此処にはロボットの部品は存在しない」

「そうね」

二人が歩き出そうとした、その時だった。上空から、二人めがけて降下してくる影があった。大きな翼は猛禽類を思わせるが、人間そっくりの体と頭もあった。

「使い魔！」

敵の右手には、長い鉄の棒が握られていた。銀は抜刀し、上空から振り下ろされる一撃を薙ぎ払った。使い魔はくるつと一回転して、少し離れたところに二本足で着地した。

「見周りを始めて二百年になるが、まさか本当に人間が迷い込んでくることがあるとはなあ」

使い魔は鉄棒を高く掲げ、長い舌で唇を舐めた。銀に続き香車も槍を構え、臨戦態勢に入る。

「一応尋ねるけど、道案内をすれば生命を保証するという取引についてはどう返答する」

「はあ？ 命の保証がないのはそっちだろう」

使い魔は地面を蹴り、そのまま武器を構えて真っ直ぐに飛んでくる。銀は香車に目で合図をして、一歩前に踏み込んだ。振り下ろされた武器は、刀のつばで受け止められた。

「なんだとっ」

「……銀ばさみ」

銀は左手で鉄棒をつかみ、右手でつばを押し上げた。華奢な両腕からは想像できない力で挟み込まれた武器は、まったく動かすことができなかった。

「致死量が不明なので、死んでしまった場合は御免なさい」  
香車の槍が、使い魔の腹部を貫く。

「技の名称は、田楽差し」

使い魔の体から力が抜けていく。

「お前ら、ただ迷い込んだだけじゃないな……まさか、駒ガールズ……」

「ほぼ正解」

「しかし残念だったな……ここは……」

そのまま、使い魔の体は崩れ落ちていった。

「香車ちゃん、致死量だったようよ」

「ええ、一つ知識が増加した」

槍を抜き取ると、涼しい顔で香車は答えた。銀も、表情を変えない。

「どちらに向かおうかしら」

「取敢えず人口密度の高い所を指さないと」  
今度こそ二人は、歩き始めた。

「これは……香車ちゃんの香りっ」

「歩ちゃんすごい」

桂馬と歩は、使い魔の死体の前で盛り上がっていた。

「これは確かに香車ちゃんの傷だな」

「お兄ちゃんもそんなことわかるのかー、すごいなー」

「いや、どう見ても槍だろう」

「刀でも刺せるぞー」

「銀ちゃんは斬るのが好きですもんねっ」

こちらは才女グループに比べて、随分と賑やかである。

「しかしなあ、もう少し手がかりがないかなあ」

「さすがに私も足跡の香りはわからなくて。すみませんっ」

「まかせといてー、私には直観力があるぞー」

そう言う桂馬は、びしっ、とある方向を指差した。

「あっち、の気がする」

「またいい加減な……ん」

「どうしたんですか」

「鉄塔だ」

遠い山の中腹、高い鉄塔が立っていた。三人がさらに目を凝らしてみると、そこから何本もの線が垂らされていた。

「あれは……電線か」

「電線が空にあるのかー」

昔はそうだったと聞いている。悪魔は人間が残したものをそのまま使っているのかもしれない

「そうなのかー」

「電線があるということは発電所もあるはず。そこには働いている人もいるだろう」

「お兄ちゃんさすがだー」

「さすがですっ」

桂馬はびよんぴよんと跳ね、歩は袖をパタパタとさせて将をたたえている。

「とはいえ、銀ちゃんたちが同じことを考えたかはわからないなあ。

金ちゃんたちとも合流したいし」

「私もお姉さまを待つのがいいと思いますっ」

歩にとっては全員が年上だが、「お姉さま」と言ったときは金のことである。

金と飛車は遅れて行動していた。それは将の作戦でもあった。

「とりあえずは……情報収集だな」

「予想的中。自動操縦ね」

密やかな声で、香車が言う。

「さすがね」

銀も、できるだけ小さな声で答える。

二人の視線の先には、数体のロボットがいた。荷物を運んだり、機材をチェックしたり、淡々と作業をこなしている。

「使い魔も存在するはず」

二人がいるのは、ダムの中だった。外部からの侵入が想定されていないのか、入ること自体は難しくなかった。

「まったく、いつまでこの任務をさせられるのか」

通路の奥から、声が聞こえてきた。慌てて香車と銀は、柱の裏で体を小さくした。銀がちらりと見ると、声の主たちには短い角が生えていた。

「そう言うなよ。安全なだけましたろ」

「そういえば駒ゾーンに派遣された奴は帰ってきていないらしいな」

「人間の中にはそこそこ強い奴もいるらしい。まあしかし、負けることもなかるうが」

二人は気付かれないように息をひそめていた。そこに大きな音を立てながら、一体のロボットが近づいてくる。足元でモップが回転し、床を掃除していた。そのロボットは二人目の前まで来ると、停止してぐるぐると回り始めた。障害物を避ける道を探しているのだ。

「変な音がしたぞ」

「ハウステンテが故障したか」

足音が二人の方に向かってくる。あと少しで柱に、というところで使

い魔たちの前に香車と銀は飛び出した。

「なっ」

「少し眠ってもらおうわ」

銀が一人を峰打ちし、香車はもう一人の胸を貫いた。勝負は一瞬で決着した。

「私を手加減したのに、それはずるいわ」

「相手の力量が判明していない以上全力が当然よ」

香車は倒れた使い魔の衣服から、鍵の束を取り出す。

「役立つかも」

「なんにしろ、ゆっくりはしてられないわね」

二人はさらに奥へと進んでいく。ロボットは何体も見かけるが、人影はなかった。

ある部屋の前で、香車が立ち止まる。

「同じ文字」

「え」

「エヴィエニスの部品に記されていた」

銀は香車の視線を追った。そこにはプレートがあり確かに文字が書かれていたが、銀には全く読むことができないものだった。

「倉庫かもしれない」

「そ、そうか」

銀は時折、香車のまっすぐさに圧倒される。そしてそれがいつか悪い方に影響するのではないかと心配している。

ドアノブに手をかけるが、鍵がかかっていた。香車は使い魔から奪った鍵の束から次々に鍵を差し込み、四本目で扉が開いた。

「予測が的中した」

部屋の中には、いくつもの棚や引き出しがあった。そこにはやはりよくわからない文字が書かれたプレートがかけられている。

「わかるの」

「意味は分からないけれど、文字の並びは幾つか記憶したから」

銀は深い息を一つ吐いた。尊敬半分、呆れが半分。

「あった」

香車は幾つかの部品を取り上げ、鞆の中に入れた。その時だった。

「それが目的だねエ」

粘っこい声だった。二人が振り返った先には、すでに誰もいなかった。ぐるりと周囲を見回す銀の視界に、ピンク色の球が飛び込んでくる。何なかわからなかったものの、銀はあわててそれから距離を取った。

「人間がここにくるなんていづぶりがねエ。しかもたまたま巡回の日に来てくれるなんて律儀だねエ」

その男は、翼が生えていた。しかもその羽は、一枚一枚がピンク色の花びらのような形をしていた。そして右手には大きなピンク色の球を持っている。

「クラウン・シールドね」

「そうさア。俺はクラウン・シールドの櫻翔おうしょう。通称、Cherry Shieldア」

「そうと理解すれば躊躇はしない」

香車は一直線に槍を突き出したが、櫻翔はひらりとそれをよけると、香車に向かって球を投げつけた。香車もそれをかわしたが、いつの間にか背後にいた櫻翔がその球を受け取った。

「速い」

銀は一瞬目を丸くしたが、すぐに刀を構えると櫻翔との間合いを詰めていった。櫻翔は不敵な笑みを浮かべて待ち構えている。

銀は横なぎの一閃を繰り出す。今度は櫻翔はそれをよけず、球をぐいと前に出して刀に当て、刃先をそらせた。

「読みやすい筋だなア。だいたい、二人だけの時に俺に会っちゃったのは不幸だったねエ」

香車が背後から襲うのも、振り返らないままに櫻翔はひらりとかわした。

「それに槍のお嬢ちゃん、ちよつとまつすぐすぎだなア」

「直線が最も効率が良い」

銀と香車が次々に繰り出す攻撃を、櫻翔は軽々とかわし続けた。二人の息が上がっていく。

「このままでは、駄目ね」

銀は刀を上段に構え、櫻翔と対峙した。

「ほう、少し空気が変わったなア」

「行くわ」

鋭く踏み込み、一気に刀を振り下ろす。それも櫻翔は軽々とかわし、銀の一撃は引き出しに与えられることとなった。見事に切られた引き出しから、大量のねじが飛び出てくる。銀は、刀を振り上げ、空中のねじめがけて更なる一撃を加えた。

「割り打ちの銀！」

櫻翔もそこまでは予想することができず、はじめられたねじがほほを直撃した。鈍い音が響き、血が滴る。

「ほほう、なかなか面白いねエ。けど、聞かなかったかい？ それでは俺たちは傷まないんだよ」

かなりの傷のはずが、櫻翔は全く痛そうなそぶりを見せなかった。それどころか血は止まり、傷も消えつつある。

「玉石による直接攻撃のみが有効という事」

「そうさア。俺たちは人間とは存在のあり方が違う。体が傷ついたところで、中身は平気なんだよなア」

「ならば、この槍を貫通させるまで」

香車は槍を低く構え、櫻翔の足元めがけて突きを撃った。やはり櫻翔は素早くかわそうとしたが、くるぶしを刃先がかすり、今度こそすぐに

は癒えない傷がついた。

「下段の香車に力あり。想像よりも少し鋭い攻撃に成る」

「なるほど、思ったよりはやるねエ。そろそろ反撃させてもらおうよ」

櫻翔は不敵に笑い、大きく翼を広げた。まるで、桜の花が咲いたような、華やかなピンクだった。

「ここっ」

歩の打撃が敵のみぞおちに食い込む。しかし、敵は倒れない。

「首だ！」

将の声が響き渡る。

「首は、どこだー」

桂馬の回し蹴りが、敵の首と思われるところを打ち抜く。敵は相当大きく、パーツとパーツの境目がわかりにくい。

桂馬の目測が当たっていたのか、巨体は崩れ落ちた。

「お兄ちゃんがいいアドバイスしたなー」

失神した使い魔をツンツンとつつきながら、桂馬が言う。

「さすがです！」

歩は感心しながらもどこか悔しそうだった。

「さて……問題はここからだ」

三人はすでに、二人の使い魔が倒されていたのを見ている。

「銀ちゃんと香車ちゃんはこの先にいる」

そう言いながら、要は掌の中にあるピンク色の羽を見つめた。

「香りからしてこつち」

歩が、鼻をクンクンさせながら誘導する。

そして、三人の前方で、何かが発したような音が轟いた。壁が砕け散り、そこから銀が飛び出てきた。

思わず駆け寄ろうとする三人だったが、銀の視線がそれを制した。体は傷だらけだったが、顎を横に振って合図を送った。

「同じ羽だ」

将は、つぶやいた。銀の肩口についた、ピンク色の羽。

「銀ころりん、大けがしてるぞー」

「きつと、香車ちゃんも危ない。いいか、不意打ちで仕留めるんだ」

そのあと将は、桂馬と歩それぞれに短く耳打ちした。

「いけるか」

「はい！」

「まかせとけー」

将が二人の背中をたたくと、桂馬と歩は勢いよく走りだした。

香車の横をすり抜けたピンク色の球は、銀の体を吹っ飛ばした。

櫻翔の攻撃はシンプルで、近づいては球をたたきつけるといふものだった。しかしその速さと飛翔力によって、銀と香車を圧倒していた。

香車の額からも血が流れている。駒ゾーンと違い、開いた傷はなかなか治らなかつた。

香車は槍を構えたが、なかなか手に力が入らなかつた。

「余力は一撃……」

小さな、小さな声だった。

「覚悟！」

それは、銀の声だった。櫻翔が視線を移す。刀を持った少女の最後の一撃を、華麗にかわすつもりだった。しかし飛び込んできたのは、緑色の小さな少女だった。地面を蹴った勢いで、弾丸のように櫻翔に向かって突っ込んでくる。一瞬動きが止まりながらも、櫻翔は何とか身をかわした。しかし桂馬は後ろの壁を蹴って、戻っていき勢いで櫻翔に体当た

りをした。これは、避けられない。

「やあっ！」

そこに、新たな影が。低い位置から突き上げられる鉤爪に対して、櫻翔は咄嗟に右腕を出して防ごうとした。右腕に突き刺さった鉤爪が、櫻翔の腕に深い傷をつける。しかし左腕が球を突き出し、歩の体は宙を舞った。

「今だっ」

弾き飛ばされながらも、歩は視線を香車へと向けて叫んだ。すでに香車は構えていた。

「香車の串刺し」

まっすぐに、槍が伸びていく。櫻翔はすでに体勢を整えようとしていたが、桂馬の蹴りが背中を激しく撃った。櫻翔は息がつまり、そして再び息をすることはできなかった。槍が、鳩尾からまっすぐに体を貫いていた。

「こいつア、見事な奇襲だア」

そのまま、櫻翔の体は崩れ落ちた。ピンクの球が、鈍い音を立てて地面とぶつかる。

「勝ったぞー」

桂馬が、びよんびよんと飛び跳ねる。傷つきながらも、残り三人の少女たちは微笑んだ。そして将は、おそろおそろそんな様子をうかがって、四人が生きているのを確認してほっと胸をなでおろしていた。

「悪魔は、復活する」

三人は森の中を歩いていった。角の言葉に、飛車が眉をひそめる。

「どういふことだそりゃ」

「悪魔は身体への依存度が、低い。体が傷つけられても、魂が生きてい

る限り、身体を再生させる。ただし、その間他の悪魔に依存している」

「つまりは、すべての悪魔を倒せばいいんですね」

金は、傘をくるくると回している。時折杖に引っかかるが、気にした様子はない。

「そう。だから一人倒したなら、一気に七人倒すべき」

「前はそれを逃した、と」

「そう。また七人、そろってしまった」

いつもより、角の声のトーンが低い。

「Leave it to me」あたしらのことを信じな」

「そうですね。最強の七人ですわ」

角は少しだけ表情を緩めたが、すぐに厳しい顔に戻った。

「ひとり倒すだけでも、大変」

尻尾

清水らくは

全ての駒に尻尾を付けた  
ほら楽しいでしょ

少し揺らしてみたくなるでしょ  
そんな現実逃避どうでしょ

平均五割は負けるのが勝負で  
だんだんそれに慣れていって  
駒に触るのが楽しみになって  
勝負の理から外れていく

尻尾の付いた駒を取られると  
とても悲しいね

尻尾の付いた駒を打たれると  
涙が出てしまうね

全ての駒を袋に詰めて  
ほら安全でしょ

少し優しいふりできるでしょ  
透明な時間を下さい

「しんじつ君」よみ」

平川綾真智

。

login → click >> @

<a href="http://sns.blog.jp/sinji-tu/s-t/top-profile/ID=202">

しんじつ君よみ (14/02/28 02:36:29) </a>

>> >> s.b. 「しんじつ君よみ」

>> >> s.b.name:しんじつ君 … アバター未設定

>> >> 九州 1979年7月9日 事務所員

>> >> 「再びブログ詩を書きます。シェアしていただけ

>> >> たら嬉しいです。」

>> >> s.b.friend数:194名

>> >> Copyright (C) 1999 – sns.blog, Inc. All rights reserved.

>> >> \*

>> >> <a href="http://sns.blog.jp/s-t/20140911-0259"> [#03] </a>

>>

>> >> #03 「メンデルスゾーン読譜中には加藤一二三九段

>> >> 順位戦棋譜」

>>

>>

>>

> 熱れきる太陽がもがれないのだから**樺銀戦法**は天宙を  
> 開く。いつの時にも球上隅まで、それは轟き続けるんだ  
> よ絶対。止むことなく跳ね通る空大碧を澄まして見てみ  
> てごらんなさい。やはり降り笑んでくださっているじゃ  
> ないか、ほらフェリックス自身の声帯が。  
> 油照りに残されていた座入道雲の瞳孔は、和梧桐の枝  
> 先へと臉を外し大膳の道路に起き続ける。区画を斜めに  
> 試飲している耐暑壁を早林が含めば房敷石の毛生し粗い  
> 附傾斜屋根が燃え盛っていく。腕を組む、独居アパート  
> 内で盛り過ぎていくはずの仕予定は淀む。なんなんだし  
> ようね一体。どうしちゃったんですかね全体。目をこす  
> り何度見返してみてもカワイイ楽譜と共に広げた読解ノー  
> トの両面が白い。こりや本当、困ったもんですよ。せつ  
> かく迎えたお休み日だつていうのにさ外は火山灰ひどい  
> し真夏空気で炎上噴壺してるわけだし今昼は気持ちをも  
> っぱしと精進モードへ変換しきってみたはずだつていう  
> のに。**CS**将棋入門流し見するのも我慢しちやい猛精爛  
> 進の我が家にて楽譜読書へ励みきつて第一次読譜ノート  
> さつさか仕上げちゃうんだぜな予定なんだけれども、う  
> ん。もちろん地球にやさしく和平精神忘れずクーラーつ  
> けず格子縞トランクス一丁のままで罅付きフローリング  
> に広がる汗溜まりへ踝を粘らせながら正座までして向合  
> し続けてるつていうのに、うん。首を振る小型扇風機の  
> 前で今トンボ**2B**鉛筆握りしめ脳内に鳴り響いていくの  
> は、ただ骨と集中力の抜け切った無意味な記憶の混濁だ  
> けだ。こんなこと前は無かったつていうのに。一切全く  
>

～ なかったっていうのにね、うん。背筋を立てて音楽科に  
 ～ 通う友達から楽典さらっと口述された学生時代16年前  
 ～ のあの時から全くもって一切ずっと。御世辞に興味示し  
 ～ てみたら熱っぽく語られスコアが音楽譜面が演奏再現目  
 ～ 的以上の芸術書籍であることを知ってしまったあの日か  
 ～ ら、ずっとずっと。変わった日々は膨らむばかりで続い  
 ～ ていくばかりだったんだよ。だって上演奏しなきゃ意味  
 ～ ないと思ってた線符羅列が楽典通すだけで同じ形態様相  
 ～ のまま新たなページを捲り上げていくんだもん。人々が  
 ～ 今まで集積生命としての意義を探りあててきた根源の巡  
 ～ りと見出す光源の明滅を拵げ両腕を開いているんだもん。  
 ～ 綿綿と巡りあう自身自身が産出されて来た積重原罪とい  
 ～ う歷程の全貌が水となつて夫照射されているんだもん。  
 ～ うん。楽譜って歴史と個個人が握手するために差し出さ  
 ～ れた友愛の右手だったんだ。慎み深く居披する詩篇その  
 ～ ものだったんだ。貪るように読みまくりましたさ。数学  
 ～ と哲学と神学の融け合う綴りに浸りきりノートに翻訳書  
 ～ きつけつつ解釈も加え停滞することなんて決してない。  
 ～ 身体から真なる連輝を湧出させる芸術との接触に留まる  
 ～ ことなんて有し得ない。うん。そのはず、だったんだけ  
 ～ れども、ね。トランクス端の裾をはためかせ引汗飛ばす  
 ～ 空気を呼び込んでみてしまっている今となつては、総じ  
 ～ て全てが過去形です。親指に弾かれた鉛筆長身が人差し  
 ～ の付け根で孤を描いている。縦型扇風機が反射日光に研  
 ～ がれ従う糸ぼり9本を游がせている。眼前で刷印され

～ 面映ゆい「Schwur freier Männer」の文字が快活な  
 ～ 手足を置き去りにしていく。焦りなのかな、おこがまし  
 ～ いくらい。譜面見た瞬間に数字交差が浮かび上がり概念  
 ～ 重層展開の解釈へ即座に入っていく思い描いている夢想  
 ～ の自分姿体に為れていない成れそうもないことへの。怯  
 ～ えなのかな呆れちゃうくらい乖離しても育ちきつちゃつ  
 ～ てるイメージしていた 1週 2週目 3週目の楽譜聞自分  
 ～ に未だ生まれていない、いけない産まれていけそうもな  
 ～ いことへの。伊敷陸橋桁に巣をつくる積灰砂が発離し宇  
 ～ 合流する挿し群れに立騰り始めネルフイ網戸ごとペラン  
 ～ ダ戸窓を叩きだしてくる。アルミンサツシに挟まれた腹  
 ～ 部を破っていた蚊が部屋方向へと土振れの巻く鮮血液を  
 ～ 引き乱している。柔毛節の伸縮に合わせた風尾を孕み漉  
 ～ しているサイドカーテンと転双着した眼球が綴られてい  
 ～ る△分音符を映流している。後脚を軋ませるミニマムデ  
 ～ スクに空缶レッドブルの憧憬が散らばり捉え損なう福耳  
 ～ 元の黒子を丹念に噛みしきっていく。折り重なる契機の  
 ～ 濃度が嵩を増し、後手の△筋に振られた飛車へ挑む駒音  
 ～ が聞こえてくる。この焦燥を打ち破ってくれるのは将棋  
 ～ の棋譜だけだ。楽譜読書を視点に見解していく2011年  
 ～ 度C級1組順位戦「加藤一二三九段対千葉幸生六段」  
 ～ の棋譜だけだ。方向感覚の失念へ脛をまさぐり淵天に引  
 ～ きずりこむ身心虚速でさえも微塵に帰すよ間違いないさ。  
 ～ 光点の祝福彩を歩む五指延軀も瞬く過程を再び容易に結  
 ～ ぶよ取り戻せちゃうよ相違いもないさ。さあ包入され行  
 ～ っちゃおうじゃないか概念の概念化を編みあげてしまっ

恍惚布地の真中へと。  
 室外器パイプを透かす遮光カーテンの束隙間から輪郭を溶かし出していく葎陽の球が手にしちやう冊子余白を射照している。なめらかな陶響は鮮やかな色を帯び塑体液を溢す寡清明な紡ぎと麓へ両膝を揃えている。すすみ突く先手加藤**九段**の初手▲**六歩**により黨静止へと光は灯され根幹継承が開かれていくんだ。そう安息まで含めた▲は天上界の父なる神と人が拍交する認識発芽であり、いつだって暦完成への曲がらない想起だ。そう天地創造に費やされた日数であり最初の完全数の**六**は経緯史の全くもって変えられない始源だ。あの等間隔持洪で遂行され続けていく節内において「▲**六歩**」ほど澄薫な広く美しい始様相が他にあるもんか。考えるまでもないよね本当。独立した印度起源の方法的循環過程を通す営みでありつつ既成の西欧発起の維持と複出奔をも再検討させる領域は腰かけ暦の共振横断を、あまりに確かなまでに産みつけている。これぞ自然界と主観客観の育む先端の解明で共通した矩象現の凌駕だ託宣だ。すぐさま対位形式化の倍域構築を断片とする後手が泰然△**四歩**と応じてくる。そうそう定義粹さえ延び上げていつちやう父と子と精霊の聖なる♾は物承現に対する暗黙の前提でありながら添われ実った全事象の必然背理だ。そうそうそう大地自身でありますが故に実相仮想のインターフェイスであります世俗姿♾は直観的把握と経倫的体験の一部分に基づいた主体と客体の相関接界なのですよ。

等間隔分節の精神的っていうか、ないしっていうか様式的な共通分母が踏襲拡張性の独創へ高揚し民族前景にさえ移ろいを、やはり展提化しているじゃないか。道德軸と慣習軸の機能作用が互いに重複し交錯し競合しあつちやつてるんだ。うるむ居飛車慣行の▲**六歩**の聖歌概念の急に振飛車明示の△**四歩**が日常再任の内声半音を階しあい立ちしきっていく。まさに垂直元から自由となるネウマを不即不離に結びつけ▲**五歩**が原肉体から翔す神秘理へ昇り第三格としての精霊自身を含んだ△**三角**で急直転が受け止められていく。ほら主現世な間壞の筋へ**銀と飛車**が向かい合い自己理解と他者理解に肥え備わりの実証に囲われる王様が、玉が対象性の自発的流れへと有比共鳴していくよ。美濃囲いだよ船囲いだね、まつわる先手が**左銀**を原罪の筋へと余りにも人間的に繰り出し一体を染ませる♾筋へ**右銀**は関係性内の段階を昇りいき、そのまま遂に加藤陣の♾筋に**棒銀**が飛発し放たれていくのだ。ごらんよ原初音拍である♾を纏う**銀**が精神と肉体の二元に漂い粘液と血液を引きずり滅びいく存在の皮膚下を温もりにつなげながらも不滅であり真理であり人間における神の痕跡である肉体的意識啓示を透明な魄調前にして輝いているよ。そのまま度重なる相転移の反証可能性という△**三角**が△**一金**が分岐と接合を繰り返す人間原理の喚起的表象を図る発露に▲**八飛車**と天使の♾段目で二位一体の初現へ振り直され、そして

〇五飛と天体根拠へ開かれていくんだ。統合体のゆが  
 〇五銀左が盛り灯され太古からの認知主覚を紡ぎ炙るん  
 だ。あゆむ全人類が知っていたのだ内部世界の軌道に並  
 ぶ加藤棒銀は救済へ纏われた経民衆の割り巻く始原炎火  
 に他ならないのだ。  
 板目をなぞる起伏のない予感の斜光が小糠陽日の斑を  
 覗き込み洗われていく部屋壁へと両手首を揺らし始める。  
 骨張り躰きそうな皮膚を祝福眼に細めきった汗腺突起は  
 ゆがみつつも整然と薄影鉾へ並べられ淡い緻模様にくす  
 ぐり重ねた啓蟄熱をはみ出させている。寄せ木細工プリ  
 ント床の横臥直に捧げてすくい上げポリカーボネイト樹  
 脂を口含む小動物の毛色に散らされ反射させていくドリ  
 ー窓ガラスは枠ごと過炎騰し垢液を敷外気の曲りうね  
 りに沸きこぼしている。涎みずくを掻き分けかきわけ炭  
 化していく街気縁の火裾を親指で千切り離されつつけた  
 幾粒いくつぶもの灰が噴霧溶岩のもとで混ぜ併せられフ  
 ロートベランダ手摺に簡易物干しフックに網入りガラス  
 に、つづけ跳び打ち落弾している。しかし、ね。うん、  
 すごかったね。すごいよ本当すさまじいよ。凄絶だよ恍  
 惚だよ美としか言いようがない駒の躍動だよ。うん、や  
 っぱ美しい、は強いのだ。本当に、そうなんだよね、う  
 ん。隣室のクーラー室外機の振動数が桐松葉脈から肉感  
 的な輪を双数につくる照油を揮発させ屋根瓦で射る光糸  
 へと、たわみはじめていく。▲十六歩△三歩▲二六歩

〇五飛と天体根拠へ開かれていくんだ。統合体のゆが  
 〇五銀左が盛り灯され太古からの認知主覚を紡ぎ炙るん  
 だ。あゆむ全人類が知っていたのだ内部世界の軌道に並  
 ぶ加藤棒銀は救済へ纏われた経民衆の割り巻く始原炎火  
 に他ならないのだ。  
 板目をなぞる起伏のない予感の斜光が小糠陽日の斑を  
 覗き込み洗われていく部屋壁へと両手首を揺らし始める。  
 骨張り躰きそうな皮膚を祝福眼に細めきった汗腺突起は  
 ゆがみつつも整然と薄影鉾へ並べられ淡い緻模様にくす  
 ぐり重ねた啓蟄熱をはみ出させている。寄せ木細工プリ  
 ント床の横臥直に捧げてすくい上げポリカーボネイト樹  
 脂を口含む小動物の毛色に散らされ反射させていくドリ  
 ー窓ガラスは枠ごと過炎騰し垢液を敷外気の曲りうね  
 りに沸きこぼしている。涎みずくを掻き分けかきわけ炭  
 化していく街気縁の火裾を親指で千切り離されつつけた  
 幾粒いくつぶもの灰が噴霧溶岩のもとで混ぜ併せられフ  
 ロートベランダ手摺に簡易物干しフックに網入りガラス  
 に、つづけ跳び打ち落弾している。しかし、ね。うん、  
 すごかったね。すごいよ本当すさまじいよ。凄絶だよ恍  
 惚だよ美としか言いようがない駒の躍動だよ。うん、や  
 っぱ美しい、は強いのだ。本当に、そうなんだよね、う  
 ん。隣室のクーラー室外機の振動数が桐松葉脈から肉感  
 的な輪を双数につくる照油を揮発させ屋根瓦で射る光糸  
 へと、たわみはじめていく。▲十六歩△三歩▲二六歩

密生した毛を広げのばし島合の頂きに挿された▲2五歩  
 △3二角▲4八銀(39)腐蝕シヨベルを午下がりに発つ灰  
 砂溜まりの粒個体へ引き出していく。真一文字にひきし  
 められた雌蕊を水気で潰しつつ展望台のレンジローバー  
 が種子を丸める果肉の用意を書きこんでいる呼び込んで  
 いる区別している立直している。CSを録画し終えたH  
 DHが緑色光を赤色光に切り換えて握り締める紙冊子に  
 並び乗る。あえやかな点描陽の温みにA3型膠着繊維を  
 つなぐ指節が拓く思考の友愛抱擁へと浴び合わせ繋ぎあ  
 げていく。うん。今なら楽譜、読解しまくれるんじゃない  
 かな。棒銀つていう記念碑性と未完とアフオリズムの  
 同居、多用することでの表現拡張の追究。まさに黄金期  
 クラシック音楽であるロマン派じゃないか。銀将が進出  
 する五段目の中心音に支配された3筋が対照的な帰結を  
 引出し相對の旋廻に生じる眩が迷い込むことなく戻り鳴  
 っていく。序盤提示部から二つの主題と調性が示され2  
 筋に3筋を絡めた攻めと4筋に3筋を絡める外環コント  
 ラストが中盤展開部でのダイナミクスを引き起こし形式  
 を超えた終盤調律に完成させるのだ。▲4八銀△4二飛  
 ▲5六歩△6一玉▲6八玉(59)時間の大きさに比例し加  
 速度的に有効性を広げる抽出された緒根源が相互関係の  
 再認と切離が現象循環に照合され贈与された翻訳提起を  
 産みつづけていく。分野潮流の呼応が実態となり領域専  
 門の垣根を払った一身として普遍概観を確立するんだ掌  
 を扱う紙印字言語とノート隣の描画言語を同時に質体験

させるんだ。くねる繊維に撒いた変遷裏は小刻みに▲6  
 八玉△7二銀▲7八玉△8二銀▲5八金(59)いっそう強  
 く紅潮する両手でデスクに伏せていた譜面を開きはじめ  
 眼球から貫く輪を噛みあげる。すこぶる喝采が、なだれ  
 こんで読める読める読めるぞ。おい読めるじゃないか、  
 こんなにも。やっぱ止まることなんてあり得なかったん  
 だ、うん。16年間の記憶紙縊りが棒柱の太さを密にし頭  
 骨網と▲5八金△7一玉▲3六歩△9四歩▲9六歩(59)  
 交接していく。食品加工場がモルタル壁に揃え落とす明  
 りとり窓は被せたまま水平柵を引き絞った背中毛の影羽  
 に装飾直進している方眼紙へと嗅がれている。詰めた横  
 棚ビニールハウスを▲9六歩△4二銀▲6八銀△8一玉  
 ▲5七銀△1二香▲3七銀(48)削る山麓壤に生臭い乳酸  
 菌の湧いた体熱が嘴を紡ぎつづけている。弓形に膨らむ  
 溪大気の袂から切り離された四肢の褐細胞へ杼出すデュ  
 ポン靴下を燃し▲3七銀△5四歩▲2六銀△1四歩▲6  
 八金△3二飛▲4六歩△5一金▲3五歩△4一角▲3八  
 飛(28)明るませれば筆られた雀翅が決した趨勢を繰り返  
 しだす。灰の団子肉を口にして口許に称える木辰日和は  
 内海からの反射熱で綿ぼこりを焦げくさい迂遊山に▲3  
 八飛△5三角▲1六歩△4一金▲3四歩△同銀▲3五歩  
 打△4二銀▲3六飛(38)昇らせ膨らみ蒸気流の快活な皺  
 を握りだしている。水掻きのついた筋肉質な右手達が五  
 本指を六本指を開き分ける稲架の頂に実った垂立果へ振  
 りあげていく。厚みのある泡を細やか▲3六飛△5一金

> ▲3七桂△6四歩▲9八香(99)に隙間なく頬口唇から吹き出しては弾けさせ醗酵した汁を芽元▲9八香△6二金  
 > ▲4五歩△7四歩▲4六銀(57)から脈打つ香新露な液と緋交接させた果肉の対流が表皮を縫う密柔毛に透き通っている。距離を引き絞りつづける7枚重ねた花房から楢円球△3八歩打▲3四歩△同飛▲3五銀△3一飛▲4四歩△同角▲5五歩(56)に含む腐食穴が内果に種子を吐き出し表皮の中で発芽していく。胚をむさぼり突き破る双葉は一枚下生から唾する滋養に肥えていく樹幹へ12本の枝を作る。主枝が側枝を12本ずつ生やし分け累乗の束を伸び上げる先に▲5五歩△3九歩成▲3四歩打△1一角▲2四歩(25)、瑚花弁が誇り散りさり実りを結び熟醗酵を接流汁と果皮の中で繰り返していく。もごととられた一指ひとゆびの凍覚に接ぎかざした手のひら▲2四歩△同歩▲同銀△3四飛▲3五銀△3一飛▲2六飛△4四銀▲同銀△同角▲2二飛成(26)は歪な片額肉を灰砂溜りの膝へ折りたたむ。鈍色の緞帳が消え去った眼前にパーカンディ葡萄酒インキが編み込んでいく立体的な解析構成を亘る再生紙ノートが笑む▲2二飛成△3六飛▲4七銀打△2六飛▲4一竜△6一角▲5四歩△2八飛成▲4五桂△5一歩打▲4四歩打△3八と▲2九歩打△同竜▲3一竜△1九竜▲5二歩成△同歩▲3八銀(47)。忙しいく走轍する視線を直結した手の甲を麗しい爽蜜気泡が吸いふいて握られた鉛筆トンボは加工前の塑樹幹を屈けて

> いく息を吐くんだ。うん、いいじゃないか私やつぱり読めてるじゃん。本当にこんなにまでもね、うん。頬杖を▲3八銀△8四香打▲2九歩打△1六竜▲4七銀(38)いてヘルシア緑茶の空ペットボトルは8日分を切り取り並べ足踏み蓋付きゴミ箱内で陽射しの染みを横切らせている。事務的にタウンページへ埃筋を受けた中背筆筒が筆記用具立て▲4七銀(38)△2五竜(16)▲1一竜(32)△2九竜(25)▲7九香打△5四金(63)▲4一歩成(44)から砂消しバーの唐通りを発音している。銅輪鎖で束ねた自転車鍵が枝豆キーホルダーの布地に▲4一歩成(44)△6五金(54)▲5一ヤ(43)△7六金(65)▲7七金(68)ぶっかり黒面机を掃きなびき終え糊口を揃えた7イレブン野線ノートが一点の媒介からエディプス期以前の概念記憶すら投射していく。空白の掛け金を▲7七金(68)△同金(76)▲同玉(78)△5一角(62)▲6一ヤ(63)△5七歩打▲6八金(58)はずし見開き紙面に隠蔽された奥底の普遍体系が覗き概念のまま模倣していく。▲6八金(58)△4一歩打▲7一ヤ(63)△同金(61)▲6一ヤ金打△9九金打▲同角(88)転ぶ筆圧く往還させるMONO消しゴムのカスが直観に興り誤謬を誤謬のまま抱え扁桃体に浸る超える固有世界との共栄を果たすのだ。頭骨を緩める皮膚内で▲同角(88)△7九竜(29)▲7八銀打△8五香打▲7六金(66)恒星陽太に接する顔を振り向ける対位世界が見え方を捉

> え方を重層の棚に注ぐのだ。中身は、容器を変質させる。  
 > 衣服を隠す裸体 > ▲7六金(66)△8七香成(85)▲6六玉  
 > (77)△6八竜(79)▲2一竜(12)△7八竜(68)▲5一竜(2  
 > )通俗的に通俗を脱し救済される象徴的結節点が超えた  
 > 生命集合体として探究するままの真理で到達していくの  
 > だ循環し絡み合うのだ。理性的な解明を成しうる原初余  
 > 韻に総体を▲5一竜(21)△7六竜(78)▲5七玉(66)あま  
 > ねく指紋垢が吸う鉛筆距離を反主観は再強化していく。  
 > 安寧の心地に浸らせる注界を剥ぎ録面終了 LED点滅ラ  
 > ンプが▲5七玉(66)△6一銀打▲7二歩打△同玉(82)▲  
 > 8一竜(51)むしろ取り重ねたブルリングの湾曲立面に滑  
 > る。介添えして誇示展開を進捗させる▲8一竜(51)△7  
 > 一金打▲9一竜(81)△9八成香(87)▲3三角成(99)クロ  
 > ツポドネクタイの畳と盤上へ擦れて▲3二角成(99)△8  
 > 九成香(98)▲6六金打△7八竜(76)▲5五馬(33)くく長  
 > さが付帯的な特質の内に普遍本質を描き出す。銀将の空  
 > 打ちさえをも駒音高く慶長17年の一世名人初代大橋宗  
 > 桂からの類型連鎖を体現して▲5五馬(33)△6五桂打▲  
 > 同金(66)いく紡ぎは満面に神的諸相の可視となる。対局  
 > 後ののみ出す熱情が燐明し続ける奨励会二段記録係りで  
 > さえ既知時空連続体の膚選を更新していくのだ。青ノー  
 > ト端に増殖する81 升記号と楽音譜解析とひふみんスマ  
 > イルとが悠然と43▲3六飛(38)44△5一金(42)45▲3  
 > 七桂(29)せめぎ合い闘ぎ合いつ思わず棋譜を再度、手に  
 > してみるんだ。うん、67▲3五銀(24)68△3一飛(34)6  
 > 9▲2六飛(36)70△4四銀(43)71▲同銀(35)72△同角

> 11)73▲2三飛成(26)やっぱり美しいや。確かに美麗な  
 > んだ139▲6六金打140△7八竜(76)141▲5五馬(33)  
 > 142△6五桂打143▲同金(66)144△投(まじ143手  
 > )けれども、うん。1▲7六歩(77)2△3四歩(33)3▲2  
 > 六歩(27)4△4四歩(43)5▲2五歩(26)澁刺さと共に高  
 > らかに宣言したいのにね、うん。なんだか譜面と差異が  
 > 最後だけあるよね読み解けないよね。▲6六金打△7八  
 > 竜(76)▲5五馬(33)△6五桂打▲同金(66)灰砂手を薙ぎ  
 > 払う爛熟した陽太自体の息を吸い取っている141▲5五  
 > 馬(33)142△6五桂打143▲同金(66)というのに声帯ま  
 > で見えているのに隔絶感が半端じゃないね▲同金(66)っ  
 > ん轟くのね。ひふみん手中にある天蓋宙開かれています  
 > 燦下(こ)で投了って何でなの▲同金(66)これって本当な  
 > の私だけ辿り着けないのってどうなの解説したいよ出  
 > 来ないよ美が確かに存在しているのに▲同金(66)ねえ  
 > 一体どうやったら詰むの。  
 > [ #03 ]  
 > right! (12) | comments(1573) | share(1)  
 > Commented - 8 by — at 2014-09-11 02:59 x  
 > キタロ w ♪ ( ♪ ) ♪  
 > Commented - 8 by — at 2014-09-11 05:21 x  
 > キタロ w ♪ ( ♪ ) ♪  
 > Commented - 8 by — at 2014-09-12 14:28 x  
 > ひふみんひふみんひふみん!! ♪ ( ♪ ) ♪  
 > Commented - 8 by — at 2014-09-14 12:06x

>> 加藤先生はやむら王にも勝ちます。シエア致します。 <  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 17:10x  
 >> ...(;。H。)H <  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 17:11x  
 >> >23様。本作品は確かに棋譜をコピーして頂きますが棋  
 >> 譜の著作権を侵害する目的で制作しておりません。もし  
 >> も何か、うぢましたら事務所までメールいただけたら  
 >> と思えます。よろしく、お願い致します。しんじつ君拜  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 17:12x  
 >> [哲学]ふんふんふんふんふんふん(。・。・) <  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 17:13x  
 >> [哲学(笑)]おはようございますか?w(。・。・) <  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 23:02x  
 >> イーネ!(。・。・) <  
 >> Commented - 8 by — at 2014-09-14 23:02x  
 >> ↑↑↑H\nダロww(。・。・) <  
 >> \* <  
 >> <a href="http://sns.blog.jp/s-t/archive">月別アーカイブ</a>  
 <a href="http://sns.blog.jp/s-t/access">友達一覧</a>  
 <a href="http://sns.blog.jp/s-t/s.b.friend.mail">申請</a>  
 <a href="http://sns.blog.jp/s-t/link/  
 www.japan.poets-association.com/">  
 リンク [日本現代詩人会] </a>  
 <a href="http://sns.blog.jp/s-t/Neo-Amazonz/ID=202">  
 詩集「市内二十目のパンターズ」(1,500) click 購入 /

詩集「202」(1,800) click 購入 [注目 おすすめ レア] </a>  
 >>  
 >>  
 <a href="http://sns.blog.jp/sinji-tu/s-t/bottom/ID=202">  
 しんじつ君日和 Ads by Gooogle </a>

click >> @ → Logout

o

手の目

☆「わたしはどうして」

——あなたは どうして将棋を指すの？

そう言葉を漏らした花村奈月は、まるで自分がそう呟いた事にも気付かない様子で、じつと盤面を見つめていた。

その声はあまりにも小さく、周囲にいた人間の誰の耳にも届いてはいなかった。言った本人の奈月にすら、その言葉には気付いていない様子であった。

でも、わたしには聞こえた。

はっと顔を上げたわたしに一斉にフラッシュが炊かれて、その眩しさに思考が拡散する。

わたしは、どうして将棋を指すのだろうか？

その問いに答える事が出来ないままに。

女流名人戦第四局の感想戦だった。カド番のわたしは劣勢の将棋を何とか粘り、逆転して防衛への望みを繋いだ。初タイトルを殆ど手中にしながらも、それを手にする事が出来なかった挑戦者の奈月は、その顔に疲労の色を見せながらも淡々と先程の将棋を振り返っていた。

そして、自ら優勢で迎えたある局面、奈月が痛恨の失着を指した所まで行った時、彼女の手は止まった。局面そのものは確かに奈月の勝ちが存在する場所だった。しかし、直前にわたしが放った勝負手により盤上はまだ混沌としていた。難しい、とても難しいが、必ずどこかに奈月の

勝ちはある。棋士であれば誰もが直感しただろう局面において、奈月は一分将棋の間に正解を見つける事が出来なかった。結果、勝利はわたしの手に転がり込んだ。

そんな局面を、奈月はただじつと見つめていた。

その瞳には後悔、悲嘆の色は無く、ただただ真つさらで純粋な瞳だった。

そして彼女は呟いたのだ。

あなたは どうして将棋を指すの？ と。

わたしが どうして将棋を指すのか、を一言で語るのには難しい。

「そこに山があるから」というのは、ジョージ・マロリーの名言であるが、ではわたしが将棋を指すのはそこに盤と駒と、そして対局相手がいるからなのだろうか？

完全に的外れとまではいわない。幾ばくかの真実は確かに含まれているだろう。それらが無いと確かに将棋を指す事すら出来ないわけではある。しかしことわたし自身についていうならば、やはりそれではいささか言葉足らずな気がする。

では、どうしてわたしは将棋を指すのか。

生涯を掛けて八十一マスの迷宮を放浪する事を選んだのか。

わたし、新庄透子という十六歳の小娘が女流名人位という地位にいて、そして同い年の挑戦者である花村奈月からカド番を凌ぐに至ったのか。

どうして？ という問いに対する答とは少し違うかも知れない。

ただ、わたしのはじまりといえる景色は確かにあって、わたしの物語はそこからスタートしている。

今も思い浮かぶのはひんやりとしたマグネット駒の温度と、それを動かす時のぺたりぺたりとした感触。病室の白い壁とベッド、仄かに漂う

ダリアの香り。

そしてその盤面を見つめる少女、水瀬漣。

七年前のこの景色こそが、わたしの原点だ。

★「将棋が好きな人が好き」

わたしの父は将棋を指さない。多分いまだに金と銀の動かし方の区別がつかない。母も同様である。では祖父母はというと、これも同じ様なもので、趣味はボードゲームではなくカラオケであり、週末に通うのは将棋道場ではなくカラオケ教室である。そんな家庭環境にあったわたしに将棋なる古式ゆかしいゲームを教えたのは誰かというと、たまたま入院先で会った一っ年以上の女の子である。

彼女の名前は水瀬漣。わたしの親友であり、ライバルであり、そして師匠である。

入院生活二日目にして、わたしは退屈の極みにあった。初日は正當に学校を休んでただのんびり出来るとは、なんと幸運なのだろうと思ったが、すぐに飽きてしまった。持ってきていた漫画も一日目で全部読み終えてしまっていたし、テレビ番組も特に気を引くものはなかった。そうすると、何もやる事がない、ただ膨大な時間だけがわたしに残された。小学四年生に進級したばかりの四月。もう出鼻を挫かれた感覚しかない。

窓の外を眺める。

わたしの友人達は何をしているだろう？ 当然普通に学校に行って授業を受けているのに決まっている。木曜日の三時間目——ということはある算数の授業だろうか。わたしは算数が嫌いではない。普通に解けるから。

最低でも九〇点を下回る事はない。国語だとなかなかそうはいかないのだ。算数はちゃんとやればちゃんと解ける。だから嫌いではない。でも、そのうち進学して数学にバージョンアップしたわたしの手に負えない難易度に達したら、多分嫌いになるだろう。と、そんなことを考えているうちにわたしは眠っていた。

さて、目が覚めると、先程まで無人だった隣のベッドに見知らぬ女の子がいた。元々ここは二人部屋だったので、誰かしらいる方が自然ではあるのだが、つい先程まで誰もいなかったのでわたしは少しばかり驚いた。

どれだけ眠っていたのか分からないが、その間に新人さんが来たらしい。まあ、私も新人みたいなものだけでも。

とはいえ、寝起きだったので身体の方はまるで反射的な働きを示さない。結果として眼だけを薄く開いて少女の姿を眺めるという形になった。

長い髪をツインテールに結んだ可愛らしい女の子だった。年齢はわたしと同じくらいだろうか。パジャマ姿の上半身を起こして、セットされたノートパソコンの画面を何やら真剣な顔で見つめている。

ああ、パソコンは暇つぶしにいいかもしれない。後でママが見舞いに来たらねだってみよう。パソコンなんて今まで触った事もないけど、この機会に使える様になるかもしれないし。まあそれでも難しかったらこの子に聞けばいいや。何か詳しそうだし、これをきっかけにお友達になれるかもしれないし。ところでこの子は何を見てるんだろう。とても集中してるみたいだけど——と、いう辺りまで考えた所で、身体の方も目が覚めたらしい。もそもそと四肢を動かす。そのままわたしは起き上がった。

イヤホンをつけてパソコンの画面に集中している少女は、わたしの覚醒にまるで気付く様子がない。わたしはそろりと彼女のベッドの横に立

ち、パソコンの画面をのぞき見る。

「どうやらボードゲームらしい。マス目に漢字で金とか香とか書いてある駒がばらばらと置かれてある。多分正位置の方が彼女の側なんだろう。逆位置が敵の駒、とそこまでは何となく分かる。そしてそれを交互に駒を動かして行って——どうするのだろう。まあ多分どっちかが勝ったり負けたりするのだろうけど、よく分からない。」

「分らないので思い切って聞いてみる。」

「ひゃうっ！」

突然声を掛けられた少女は素っ頓狂な悲鳴を上げた。そんなに驚かれるとは思わなかったのでわたしも思わず眼を丸くする。

少女は驚いたような、ぼかんとした顔でわたしを見つめた。

色の白い、どこか透明感のある少女だった。わたしの名前も透子だけだけど、どこぞの透子さんなんかより、この子の方がもっとずっと透き通っている——そんな事を思った。

「あ、ごめんなさい。驚かせちゃって——」

しばし呆然としていた少女は、わたしの言葉にはっと我に返る。

「じ、時間！」

「え？」

少女はパソコンに向き直って、慌てた手付きでマウスを動かした——が、程なくがっくりと項垂れた。

嫌な予感。これはもしかして、あれか——

「——間に合わなかった？」

わたしは恐る恐る尋ねる。

オンラインのゲームという事は、おそらくプレイするのに制限時間があるのだろう。そしてわたしに気を取られている間に、時間切れになってしまったと、多分だがそういう事だろう。

「うん——切れちゃった」

やっぱりか。それは何というか——申し訳ない事をしてしまった。

少女はしばし悲しげな顔で画面を見つめていたが、おもむろにキーボードに何やら文章を打ち込みだした。

Ren:ごめんなさい。切れちゃった。

Tukimi[usagi]:気にしないで。またお願いします。

Ren:お願いします。

画面下部にこんな文字が躍っている。対戦相手の人に謝っているらしい。これはますますもって申し訳ない。

「えっと、ごめんね？ わたしのせいで負けちゃったんだよね」

パソコン内の会話が一段落したのを見計らってから、わたしは改めて謝った。

「ううん、気にしないで——ずっとお昼寝してるって思ってたから、びっくりしちゃった」

少女はそう言ってくすくすと笑った。その笑顔に、何だかわたしは救われる様な気持ちになる。正直、取り返しの付かない事をしてしまっていて、完全に嫌われてしまったのではないかと、内心びくびくしていたのだ。

「わたしの名前は新庄透子。透子でいいよ——あなたは？」

「わたしは水瀬れん。れんはね、さんずに連絡の連、しんによには点をもう一つ書くの」

「わかんない」

少女はちよつと困った顔をしてから、何かを思いついたようにパソコンで何やら文字を書き始めた。ペイントモードらしい。

画面には《漣》と、ある。

「なるほど、漣ね」

知らない漢字だけど、これでれんと読むらしい。一応理解は出来た。そう言えば、先程の画面上の会話も Ren だったか。

「それで、何をやってたの？」

わたしはペイント画面の横に残っている、何かの盤を見ながら尋ねた。今は先程まであった漢字の駒は置いてない。がらんとした茶色のマス目が残っているだけだ。実をいうと、このゲームに全く見覚えが無いわけではなかった。テレビで放送されているのを見かけた事があった気がする。そう、日曜の朝のNHKでやってるあれだ。

ここまでは思い出せたがそこから先が出てこない。何だったっけ。

「将棋だよ」

漣は短く答えた。

「ああ！」

なるほど、そのゲームは聞いた事がある。将棋か。謎が解けてすっきりした。昼休みに一部の男子もやってた様な気がする。

「日曜の朝にやってる小難しそうなやつね！」

失礼な事をいうわたしに漣は苦笑する。

「あれ、漣はそれをやってたの？」

「うん。そうだよ。ネットで対戦出来るの」

「へえー」

わたしはこの時、次に「難しそう」とか「分からない」とか、そんな感じの事を言おうとしていたのだと思う。しかし、その言葉がわたしの

喉から出てくる事はなかった。

漣が口にした言葉のせいである。

「透子もやってみない？」

「えっ？」

予期せぬ一言にわたしは思わず戸惑いの声を上げた。先ほど、漣がプレイしているのを眺めても、たまに日曜の朝に放送されているのを見ても、将棋というゲームに対するわたしの感想は一つだけだった。

——よく分かんない。

だからわたしはこの瞬間まで、将棋をやっている自分の姿というものがまるでイメージできないでいたのだ。

「わたしは将棋が好きな人が好きだから、透子も将棋を好きになつてくれたら嬉しいな」

そう言った漣の表情は、何だかとても希望に満ちてキラキラしていて、とてもじゃないが「わたしには無理です」とは言えなかった。「じゃあ、ちよつとやってみようかな」とかそんな事をもごもごと口にしたのだったと思う。

これがわたしと水瀬漣との——ひいてはわたしと将棋との出会いである。

☆「勝つのは最後で」

対局場の窓から見える外の景色は、息を呑むほど美しかったらしい。瀬戸内の海は、対局開始時の朝方は静謐な佇まいを見せ、夕刻に将棋が佳境に入ると共に沈みゆく夕日が海上をオレンジ色に染めていたそうだ。そんな景色を背景に将棋を指すわたしと奈月はとても絵になっていた

た、と同行した記者さんが話していた。

元々あの部屋は結婚式場で、そこに畳を敷いて将棋の対局場を作ったのだから、その景観も頷けるだろう。その美しい景色はきつと、ロマンティックな婚礼を演出するのに一役買ってくれるはずだ。

わたしはというと、対局中に花鳥風月に思いを馳せる余裕は全くないので、窓の外の景色の変化などまるで気がつかなかった。一応、前日に検分(両対局者が気分良く将棋を指すために対局場のあれこれをチェックする)した時に窓の外を見てはいるのだけど、何だか曇っていてよく分からなかった。

だからというわけではないのだけど、後夜祭という名の関係者同士の打ち上げが終わってから、真っ直ぐ自室には戻らずに、何となくホテルの外に出てみた。

女流名人戦は例年一月の半ばから二月末くらいまでの期間に行われる冬の棋戦である。第四局まで終わった現在も春はまだ遠く、夜中の二十時過ぎに屋外に出るのはかなり寒いではなからうかと思つた。しかし、いざ外に出てみると風が殆どなく、思つたほどの寒さはなかった。むしろ、この冷たさが心地よくすら感じられた。

わたしは本当のところかなり寒がりなので、もしも身も凍るような寒さに襲われていたら、即座に回れ右をしていただろう。それが冬の夜の海辺を、大して厚着もせずにはぶらついてるのは自分でも不思議だった。対局後数時間経つたとはいえ、厳しい勝負を終えたわたしの神経はまだ昂ぶったままでいるのかもしれない。

波がテトラポットを叩く音が聞こえてくる。わたしは適当な場所で手すりにもたれて、目を凝らして海の方を見た。

海は真つ暗で何も見えなかった。

夜の海が見えているのではない。単に何も見えないといった方が正し

い。海の方に光源がないのだから当然である。情緒も何もあつたものではない。これではまるでお話にならない。

わたしは思わず苦笑する。  
「何も見えないじゃないの」

どうやら随分頭の悪い行動を取ってしまったらしい。これで風邪でも引いたらますます悪い。プロ意識以前にただの馬鹿である。

美しい景観を見たいというなら、どうやら明日早起きして日の出でも観賞するしかなさそうだ。そこまでして見たいかというのと、別にそれ程でもない。

どうやらわたしは美しい景色と縁がなかったらしい。

そう結論づけてホテルに帰ろうとした時、ふと人影を見つけた。街灯の白い光に映し出されているのは少女の影だった。わたしはその姿に見覚えがあつた。

何せ今日一日中、彼女と顔を突き合わせていたのだ。見間違うはずもない。女性にしては長身な体格にショートカットの髪、どことなくきりつとした横顔——花村奈月の姿がそこにはあつた。

「花村さん？」

声を掛けられた奈月はゆるりと私の方に向き直る。

「あれ、新庄さん？ どうしたんですかこんな所で」

暗い海を背に奈月は不思議そうに尋ねる。それはわたしだつて聞きたい事だ。

「ああ、ちょっと風に当たりに——」

夜の海を見に来たとは言わなかった。

「花村さんは？」

奈月は少し恥ずかしげな様子で頭をかく。

「景色が凄く綺麗だったつて聞いたから、ちょっと海を見ようと思った

のだけど——」

「何も見えませんか」

「うん。参ったな。馬鹿みたいだ。私」

私は肯定も否定も出来ずに、曖昧な微笑みを浮かべるしかなかった。

思わず話しかけてしまったけど、どうしよう。奈月は関西の所属なので、関東出身のわたしとは殆ど接点がなく、共通の話題が思いつかない。しかも、お互い二週間後には女流名人戦の決戦が控えている。変な事を聞くと相手の腹を探っている様な気がしてやりづらい。

見て見ぬ振りをして黙って帰るのが、気遣いというものだったかもしれない。

そんな事を思っただけで少し困っている私の顔を、奈月は特に表情を変えずに事なくただ見ている。冷静、というよりはただ単にボーッとしてるだけの様に見えるけど、どうなのだろう。

少なくとも今の奈月の表情には、対局時に見せる日本刀みたいに鋭い気配はなく、どちらかというと、木訥とした印象を受ける。

鞘に収まった刀、と言ったところだろうか。

「あの——」

では、これにて失礼——と、するのがこの場では多分自然で正しい行為なんだろうと思う。でも、わたしは感想戦の時からずっと気になっている事があった。

それは今も消化されず、まだわたしの中で燻っている。

本当に燻っているだけの、弱々しい残り火だから、わざわざ消火しなくても時間と共に消えて無くなっていたらどうだろう。

でも、予期せぬ場所で奈月に会ってしまったから、つい聞きたくなかったのだ。

——あなたは どうして将棋を指すの？

感想戦の時、そう呟いた奈月の真意を。

「うわ——あれ聞こえてたんですか？」

問われた奈月は恥ずかしげに頭をかいた。

「えっと、ごめんなさい。あれ本当は心の中で言ったつもりだったんですけど、声に出ちゃってたんですね。あなたって、新庄さんのことじゃないです。失礼しました」

暗くてよく分からないけれど、奈月は多分赤面していると思う。まあ、私でも心の声が思わず口に出て、それを人に聞かれたら結構恥ずかしいものがある。

「あなたは どうして将棋を指すのって、言っただけですよ」

私は頷く。自らが悪手を指した局面を見て、奈月はそう呟いたのだ。

「あの局面、ちよっと不思議な感じでしたよね。ずっと激しい流れが続いていたのに、新庄さんの一手で一瞬だけ動きが止まったみたい——」

「そう、ですね」

指した本人である私も、何だか不思議なものを見た様な気がしていた。

不規則でばらばらに動いていた粒子がその一瞬だけ凍り付いた様に動きを止めたみたい。まるでビデオの一時停止ボタンを押したみたいに、駒達の動きが静止していた。

「それまでは何となく、こつちに勝ちがあるんじゃないかって感覚はあったんですけど、あの局面を見たら訳が分からなくなっちゃって。時間も無いし、焦って勝ちに急いじゃったんですよ。もう一手、落ち着いた手を指すのが正解だったのに、その手も見えていたのに指せませんでした。純粹に局面だけを見たら多分正しく指せたはずなのに、余計なことを考えちゃったんです。こんな事じゃあ駄目だなあって。だから、自

分に言ったんです。あなたは どうして将棋を指すの？ って——」

訥々と、奈月は言葉を紡いでいく。きっと彼女は本音を語っている。駆け引きとか変な気遣いとか、まるで関係なく、彼女は思った事をそのまま言葉にしているのだ。

だから、わたしはこの話を聞いてはいけない——と思った。

全てが終わってから第三者に語るならともかく、まだ第四局が終わったばかりで最終局も控えているのに、そういう微妙な対局心理をあるう事かわたしに語ってしまうのは、きっと勝負の上でマイナスだと思う。

わたしの方はそういう事を語るつもりはさらさらない。だからわたしだけがこんな事を聞くのは不公平な事だ。

少し強引かもしれないけど、ここで話を切つて帰ろう。

そう考えたその時、奈月の一言にわたしは思わず固まった。

「勝つのは最後でいいって、いつも思ってるのに——」

「えっ？」

それは、第三者が聞いたなら特別変わった言葉ではないのかもしれない。ああ、花村奈月はそういう事を思っているんだな、とそれだけの事だろう。

しかし、わたしにとってはそうではない。

それは、忘れられない言葉。

——勝つのは最後でいいと思うんだ。とりあえず負けなければ将棋は終わらないし、そうしたら、相手の人の事も将棋の事も、もっと考えられて、それで分かる事もあるんじゃないかな。勝つのはそれからでもいいんじゃないかなって。

それは、漣がわたしに言った言葉。今でもわたしの中に大切に残っている漣との思い出。

どうして、それを奈月が？

「ねえ、花村さん。今の言葉——」

わたしが尋ねようとした、その時。

「くしゅん！」

不意に、奈月がくしゅんを身震いした。

「あれ、何か急に寒い」

「だ、大丈夫？」

「大丈夫じゃない、かも。やばい。師匠に怒られる——」

「ホテルに戻つて暖まった方がいいですよ」

「う、うん」

奈月は頷き、小走りにホテルの方に駆けていったが、途中で立ち止まつてわたしの方に振り向いた。

「えっと、今日はありがとう！ 最終局、いい将棋にしましょうね！」

そう叫んで、わたしの返事を待たずに走り去つていった。わたしは曖昧に手を振る事しか出来なかった。なんとというか、無邪気な娘である。一人であれこれ考えているわたしはなんなのだろうという気にさせられる。残されたわたしは暗い海を見て溜め息を吐く。

奈月と話したら、逆に分からないことが増えてしまったような気がする。

わたし自身の事、将棋の事、そしてこれからの事も、何もかもがこの海のように真つ暗で、先が見えないでいる。

わたしが将棋を指す意味はなんだろう？

もう一度自分自身に問い直す。

どうして今更迷う事があるのだろうか。  
答ははっきりある。

わたしは誓ったのだ。あの時、漣に。  
わたしが漣の代わりに指すと。漣の分まで勝ち続けると、誓ったのだ。  
暗い海に、波の音だけが聞こえてくる。

出会ってから七年——わたしは漣という字が『さざなみ』と読む事を  
知った。

★「仲間入りだね」

《飛車・縦と横に何マスでも動ける。駒は飛び越せない。成ると竜王。

「飛車は十字に使い」》

漣が作ってくれたメモカードをそれぞれ順番に読み進める。

わたしがやってみようかなと言うが早いか、漣は厚紙を切り取って  
《駒の動かし方カード》なるものを作った。まさに目にも取らぬ早業で  
ある。

文字とは別に駒のイラストがあり、進める方向に矢印がついていてと  
ても分かりやすい。しかもご丁寧に格言らしきものまでついている。ま  
あ、十字に使えと言われても意味が分からないのだけど。

《桂馬・縦へ二、横へ一マスの位置へ移動できる。駒を飛び越えること  
ができる。成ると成桂「桂の高飛び歩のえじき」》

桂馬は何だかトリッキーな動き方をするらしい。これはこれで面白い  
のかもしれない。

「動かし方覚えるまではこれ見ていいんだよね？」

漣は頷く。果たして覚えられるだろうか。でも、せっかくここまでし  
て貰ったのだし、ある程度はちゃんとやらないと悪い気がする。

何より漣の期待に満ち溢れた瞳で見られると、とてもじゃないが逃げ  
られそうにない。

「えっと、あれどこに置いたかな」

カードを練りながら暗記に勤しむわたしを尻目に、カードを書き終え  
た漣は床頭台をあさくって何かを探している。

「ああ、あつたあつた」

嬉しげな声に手元を覗き込むと、漣はマグネット将棋盤を取り出して  
いた。電車旅行中の移動の時なんか使う、五百円くらいのあれだ。わ  
たしも同じシリーズのマグネットオセロは持っていた。ちなみにわたし  
はオセロでほとんど負けた事がないのがささやかな自慢でもある。

「実はさつき売店で買ったの」

「そうなんだ」

パソコンでプレイ出来ていたのだから、あえてマグネット盤を買う理  
由が思いつかないのだけど。たとえマグネット盤でも、実物の駒と盤を  
手元に置いておきたかったということなのだろうか？

それならばかなりの筋金入りである。

——いや、分かってた事だけ。

将棋についてわたしはまださっぱり分からないけど、漣がとにかく将  
棋が好きで好きでたまらない事だけはよく伝わってくる。

漣は新品のマグネット盤を開封すると、駒を丁寧な手付きで並べ始め  
た。

玉が下段の真ん中、両隣に金、さらにその横に銀、桂、香、左桂の上  
に角、右桂の上に飛車、三列目に歩を九枚並べる。相手陣も同じように  
並べる、と。

「並べ方も覚えておかないといけないね」

「ランダムに置かれているわけじゃないから、すぐに覚えられると思う

よ」

「なるほど」

わたしは盤面をじっと見つめた。全部が対称に並んでいて、これはこれで綺麗な気がする。

案外、この世界は初めから完成しているのではないだろうか。このまま戦いが行われなければ、世界は平和なのに。しかし欲があるのが人の常、土地を広げ財産を集めるには、目の前の敵を打ち倒さねばならない。やらねばやられるのだ。ああ、なんと無情な弱肉強食の世界。

「自由に動かしてみて」

「え？」

一人で妄想に耽っていたわたしに漣が思わぬ言葉を掛ける。

「これを？ わたしが？」

「うん」

漣は笑顔で盤面を示した。

最初の一手を指せという事らしい。まあ確かに、カードを睨んでいるよりは、実際に駒を動かしてみた方が覚えは早いのもかもしれない。

とはいえ、どうしようか。何か適当に動かしても別に構いはしないのだからうけど。

——最初の一手、ねえ。

わたしは改めて盤面を俯瞰する。マグネットの駒達は整然と並んでいる。九枚の歩、飛車、角、金、銀、桂、香、そして玉。この相手方の玉を取るこれが最終目標であるらしい。

駒の動かし方カードを再確認。

《歩・前に一マス・成るとと金・「一步千金」》

一番前方に並んでいるのだから、とりあえず歩を動かすのが正解だろうか。桂と角は歩が邪魔で一マスも動かせない。桂以外の駒は、他の駒

を飛び越える事が出来ないのだから、歩がここに並んでいる限り何も出来ない感じだ。

多分、歩だろう。

それを心に留めつつも違う駒を確認する。飛車も初期位置では横にしか動かせない。横に行って何になるのだろうか。カードにも「飛車は十字に使い」と書いてあるし、一の字としてしか使えない今、飛車を動かすのは違う気がする。却下。

金と銀はどうだろう。仮にこれを動かすとして、左右どちらの金銀を、どこに動かせばいいものかさっぱりイメージできない。これは保留。

香は一直線に進めるらしいけど、今は前に一マスしか動かせない。それが無意味だということは初心者以下のわたしでも分かる。論外だ。

——やっぱり歩かな。

わたしはそう結論する。

ではどの歩を動かせばいいだろうか？ 何せ九枚もある。どれを動かしても同じというわけにもいくまい。

ここで気になるのは飛車と角の存在である。この二つは他の駒より明らかに強力な働きを持つ。最初の方針としては、これらが使えるようになる歩を動かすべきかもしれない。

すると、角の斜め上の二枚と、飛車の上の一枚ということになる。

しかし角の左上の歩はどうだろう。何せ端である。これを動かして角の道を開いても、すぐに行き止まりだ。それは何だか効率がよくない気がする。候補から外す。

残ったのは角の右斜め上の歩と、飛車の上の歩である。これらの比較はさすがにわたしには全く分からない。飛車と角のどちらかを先に使いたいとか、そういう話なのだろうか。

でも、最初に角の道を開いたとして、相手が次に何か指してまた自分

の番になれば、今度は飛車先の歩を動かさばいいわけで、そしたら結局どちらが先でも同じだ。じゃあどちらでも構わないのだろうか？

何だか混乱してきた。

まあ、そもそもこの二つに絞った推測そのものが間違えているのかも知れないけれど。

わたしは考えに考えて、角の右斜め上の歩を動かした。

漣は感心したように二、三度頷く。どうやら変な手ではなかったらしい。わたしはホッとした。

「ちようこうしてたねえ」

ちようこう？ ああ、長考か。まあ駒の動かし方もあやふやな初心者最初の一手にしては、時間を掛けすぎたかもしれない。

昔からわたしはすぐ物思いに耽る癖があった。

「角道を開けたけど、どんな事を考えてたのかな？」

漣が興味深そうに尋ねるので、わたしはさっきまで考えた事をそのまま語って聞かせた。

「——と、こんなことを考えたのだけど、変だったかな？」

漣はすぐには応えなかった。まるで夜道に幽霊にでも出会ったような顔で、呆然とわたしをみつめている。

「透子は初心者なんだよね？ 駒の動かし方も知らないって」

「うん」

「それで、そんなに考えたの？」

「まあ、一応——そんなに変わった？」

漣の反応にわたしは幾分不安を覚えながら聞き返す。

漣の顔に色が戻る。その表情はまるで宝物を見つけた子供のように輝いている。

「凄い凄い！ 透子は天才かもしれない！」

「え、えええ？」

漣はわたしの手を取って振り回す。まるで嬉しくってたまらない、といった様子だ。

天才かどうかはともかく、わたしも褒められて悪い気はしなかったの  
で、「そんな事ないよー」と謙遜しながらも、ちよつぷり誇らしい気持ち  
ちになっていた。

しかし、漣の発想はわたしの少し斜め上を行っていた。

「これで透子も棋士の仲間入りだね！」

「えっ？」

誰が？ 何の？

「棋士って将棋をする人の事だよね？」

「うん」

「わたしがそれに仲間入りしたって？」

まだわたくし、駒の動かし方も覚えていないのですけど。動かし方カ  
ド没収されたらどうにもならないのですけど。動かし方カ  
しかし漣はわたしの困惑を尻目に「そうだよー」と楽しみに言うだけ  
だ。

「歩を一マス動かしただけでなれるものなの？ 棋士」

尋ねるわたしに漣は違う違う、と首を横に振る。違うのか、ますます  
分からない。

「えつとね。透子は今、指す前にすつごく考えてくれたでしょ」

「うん」

正しいか間違えているかはともかく、久しくなくらい真剣には考  
え  
た。最初は軽く眺めていたのが、いつの間にか没入していたと言った方  
が正しいか。

「考えた内容も凄いんだよ。透子にはまだ分からないだろうけど、駒も

動かした事がない人が考える事じゃないんだから」

「そうなんだ」

そこまで言って貰えるなら、わたしも必死に考えた甲斐があるとういうものだ。

「でも大事なのはそれじゃなくて、まだ初心者で駒を一度も動かした事もないような透子が、盤上から最善の一手を見つけようとした事——これって本当に凄い事だと思うの。普通は何も考えないで、カード見ながら適当に動かすよ？」

「そうなのかな」

人によると思うけど。

しかし漣の輝く瞳を見ると、そんな事はいえなかった。

「そうだよ。だからね、盤上から最善の一手を見つけようとした透子は、もう棋士の仲間入りをしたんだよ」

そう言われてもまるで実感が湧かないのであるが、漣は本当に嬉しそうなのでまあいいか、という気分になる。

そうしているうちにわたしの方にもちよつとした心境の変化が訪れていた。

はつきり言って最初はあまり乗り気ではなく、何となく断れないままに始めたわたしが、いつの間にやら、せつかくだからちよつと真剣に将棋をやってみようかと、そういう気持ちになっていた。

天才というなら、漣は人をやる気にさせる天才かもしれない。

話すうちに漣は小学五年生で、わたしよりも学年が一つ上だということとが分かった。話した時の感じから何となく同級生の様な気分だった。それに小柄で華奢な体つきから、年長者だとはまるで考えていなかった。なので、学年が上だと聞いた時は驚いた。

とはいえ、それで何が変わるというわけでもなく、漣の頭の中を占めているのは大体将棋の事で、わたしと会ってからは、初心者への指導プランを練ることにご執心の様であった。

わたしとしては危惧していた『駒の動かし方を記憶する事』については、案外簡単に覚えられた。カードを見ながら何回か適当に動かしていたらいつの間にか覚えていた。丸暗記しようとしたらこうはいかなかっただろう。自転車と一緒に、こういうのも身体で覚えた方がいいのかもしれない。

駒の動かし方を覚えただけで満足したわたしは、オセロも得意だし元々ボードゲームに適正があったのかもしれないあと、そんな事を考えていた。

しかし、漣がその程度で満足するはずがなく、わたしを待っていたのは次の段階へのステップだった。出会った翌日の時点で既に漣の頭の中には、どこぞの鬼コーチの如き育成プランが出来上がっていたらしい。それから入院中は、大体ずつと将棋をしていた様思う。

もともと、私と漣とは実力に差があり過ぎるので、まともに勝負をするわけではない。いわゆる指導的対局というやつだ。将棋のルール、考え方、手筋(RPGでいうところの魔法技みたいなものらしい。よく分からない)、相手玉の詰まし方。諸々必要なことを懇切丁寧に教えてくれた。

対等に勝負が出来なくても、漣はリアルな人間と将棋を通して関わることが嬉しくて仕方がないらしく、わたしが新しい事を覚えたり上達したりすると、大袈裟な程に喜んだ。

わたしの方も、漣のそういう無邪気な反応を見るのは楽しかったし、自分が上達する度にこんなに喜んで貰えて気分が悪がるはずもないので、かなり積極的に将棋に取り組んだ。

退屈で仕方がなかった入院生活が、期せずして楽しい時間にならなくなっていった。

純粹に、ただ楽しさだけについて思い返すとすれば、多分この頃が一番楽しかったと思う。

辛い事とか苦しい事とか、何にも知らずに、ただこの時間が永遠に続くような気さえていた。もちろん、そんなはずはない。どんな時間にも終わりの時は来る。ただ、この時間が、いつかくる本当に苦しい時に支えになってくれるのだと思う。

「うむ、ありがとう」

元々、わたしの入院は二週間ほどの予定だった。幸いにして何ら不測の事態は起こらず、予定通りに退院する運びとなった。

「あーあ、透子もう退院しちゃうんだ。あーあ、あーあーあー」

漣はベッドにごろりと横になつて詰まらなそうに言った。ベッドから移動するのはもっぱらわたしの方で、漣は一日を通してあまり動かない。

「漣先生、可愛い弟子の退院なんだから一応形だけでも祝おうよ」

「タイインオメデトウ。又ケガケウラヤマシイデス」

「うむ、ありがとう」

漣は枕元でもぞもぞと何か分からない事を言つてから、むくりと起き上がった。先ほどとは打つて変わつて、妙な顔つきをしている。

わたしは思わず佇まいを直した。

「あのね。わたしって小さい頃から身体が弱くって、ずっと入院ばかりだね。歳の近いお友達って、あんまりいなかったんだ」

「そうなんだ」

何となく、そんな気はしていた。同じ病人でも、漣とわたしはどこかが違う。わたしはどうせすぐに退院すると初めから分かっていたが、漣

の方はきつとそうではない。

漣がどんな病に冒されているのかは分からないけど、多分、重いものだ。

漣がベッドからあまり動かないのも、きつと体力的な問題もあるのだろう。出会った当初から彼女から感じていた、どこか儂げな雰囲気は、もしかしたらこれに由来しているのかもしれない。

「うん、しかもその中で将棋を指してくれる娘はゼロ。何でかなあ。面白いのにな？」

「ああ——まあ、不思議だよな」

同級生の女子が将棋をやらない気持ちも、ほんの数日前までルールを知らなかったわたしにはよく分かるのだけど、それをそのまま答えるのは憚られたので曖昧に濁した。

「うん、ほんと不思議」

漣はしかつめらしい顔をして唸る。

「えーっと、それはそれとしてね——だからさ、透子が将棋を覚えてくれて、本当に嬉しかったんだ。だからね、そう——退院してからも、続けて欲しいな。将棋」

そういう漣の声は、どこか不安げで、少しずつ消え入るようになつていって、最後には殆ど聞き取れない程になつていった。

「何を不安そうにしてるの」

わたしは閉じたマグネット将棋盤で漣の頭をぼん、と叩いた。

「せっかく覚えたんだから、まだ全然、やめるつもりはないよ。せめて、漣に勝てるようになるまではね。それに普通に面白いもの。将棋」

「透子——」

私の言葉に漣は言葉を詰まらせた。そして目元をこしごとくする。まさか泣いているわけではないと思うけど、結構感極まったのは事実ら

しい。

しかし自分で言うておいてこういうのも難だけど、これは簡単にはい  
かないかもしれない、というのを感じていた。正直最初は基本的な所さ  
え覚えれば、すぐに漣とゲームとして遊べる様になるだろうと思っ  
た。

しかし、それがとんだ思い違いだという事に、段々気づいてきた。

話を聞けば聞くほど、教われれば教わるほど、「将棋って深いんだなあ」と、そんな事を考えさせられる。

今のはわたしは弱すぎて、相手の実力を推し量るなんていうレベルではないのだけど、やっぱり思う。

——漣って実は相当強いんじゃない？

少なくとも、ちょっとやそつとでは勝てそうにない。まともな勝負になることすらいつになるのか分からないのだ。

でも、わたしは漣に勝つまでやめるつもりはないと言った。

だからこれは至極婉曲ながら、わたしが本当に本気で将棋に取り組む、という決意表明だったのだ。

★「勇気を出して」

わたしが退院しても、漣との関係性はあまり変わらなかった。それは病院という退屈極まりない空間から脱出したわたしが、巷に溢れる様々な娯楽に目を向けることなく、本当に宣言通りに将棋に打ち込んだ事による。

平日は漣から借りた詰将棋本の問題を解いたり、定跡書を読んだりして過ごしていた。盤駒が家になかったので、頭の中だけの勉強だ。別に、折りたたみ式の安い木の将棋盤と駒を買うくらい何でもなかったは

ずなのだけど、何故かそれを買ったのは大分後のことだった。

多分、本を読むのと詰将棋を解くので十分に平日の勉強時間が使われていたのと、どうせ買っても家に対戦相手がいらないのだから意味がない、と考えたのだと思う。それでも定跡書の棋譜を並べる事は出来るのだから、すぐに買っけていてもよさそうなのだけだ。まあ現実に買わなかったのだから仕方がない。

週末には必ず病院に漣の見舞いに行き、友人として普通にお喋りをしたり将棋をしたりするようになった。割合的には将棋が八割くらいを占めていた。

わたしとしてはもう少し友人らしい女子らしい話をもっとやりたいと思わないでもなかったけど、将棋の話をしている漣が一番活き活きしていて楽しそうだったので、結局これでもいいのだという結論に至った。

そこで漣とやる将棋は、お互いに全部の駒を使って全力でぶつかるとうな、いわゆる平手戦ではなかった。漣の方の陣地は飛車角桂香といった主要な駒がない。

これを駒落ちというらしい。

対局者の実力に開きがある場合に行うもので、一言で言うとハンデだ。

最初はそんなハンデを貰う事に少々不服を感じなくてもなかった。

しかし将棋は運の要素が極めて少ない(人によっては全くない)というかもしれないけど、私はこう思う。初心者が本当に強い人に相手に、平手で百万回指したって勝てない。つまり私が漣に平手で挑むのは単に虐殺されるだけで時間の無駄だという事を理解して、素直に駒落ちを受け入れた。

ハンデに抵抗感があったのは初めだけで、駒落ちでもちゃんと将棋なるし、上達するにつれハンデが少なくなっていくのは面白かった。初めは歩しかなかった漣の陣地に少しずつ駒が増えていくのは、わたしの成

長を表す目安にもなっていた。

まあ、そう簡単に漣の駒は増えなかったけども。漣とは数え切れないくらい駒落ちの将棋を指した。

そんな日々が、半年ほど続いた。変化が起きたのはこの頃だ。

あるいは、転機といつてもいいかもしれない。それは将棋を続けていればいつか必ず訪れていたものなのだろうけど、それがやって来たのは、この日にだった。

十月半ばの少し肌寒い日、わたしは母親に連れられて近所のデパートに来ていた。十階建ての、結構大きなショッピングモールだ。普段のわたしは母の買い物には付き合わず、本屋に直行して雑誌や本を立ち読みしながら母の買い物が終わるのを待つ事が多い。

「あら、透子あれ見て」

「え？」

母は何やら壁の方を指差していた。何かのポスターが貼ってある。ポスターには大きな文字で『美吉野モール将棋大会』と書いてあった。ちょうど今日、五階でやるらしい。小学生の部と中高生の部にそれぞれ別れてリーグ戦の後にトーナメントをやるらしい。

「へえー」

「ちょっと覗いてみたら？」

母に言われるまでもなく、わたしはそれに興味を惹かれていた。

特に小学生の部には興味津々だった。

なにせ将棋を始めてから半年というものの、漣以外の子供が将棋を指している姿を見たことがなかったのだ。五階には漣の様に将棋が好きな小学生が集まっているに違いない。

後で思ったのだけど、一応クラスメイトの男子もやるにはやっていた。でも残念ながらわたしの中ではカウントされてなかったらしい。全く頭

に浮かばなかった。

それに、ポスターにはプロの棋士が指導対局を行うとも書いてあった。将棋のプロのことは漣から散々聞かされていたので、わたしにとってもちょっとしたヒーローになっていた。

それを実際に生で見られるかもしれないと思うと、心が浮き足立つものを感じた。

「行ってくる！」

言うが早いのか、私は母の返事も待たずに駆けだしていた。

五階には将棋大会の会場があつて、多くの小学生達が集まっていた。並べられたテーブルには将棋盤が置いてあつて。結構な数の子供達が将棋を指している。女子も少ないけど、何人かはいた。

「おおお——」

その光景にわたしは軽い感動を覚えた。これまでわたしにとって将棋とは、漣と語り合うための言語でしかなかった。漣とわたしの二人だけの世界にしかなかった将棋が、こうして現実で、大会として行われていることが妙に不思議だった。

——漣と一緒にここに来たいな。

わたしは心からそう思った。早く漣の病気がよくなればいいのに。そうしたら、二人で大会にだって出られるのだ。

普段は明るく笑顔を絶やさず、ちょっとだけ見たらいたって元気そうな漣だけど、結局この半年経ってもまだ病院にいる。その事実は、時々わたしを暗い気持ちにさせた。

しばらく会場をうろついて人の顔を見たり盤面を覗いたりしていたが、せっかく来たのだから自分も何か参加出来ないだろうかと思つた。

改めてポスターを確認してみる。将棋大会は午後の一時かららしい。エントリーしてみようかと思つたが、当日受付OKであるものの、参加

受付時間は十時半まで、今はすでに十一時を回っていた。

このデパートに来た時点で十時半は過ぎていたと思う。がっかりしたがこればかりは仕方がない。またいつか機会もあるだろう。

それにもう一つ、わたしには気になるものがあった。

そう、プロ棋士との指導対局だ。

指導対局にあたるのは沖田六段という若手棋士らしい。名前はうっすらと漣から聞いた様な気がする。若手の中にありながらトップ棋士に引けを取らないくらいに強く、将来はタイトルホルダーになるのを期待されているとか、確かそんな話だったと思う。

顔までは知らなかったので、はてどんなものかと指導対局ブースの方を背伸びして見てみた。別に普通に近づけばいいのだけど、何故か遠巻きに見た。

眼鏡を掛けた大人しそうな青年だった。遠目に見ても何だか頭が良さそうだとすることが伝わってくる。相手の少年にこやかな表情で何かを語っている。

——いいなあ。

そう思いながらも、しかし私は指導対局の列には並ばなかった。

怖じ気づいていたのだ。

何せこれまで漣以外の相手と将棋を指したことないのだ。それをいきなり指導対局とはいえ、プロ相手に指すなんて、怖すぎる。きっと変なことをして恥をかくだけだ。

とはいえ、沖田六段と指すことには心引かれるものがあって、だからわたしは並ぶでもなく近づくでもなく、少し離れた所から背伸び気味に沖田六段の様子を見ていた。

まあ、端から見たら変な子供だったと思う。多分、目立っていた。

そうこうしているうちに、指導対局の時間が終わった。もうすぐ午前

の部も終了というわけだ。わたしは自分の意気地のなさにがっかりするというよりは、むしろホッとしていた。

その時、携帯電話が震えた。母からの着信だった。

『はいこちら透子ちゃん』

『今どこにいる？』

『まだ五階に将棋大会のところにいるよ』

『そろそろお昼にしましょ。レストラン街の入り口で待ってるから』

『はい』

業務連絡を終え、携帯電話を閉じたわたしは、そのまま会場から去ろうとした。しかし、そんなわたしに、ほとんど不意打ちのように、声をかける者があった。

「ねえ、君。さっきからこっちの方見てたよね。将棋好きなのかな？」

沖田六段だった。男性としては小柄な方かもしれないけれど、当然小学生のわたしよりはかなり身長は高い。膝を曲げて視線をわたしに合わせるようにして話しかけてきていた。

「あ——えっと、その——」

突然の出来事にわたしは完全に言葉を失っていた。一瞬、走って逃げ出したい衝動に駆られたが、流石にそれは失礼過ぎるという理性の声がかうじてわたしの足が逃走に向かうのを押しとどめた。

しかしそれ以上の行動は取れなかった。蛇に睨まれた蛙のように、わたしの身体も思考もかちんこちんに固まっていた。

沖田六段としてもわたしの硬直ぶりは予想以上のものがあつたらしく、少し困った様な顔になった。でもそれも一瞬の事で、また優しい笑顔になって、落ち着いた穏やかな声で言ったのだ。

「将棋、指せるんだよね？」

その言葉に、私は何度も何度ももうなずいた。

「よし、今からちよつと指してみようよ」

「え、でも——」

「時間ちよつと過ぎてるけど、大丈夫大丈夫」

ここまで来ると混乱しきっていたわたしにも状況が飲み込めてきた。遠巻きに見ているわたしに沖田六段はずつと気づいていて、その様子から並びたいけど並べないでいるんだな、と分かったのだ。指導の時間が終わって順番待ちの人が消化されたタイミングで自分から声を掛けてきたに違いない。

「それとも今から予定ある？」

その言葉に、先ほどの母とのやり取りが脳裏に蘇る。

——レストラン街の入り口で待ってるから。

気がつくと、わたしは答えていた。意外なほどはつきりとした声で。「あの、お願いします！」

心の中で母に詫びをいれてから、わたしは沖田六段と指導対局ブースに向かった。

沖田六段は一度片付けただろう駒袋を開くと、木で出来た将棋の駒がばらばらと盤上に散った。漣のマグネット将棋盤しか触ったことがなかったので、木で出来た将棋盤は新鮮だった。

「将棋初めてどれくらいになるのかな？」

沖田六段としては手合いがどの程度か知りたいのだろう。段級位を持っていればすぐに適切な手合いが分かるだろうけど、わたしはそういうのは何も持っていない。というか、漣としか指したことがない。

「えつと、今年の四月に始めたからまだ半年——です。わたし、友達の人一人しか指したことがなくて、その娘から指し方は教わったんですけど——」

そういう意図は分かるので、わたしはしどろもどろになりながらも何

とか自分の実力の程を伝えようとしていた。沖田六段はわたしの言葉に耳を傾けながらうんうんと頷いている。

「駒の動かし方を教わったって感じかな？ 戦法とかそういうのは——」

「よく分からないです。でも、始めた時の漣——あ、わたしの友達の名前です——の陣地は歩と玉しかなかったんですけど、最近では飛車と角がないだけです。でもそこから、ずっと先に進めなくて。ずっと二枚落ちです」

「へえ——」

ほんの一瞬であるけど、沖田六段の目付きが変わった、ような気がした。

駒落ちから順々にステップアップしているとしたら、駒の動かし方しか知らない初心者二人娘が学校の昼休みの遊びだけでやっているわけではないのでは、と考えたのかもしれない。

「なら僕とも二枚落ちでやってみようか」

「え、でも——」

「まあまあ、その友達以外と指すの初めてなんだよね？ とりあえずやってみようよ」

そう言って沖田六段は飛角を抜き、さっさと駒を並べだした。わたしもそれにつられるように駒を並べた。

「お願いします」

挨拶をして頭を下げる。緊張でどうにかかなりなりながらも、わたしは盤面を見る。

——おんなじだ。

わたしが思ったのは、そんな当たり前のことだった。将棋盤と駒は木で出来ているし、向こうに座っているのも水瀬漣ではない。

でも盤面は、何十何百と指した漣との将棋と同じだった。

沖田六段はすつとした手付きで銀を持ち、ぱちり、と△6二銀と指した。

——かっこいいな。

私はその所作に思わず見とれた。漣とはマグネットでしか指した事になかったけど、木の盤駒を持って行けば、そういうのも教えてくれるかもしれない。あれほどの将棋マニアなのだから、そこら辺にもきつと詳しいだろう。

今のところ駒の持ち方も知らないわたしは、ぎこちない手付きで▲7六歩とした。

漣と二枚落ちを指していく中で分かったことがある。それは四枚落ち以上の時と違って、上手の陣形には明確な隙がないのだ。

大駒がないので攻撃力は不足しているが、守備についてはかなりの安定感がある。四枚落ちの頃の様に、陣形の欠陥を単純に突いていく——だけでは上手陣を破る事は出来ない。

下手側に攻撃のプランがいる。

「それはね、構想っていうんだよ」

「構想？」

「透子が今思ったプランって言葉を将棋用語でさういうってこと。漠然と次の一手だけを考えるんじゃないかって、自分はさういう形で展開を進めていきたいっていうイメージを持ちながら考えると、指し手の一つ一つに意味が出てきていいんじゃないかな」

「なるほど。言ってることは分かるけど自分で出来る気はしないね」

「あはは、でも自分でそれに気づけるんだからやっぱり透子は凄いと思うな」

漣とのやり取りを思い返す。

せつかくさういう機会に恵まれたのだ。失敗したら恥ずかしいとか考

えずに思いっきりやってみよう。漣があれだけ教えてくれたのだ。それに恥じない程度にはやってみよう。

わたしは漣から教わった、四筋の位を取る作戦を使った。『銀多伝定跡』というらしい。漣はこの定跡をいたく気に入っているらしい。

理由を聞いてみると、「名前がかっこいいから」との事だった。これにはわたしも同意した。

二枚落ちは本当に教え切れないくらい指したので、他にも色々作戦や定跡は知っていたが、先ほどの理由から一番指したのは銀多伝だ。

さて私の銀多伝を見た沖田六段は、さして何か思う所がある風でもなく、すいすいと指し手を進めていく。プロなのだから、指導対局も含めて銀多伝相手の上手などわたしより遙かにたくさん指しているに違いない。何だか目を瞑っていても指せさうなくらい手慣れている。

最近の漣は定跡の早い段階で変化したり、局面をややくしくする様な手を指すことが多く、わたしは対応に困っていたのだけど、どうやら沖田六段は素直に進めてくれているらしい。

銀多伝はそこまで攻撃的な陣形ではない。銀を縦に重ねた『多伝囲い』を作るのに手数がかかる。なので攻撃用の砲台と構築し、それを発射して上手陣を吹き飛ばすというよりは、全体のバランスを保ちながら指すように意識する。

その中から、攻撃の糸口を探っていくのだ。何だかんだ言っても相手は飛車角落ちである。落ち着いて局面を進めていけば、それは必ず見つかる——というような事を漣が言っていた。わたしは見つけたり見つけられなかったりだ。

しかし沖田六段がある程度本の通りに指し、序盤早々にわけのわからない局面にならなかつた事はわたしの自信になった。

局面がある程度煮詰まっても、まだわたしの庭にいる、という意識が

ある。それが初めて漣以外の人と指す——しかもプロと、という緊張感を上手く緩和してくれていた。

もちろん、全く同じ局面を経験したことはない。けれど、類似した将棋は数え切れないほど指した。未知の状態から構想を創造せよという状況ではない。以前に覚えた手順や筋の組み合わせさえきちんと考えれば、きつと何とかなるはずだ。

長い中盤の押し引きの中、ついに上手陣の隙を見つけ、噛みつく。

「ほう——」

沖田六段が感心したように溜め息を漏らした。

何とか、こちらの攻めは決まった。多分、このまま押ししていけば勝てるはずだ。

その瞬間、もしかしたらいけるかも——という道が見えた。

まず角を切る。切つて銀を取つて上手玉の後ろに打ち込む。これは取れないので多分下にかわすから、そこで飛車を切る。

取つた金銀を上手玉の周りに打ち込んでいけば。

——寄る？

そう意識した瞬間にどきん、と心臓が跳ね上がり、血が逆流したように顔が熱くなった。

もしかしたら、勝てるかも。初めて漣以外の人と指した将棋で、しかもプロを相手に。

そう思ったら他の筋は考えず、ひたすらその手だけを考える。

——行ける？ 行けるよね。行ける。

何度も何度も手順を確認する。大丈夫、これで勝てるはず。ここまで来れば変な粘りをしてわたしを混乱させようなどとはせず、すつきり勝たせてくれるはずだ。真剣勝負なら勝つためにいくらでも粘るだろうけど、これはあくまで指導対局なのだから。漣はそうなのだし、きつとプ

ロもそうだろう。いや、どうなんだろう。人によるのかも。

——いやいや、そんなこと今考えてどうするの。

今は余計な事を考えている時ではない。決断すべきだ。

わたしは覚悟を決めて、角を切った。同歩に予定通りに今取った銀を上手玉の裾に打ち込む。玉がかわしたタイミングで飛車を切つて、同歩に——

——あれ？

飛車を捨てて金を取った瞬間、なんだか指先が気持ち悪かった。この感覚は漣を相手にした時にも何度か経験をした事がある。

致命的な見落としをした時に。

「あ——」

気づいた時には、指は飛車から離れていた。

沖田六段は飛車を取らなかつた。わたしは飛車は取る一手しか考えていなかったのに、沖田六段は取ってくれなかつた。

代わりに、王手に角を打った。

『銀多伝定跡』の下手は金銀を上押し上げる。また玉の位置も3人と比較的浅い。こういう場合に気をつけなければならぬのは、相手に渡した大駒の打ち込みである。カウンター一発でこちらの陣形は崩壊するのだ。

そういう理屈は百も承知のつもりでいたのだけど、角の王手を先に利

かされる手を読んでいなかった。

普通にかわして、そこで飛車を取られる。この時、今打ち込まれた角の利きがなければ上手玉は詰むのだけど、現状は角の邪魔なので必死をかけるのが精一杯だ。

しかし、必死では駄目だ。必死を掛けて手番を渡した瞬間に今度はこちらの玉が詰まされてしまう。

これはもう、負けだ。

厳密にはこちらでも受けにいけばまだ負けはしないのであるが、もともとの実力に天地の差がある以上、駒落ちで最初にあつた貯金が吹き飛ば方に一つも勝ち目はない。

形勢逆転である。

完全に見落とした。言い訳をするつもりはないけれど、勝ちが見えたと思つた瞬間浮き足だつて、まるで冷静に手を読むことが出来ていなかった。

何度も確認したつもりだつたけど、それも成功しそうな理想手順を自分勝手になぞるのを繰り返したただけだ。

悔しい。本当に悔しい。

自分が情けなくつて、震える手を握りながらじつと盤面を睨み付けていた。

「えっ」

沖田六段が戸惑いの声を上げる。それに反応したわたしは思わず顔を上げた。

しかし、沖田六段の顔は滲んでいてよく分からなかった。わたしはようやく目に涙をたくさんためていた事に気がついた。

「あ、ごっつ、ごめんなさい！」

服の裾で慌てて涙を拭く。何をやっているんだわたしは。

恥ずかしい真似はしたくないとか言いながら、結局こんなことになっている。

本当に情けない。

涙を拭いたわたしは何とか呼吸を整える。

将棋は礼に始まり礼に終わる。漣に何度も言われたことだ。

「負けました。ありがとうございます」

「あ、うん。ありがとうございます」

沖田六段はわたしがそのまま大声で泣き出さずに正気に返つたことに、ホツとした様子だつた。

「分かつてると思うけど、最後はうっかりしちゃつたね」

「はい。勝てるかもと思つたら、なんだかわーつてなっちゃつて」

わたしの言葉に沖田六段が微笑する。

「うん、プロでもそういう事はあるよ。自分の気持ちをコントロールするのは本当に難しいことだから」

沖田六段は励ますように言つてから、一局を振り返つてこの対局の要点やここをこうすればもつとよかつた等のことを教えてくれた。

「でも凄く筋がよかつたよ。半年でここまでになるなんて、本当に凄い」

「あ、ありがとうございます！」

プロの先生に褒められて、わたしは真っ赤になった。

「午後の部の将棋大会には出るの？」

「えっと、出ようかなつて思つたんですけど、来た時にはエントリー時間過ぎちゃつて——」

「ああ、そうなんだ。よかつたら僕が係の人にお願いして出場出来るように頼んであげようか？」

「本当ですか！」

これは思つてもみない申し出だつた。最後の最後に致命的に見落としをしたとはいへ、沖田六段相手に結構いい感じに指せたのだ。ここに集まっている同年代の子達とも指してみたいと思いを強くしていた。

「名前と学年だけ教えて貰えるかな」

「新庄透子。四年生です」

「四年生——ね。うん、分かつた」

その時、また携帯電話が震えた。

「げ——」

瞬間的にヤバいと直感した。携帯電話を開いてみると、母からの着信が一〇件ほどあった。

「ご、ごめんなさい！ わたしもう行かないと！」

「あ、ああ。また後でね」

わたしは沖田六段に頭を下げると、飛び上がるように立ち上がりそのまま走り出した。

思った通り母と合流したわたしは大目玉を食った。こんなにやられたのは久しぶりだというくらいこつびどく怒られた。全面的にわたしが悪いので仕方がない。少しでも早く嵐が去るように、神妙な顔つきで謝罪を繰り返した。

怒りの余波で大会出場を取りやめにされては敵わないので、少し間を置いて昼食を食べ終え、そろそろ機嫌も治ったかな？ といった頃合いで、午後からの大会に出場する事を母に告げた。母は少しだけ驚いた様子だった。

「あら、そうなの？ 透子が走って行ってからお母さんもポスター読んでください、もうエントリ時間過ぎてなかった？」

「うん、そうなんだけどね。わたしと指導対局したプロ棋士の、沖田六段って人が、係の人をお願いしてくれたの」

実際には急いでフードコートに向かったためその様子を見ていないのだけど、まあ同じ様なものだろう。

「よかったわねえ。でも透子、勝てるのかしら？」

「分かんない。漣以外と指した事ないし」

よく考えたら、大会は駒落ちではなく当然平手で行われる。わたしは平手をこれまで指した事がなかった。退院した後、学校の昼休みに男子

とちよつと指したけどあれはノーカンだ。

「お母さんも応援に行こうかしら？」

「ええー？ いいよ来なくて」

「いいじゃない。減るもんでもなし」

「やだ。絶対来ないでよ」

「はいはい」

元々将棋にまるで興味のない母なので、娘に嫌がられてまで応援に行くつもりもなかったらしい。すぐにまた別行動ということで話がまとまった。

ただし、大会が終わったらすぐに母の携帯に連絡を入れる事は厳命された。

会場は午前中よりも多くの人で賑わっていた。大会の参加者であろう小学生に中高生もたくさんいる。

わたしは誰と当たるんだろう？

何だか無性に胸が高鳴ってきた。会場の奥の方に予選リーグの表があるとのことなので、わたしは早速それを見に行った。

「あつたあつた」

小学生の部の出場者は全部で十六人らしい。一グループ四人のリーグ戦を行い、成績の上位者一名が決勝トーナメントに進出出来るようだ。

さて、わたしはどのブロックに出場するのだろうか？

小学生リーグ表から自分の名前を探す。

——あれ？

わたしの名前が、ない？

「えっ？ あれ？」

何度探しても小学生の部のリーグ表に『新庄透子』の名前はなかった。どうしてだろう？ 沖田六段が約束してくれたのに、やっぱり時間を

過ぎていたから駄目だったんだろうか。

わたしはがっかりした。期待が大きかっただけに、何だか裏切られたような気分だ。肩を落として、もう帰ろうかと思つた時、ふと隣にある中高生の部のリーグ表が目に入った。

「え——」

よく見知つた名前がそこにはあつた。

——『新庄透子』。

わたしは中高生の部にエントリーされていた。

「嘘でしょ——」

呆然と呟いて何度も名前を確かめる。間違ひなく、中高生の部予選リーグDブロックにわたしの名前があつた。

「ああ、君が新庄透子ちゃん？」

そんなわたしに声をかける人がいた。五十代くらいの小太りのおじさんだつた。午前の部でも見かけた気がする。

思い出した、マイクを持って場内アナウンスをしていた人だ。という事はこのスタッフというわけだ。これは事情を聞かざるを得ない。

「あの、わたし——」

「上の学年の子とやるのは緊張するかい？ 遠慮することはない。将棋に歳なんて関係ないんだ。思いつきりやればいい。お互い使う駒は同じなんだからね」

そういう事ではなくて。

「でも——」

「私も驚いたけど、沖田君がどうしてもつていうからね。彼が人にこんなお願いをするなんてなかなか珍しいよ。余程君の事が気になったのかもしれない」

そういう事でもなくて。

「えっと——」

「あ、そろそろ出番みたいだよ。さ、行ってごらん」

「えええ？」

わたしは流されるままに中高生のリーグ戦が行われているブースに向かつた。当然と言うべきか、そこにいるのは中学生以上の少年ばかり（一応少女も少数）だつた。もちろん小学生はわたししししかない。

わたしが入つてきた途端、大勢の物珍しそうな視線が一斉にわたしに集中した。

小四のわたしにとつて中高生というのは、どうしようもない隔たりを感じさせる別世界の住人だつた。

一言で言うと、怖い。

兄や姉のいないわたしには、ある意味大人より怖い存在だつた。

さあつと血の気の引く感じがして、わたしの頭は真っ白になる。そのままふわわたした足取りのままわたしの名札が置いてある席に向かつた。

わたしの対局相手はセーラー服を着た女の子だつた。わたしの姿を認めると、少し驚いた様に目を丸くしたがすぐにとこりとした笑顔をおたしに見せた。このセーラー服には見覚えがある。わたしが通っている小学校の近くにある私立中学の制服だ。登下校時に自転車通学する彼らをよく見かけていた。

それでようやくわたしの緊張は少し緩和された。ここで強面の男子高生に睨みをきかされていたら、べそをかいていたかもしれない。

席に座つて改めて彼女と向き合う。テーブルに『白川美里』と印刷された三角札が立て掛けられていた。ちなみにわたしの札は画用紙に油性ペンで『新庄透子』と書いてあつた。間に合わなかつたのだろうか？

別に何でも構わないのだけど、何だか間が抜けている様に見える。

よし、落ち着いた。これで少なくとも、将棋を指せるくらいの精神状態にはなったはずだ。

「よろしく願います！」

「よ、よろしく願います！」

美里さんの張りのいい声に対して、わたしはちよつとどもり気味の挨拶になった。

さて、リーグ戦なので先後はあらかじめ決まっている。わたしは後手だ。

漣がいうには将棋は本質的には先手の方が有利——かもしれないらしい。テニスのサーブ権のように、一手先に指せる先手が主導権を握りやすく、そこに僅かな優位性がある。トッププロ同士の対局となると、この僅かな優位性が非常に大きく、それをそのまま活かして勝ちきってしまう事すらあるという。

「でもあくまで人間同士の話だからね。神様同士で指したら、案外後手の方が有利だって事はあるかもしれないよ」

「ふうん、極めきつた人達の話だね」

わたしに関していえば先後どっちでも大した違いはない。

美里さんの初手は▲7六歩。まず角道を開けてきた。

当たり前にして当たり前前の一手である。駒の動かし方すら知らなかった時のわたしでさえ、この手を指した。この一手に動揺する人間はいないだろう。

多分、わたししか。

——うわ、角道開いた。角がいる。睨んでる。うわあ。

まともに平手を指したことはないわたしは、角道を開けたことはあっても、角道を開けられた経験はほぼないのだ。

日曜朝の将棋番組は毎週見ているとはいえ、自分で指すととなると全然

違う。新鮮な景色だった。

攻撃力に乏しい二枚落ちと違って、相手も大駒が揃っている。こちらが先に攻め込まれる事もあるだろう。駒落ちの上手は斬り合いでは勝目がないので、のらりくらりとかわす様に指すものだが、平手の相手は積極的に斬り合ってくるかもしれない。

わたしに指せるだろうか。

「？」

わたしが二手目から固まっているので美里さんが不思議そうな顔でわたしを見た。

しまった、持ち時間は一〇分しかないのだ。時間切れは言うまでもなく負けだ。こんな所で無駄遣いしている場合ではない。

一応、お昼ご飯の間に作戦は決めてきていた。

わたしは二手目に飛車先を突く△8四歩と指した。

これは居飛車戦法を明示したことを意味する。

将棋の戦法の最も大きな分類に、居飛車と振り飛車がある。居飛車は飛車の位置をそのままに指す戦法、振り飛車は飛車を一旦、横に移動（振って）させてから指す戦法だ。

漣との会話を思い出す。

「一口に振り飛車っていつでも振る場所は色々あるよね」

「そうだね。四間飛車、三間飛車、中飛車、向かい飛車。時代によって流行廃りはあるけど、まあどれもありうるよね」

「どれがいいのかな？」

「好みだったり作戦だったりする所だからそれはその時々だよ。でもね、本当に大事なのは、飛車を振る場所じゃなくて、こっち」

「王様？」

「そう、この王様を右にぼんぼんと移動させて、さっき飛車がいた所

に持つてくる。で、右の銀を一マス上に上げると、じゃーん！ 美濃囲いの完成！」

「へえ、簡単なんだね」

「そう、簡単なんだけど、強いんだよこれが。むしろこの囲いを作るために飛車を振ったって言っているのかもしれない。飛車を振る場所はともかくとして、この美濃囲いを使いこなすことこそが、振り飛車の勝利の秘訣なんだよ」

「なるほどねえ」

「わたしに言わせれば、振り飛車戦法じゃなくて美濃囲い戦法だね！」

「そうなんだ」

「ごめんそれはちょっと言い過ぎだった」

「もう、真に受けちゃうんだからあんまり適当なこと言わないでよー」

「あはは」

午前中に沖田六段に指した銀多伝は、飛車を五筋に展開する振り飛車の戦法だ。だけど、銀を多伝に使っているので、美濃囲いにはならない。飛車を振ることそのものに抵抗はないのだけど、美濃囲いを使いこなす自信がなかった。

それよりも、金銀は押し上げるように使った方が銀多伝に似ていて、わたしの知っている将棋に近い形になるのではないかと考えた。

そうするならば、振って美濃に囲う振り飛車よりも、居飛車の方がやりやすいはずだ。

そういう様な事を考えての居飛車選択である。これが吉とでるか凶と出るかは分からないが、ともかく自分に来ることをやるのみだ。

美里さんは角道を止めて飛車を四筋に振ってきた。四間飛車戦法だ。とはいってもわたしが知っているのは名前だけで、定跡はほとんど分からない。一応本屋で立ち読みした本の中に四間飛車についてのものもあつ

たので、向こうがどういう駒組みをしてくるかくらいは何となく分かるけど、それを『分かる』と言っているのか。

——まあ、ダメだよな。

好き勝手やる外ない。元よりそのつもりだったのだ。

わたしは定跡なぞどこ吹く風といった具合に、金駒を盛り上げる作戦を使う。作戦的には間違いなく損な事をしている。

しかし、損は損でも、それは歪な駒組みをした事による漠然とした損だ。飛車を取られたとか、成り駒を作られた等様な、実質的な損とは意味合いが違う。

「ごめん連、わたしにはその漠然とした損？ っていうのがよく分からないのだけど」

「うーん、感覚的な話だから頭で理解するのも難しいかもしれないね。えっとね、実質的な損っていうのは、分かるよね。駒損してるとか、誰の目にも明らかな損の事」

「うん。それは分かる」

「漠然とした損っていうのは——例えば駒組が変な形をするとするでしょ。隙が多い陣形みたいなの」

「うん。それは損な駒組みって言えるね」

「でも、いくら隙が多くても相手がそれを突こうとせずにスルーしたら、別に損にはならないでしょ？」

「あー、なるほど」

「そうだねえ。例えば定跡を知らないで変な駒組みをしたりちよっとおかしい手を指したりして『漠然とした損』をするっていうのは、野球でいうとノーアウトランナー三塁みたいなものかな？ まあ、満塁かもしれないし、ツーアウト二、三塁かもしれないけど。それはどうでもよくって、ここで大事なのは——」

「ちよつと待つて。えつと、つまり——ヒットを打つてランナーをホームに帰さないとい何にもならないつて事？」

「そう！ それだよ！ 将棋は相手が疑問手や悪手を指した場合、自分がそれを咎めて——つまりヒットを打つて、初めて悪手になるんだ。だから自分が作戦や駒組でリードしたと思つたら、その『漠然とした得』を駒得や大駒を成り込むみたいな『具体的な得』に変えるために、どこかで頑張つてヒットを打たないといけないんだよ」

「じゃあ、こっちが『漠然とした損』をした場合は、相手にヒットを打たれない様にアウトコース低めに投げるつてわけね」

「そういう事だよ。アウトコース低めの指し手つて言われてもよくわからないけど。まあ将棋は野球みたいにストライクゾーンがあるわけでもないし、うかうかしてたらランナーがみんな一斉に裏切るかもしれないけどね」

「そう言われると酷いゲームだね」

「ううん、確かに」

結局の所わたしにとつての将棋は、漣と指し、漣に教わつたものしか存在していない。

何故か中高生の部に入ることになつても、経験のない平手であつても、出来る事自体がそもそも少ない。であれば迷う必要はない。

そもそも将棋というゲームそのものにもそういう要素がある。選択肢の多い局面ほど、迷うのだ。それは優勢な局面であつても同じ事だ。逆に苦しい状況だつたとしても、指し手の選択肢がなければ迷いようがない。

ただ、覚悟を決めればいい。

——まあ、それが怖いんだけどさ。

しかし美里さんは無難に駒組みをするだけで、特段わたしの駒組みを

叱りつけてやろう、という様子ではない。こちらがどんな作戦を選びどんな駒組みをしてもとりあえずはこれで大丈夫、という決まつた通りの指し方に見えた。

つまり彼女は、ヒットを狙つてはいない。とりあえず序盤は失点さえしなければいいという考え方なのかもしれない。

内心、ホームランを恐れていたわたしはホツとした。

悪手は咎められなければ悪手ではない。これも漣に教わつたことだ。結果として、わたしの悪い駒組みは悪い駒組みではなくなつた。相手

の玉頭に大きく展開して、ちゃんと成立した陣形にまで持つて行けた。平手戦で最も恐れていたのは圧倒的に経験が不足している序盤だつた。

とりあえずそれを致命的な差をつけられる事なく乗り切つた。大成功といつていい。

将棋はおおよそ序盤・中盤・終盤に分けられる。まだ戦いに入らず陣形を整備する段階が序盤、駒がぶつかりだしてからの鏝迫り合いが中盤、

お互いの玉を詰ますための斬り合いが終盤だ。

「終盤から中盤に戻る事もあれば、中盤すつ飛ばして一気に終盤になる事もあるから、まあ色々だけだね。あくまでおおよその目安だよ」

と言うのは漣の言。でもこの将棋は通常の流れ通りに行きそうである。指し手が進み、わたしと美里さんの将棋も駒がぶつかり始めた。中盤

戦の始まりだ。

——悪くないな。

ここまで来てしまえば相手に飛車角があるのもあまり気にならない。むしろこれは何とかなるのではないかという気さえしてきた。

漣は飛車角が無い状態でさえ、指しても指してもなかなか隙が見えないし、ちよつと甘い手を指すとたちまちこちらの状況が悪くなつた。しかし、美里さんの指し手にそこまでの厳しさは感じない。

——というか、漣。あなた滅茶苦茶スパルタだったんだね。

漣以外の人と指して初めて気づきました。今度会った時、文句の一つでも言う事にする。

美里さんは少し考えてから桂を打った。読みにない手だった。わたしはむむむ、と読みに集中する。

読みにない手というのはおおよそ二種類ある。一つは完全に思いついてすらいなかった手、もう一つは読んではいたがこれはないだろうと読みから外した手だ。

前者は結構どうしようもない所もあるけど、後者でもしこちらが悪かったら問題なのでそれは後で反省しないといけない。

美里さんのこの桂馬は後者である。でも、今回の場合はわたしの方が正しいのでは、と思う。こちらからその桂馬を取りに行けば痛い場所に刺さるけど、歩で向こうの動きを催促したら困るのは向こう——だと思ふ。

でも、そう指すのは怖い部分もある。向こうに攻撃してくるようには催促するのだ。何か間違っていたらそのままこちらが潰されるかもしれない。

「将棋って人間同士のゲームでしょ。当たり前だけど、相手がいる。これまた当たり前な事に、相手も負けるためにやってるんじゃない。これがRPGか何かのボスキャラなら、プレイヤーに倒されるためにいるんだろうけどね。そうじゃないから、将棋に安全な攻略法なんてないんだよ。どこかで、勇気を出して勝ちをもち取りにいかないと勝てないんだ」

勇気を出して勝ちをもち取りに行く。いかなければならない。

今が、その時——か？

——行こうっ！

わたしは桂頭に歩を打った。美里さんの悪手と思しき指し手に食らい

ついたのだ。これは狙ってヒットを打ちに行った手、向こうの悪手を咎めに行った手だ。

「ううん——」

美里さんが苦しげに息を吐き、盤面を凝視する。わたしも盤面をくまなく見て、先を読み、展開を考える。

あまり時間を使わずすらすらと指し手を進めていた美里さんだけど、ここではつきりと手が止まっていた。

わたしの一手への対応策を考えているのだろう。しかしこれは、決まっていると思う。失敗してから考えても手遅れなのが将棋というゲームである。

今はわたしの方が、かなり優勢なはずだ。

——もしかして、勝てる？

そう意識しつつも、決して気は抜かない。何せ午前中酷い目に遭ったばかりである。

『勝ちだと思った瞬間が一番危ない』というのが将棋で一番骨身にしてみても学んだ事かもしれない。まあ、分かっているも繰り返すのだけだ。

しかし今は大丈夫だ。落ち着いていると思う。

それに、精神面は元より、実際の形勢もかなりこちらが良さそうである。

どうも駒落ちよりも平手の方がリードを広げやすい感じがする。二枚駒落ちは攻めても向こうに飛角がないため、駒得以前に取る駒があまりない。最初から大きな貯金はあるものの、それが最初以上に増える事はない。しかし、平手なら取った飛車角をこちらでも使えるのだ。可能性は無限大だ。

当たり前と言えば当たり前前なのだけど、そういう当たり前前の一一つが何だか新鮮で面白かった。

わたしはそれからも着実にリードを広げ、ついに相手玉を即詰みに討ち取った。最後は詰みを読み切つていながらも、緊張で手が駒を握る手がぶるぶる震えた。

何せ初めての平手、初めての大会、二人目の漣以外の対局相手への初勝利が掛かっていたのだ。恥ずかしいけど、平常心でいるという方が無理だ。

「負けました」

美里さんははつきりとした声でそう言って、頭を下げた。

「あ、ありがとうございます！」

わたしも頭を下げる。思わず興奮気味な声が出てしまった。

勝った！ やった！

わたしの将棋が平手で、中学生を相手に通用したのだ。この半年、漣とひたすら将棋を指し続けたのは無駄にはなっていなかった。それが何よりも嬉しかった。

「うーん、やっぱりあの桂がまずかったかな。すぐに歩を打たれて痺れちゃった」

すぐに美里さんは感想戦を始めていた。先ほどの悪手を指した局面のことを言っているのだろう。それが敗因となっただけに後悔しているに違いない。

「はい。えっと、あそこは飛車を引かれてたら分からなかったです」

「あー、やっぱり。迷ったんだけどね。何か弱気な様な気がして、えいって突っ込んだら酷い目にあっただわ」

美里さんは悔しげに言った。

「二人ともお疲れ様」

「えっ」

不意に背後から声を掛けられてわたしは驚いた。振り返ると、沖田六

段が立っていた。細身の体躯に、午前中と同じ穏やかな微笑みを浮かべている。

いつからいたのだろう。全く気がつかなかった。

——まさかずっと見てたなんてことは、ないだろうけど。

ないと思うけど、それを考えると頬が熱くなつて心臓がどきどきしてきた。

「ちよつと先生ー負けちゃいましたよお。この子何者なんですか？」

美里さんが不服そうに沖田さんに言った。

「いや、僕も知らないんだ。さつき会ったんだよ。友達の子に将棋を教わつて、始めてまだ半年らしいけど、午前中指した感じ最低でも有段者ではありそうだったから、無理言つて中高生の部にいれて貰った」

「うーん、そうなんですか。確かにこの大会の小学生の部に出てくる子達じゃ相手にならないかも。それにしてもこれで半年つて、自信なくなあ。あはは」

美里さんは朗らか笑つて言った。漣の笑い方とは種類が違うけど、何か似ている様な気がした。これはきっと、将棋が好きなの笑顔なのだ。

「でもごめんよ。いきなり中高生の部なんて言われて驚いただろう？ 始まる前に説明しようと思つてただけど、君が見つからなくなつて」

沖田六段は申し訳なさそうに言った。

「あ、大丈夫です。ちよつと驚いちゃいましたけど」

「そうそう、始まった時は猫の集會に迷い込んだハムスターみたいにプルプルしてたのに、対局始まった途端にライオンみたいになったもの」

「ええ？」

わたしはそんな感じだったのか。

「あはは、午前中もそうだったから、まあ大丈夫かなつて思つただけ

どね」

沖田六段はそう言って笑った。彼なりに色々配慮はしていたらしい。でもこういうのは流石にこれっきりにして欲しい。

「えっと、透子ちゃん？ 序盤は見た事ない指し方してたけど、あれは作戦？」

「作戦というか、平手を指したの初めてだったので、出来る限り二枚落ちに近い感覚で指せる将棋に持って行こうかと——」

「ええ？」

美里さんがキョトンとした顔で沖田六段と顔を見合わせる。

「うそん」

「平手が初めて——」

二人の反応にわたしは急に恥ずかしくなってきた。確かに、間違いなくそんな奴はこの会場でわたし一人だけだろう。

「あの、すいません。私、漣——友達としか指した事なくって——」

しゅんとするわたしに二人は慌ててフォロウをする。

「ああ、いやいや。そうじゃなくて、感心してたのよ。それでここまで指せるなんて、透子ちゃんの友達はきつと物凄く強いのねえ」

「それに教えるのが上手なんだろうね。透子ちゃんの将棋はとても筋が良い。その子も、どんな子なのか気になるなあ」

漣がどれくらい強いのか、まだわたしには分からない。

教え方も、多分上手いんだろうなあとは思ってはいいたけど、どうやらわたしは自分自身で思っていたよりかなり成長していたらしい。想像をずっと超えていたという意味で、やっぱりわたしは分かってなかったのだと思う。

出会って半年、入院中は毎日のように会っていたし、今だって週末は必ず会っている。だのに、わたしは漣の事をいまだによく分かってない

のかもしれない。

でも、これだけは絶対確実に断言出来る事があった。

「漣は、本当に将棋が大好きな子ですから」

この日、この瞬間こそが——漣とわたしだけの世界にあった将棋が、外の世界に接続された瞬間だった。

★「そろそろいいかなって」

この大会の結果だけど、わたしは何と三勝一敗で予選リーグを突破した。二勝は美里さんと指した時と同じ様な流れで勝てたけど、負けた分は序盤で大差をつけられてしまった。何とか頑張って追いつこうとしたけど、ぎりぎりの所で届かなかった。

決勝トーナメント一回戦で当たったのは、鋭い目をした男子高校生で、これまた序盤から差がついてどうにもならなかった。粘りに粘って、最後の最後にやっとチャンスが巡ってきていたらしいのだけど、それも気づかずに見逃して、結果完敗だった。大会は彼の優勝によって幕を閉じた。

負けた事は残念だけど、決勝トーナメントに進出出来たのはわたしにとっては望外だった。自分でいうのも難だけど奇跡的だ。

後日、漣にその日の事を話すと、漣は自分の事の様に喜んでくれた。

「沖田六段と指したんだ？ いいないないなあ！ ねえ、どんな人だった？」

瞳を輝かせながらわたしを質問責めにしてくる。

「えっとね、痩せてて眼鏡掛けてた。あと優しかったよ。色々教えて貰っちゃった。それにね、駒を持つ手付きがね——こう、凄くかっこよかった」

わたしは沖田六段の面影を思い出しながら語った。手付きを真似しようとしたが、全く上手くない。これは別途練習が必要のようだ。

「手付きかあ。実はわたしもよく分からないんだよね」

「え、そうなの？」

意外に思ったわたしに漣は頷く。

「ほら、わたしってずっとこんな感じでしょ？ あんまり面と向かって人と指した経験ないんだよね。ほとんどネットばかりでさ、透子以外の人と直接指したのって数えるくらいしかないんじゃないかなあ」

「あー、そっかあ」

漣は気楽な調子で話しているが、わたしとしては少し聞くのが重い話題だった。これだけの強さを持った一方で、直接人と指した経験はあまりない。漣がわたしと話す時、将棋の話ばかりで普通の小学生の様な話題を持っていないのは、確かに将棋が好きだというのも一因ではあるけど、長い入院生活も無関係ではないだろう。

この時点のわたしでさえ、水瀬漣という存在のアンバランスさは時々危うく感じられていた。

「じゃあさ、練習してみようよ。駒の持ち方！」

わたしはそれを悟られないよう、なるべく明るい調子で言った。

「おお、いいね！ でもわたしはマグネットのしか持ってないよ？ 家なら足付きの将棋盤があるけど」

「そうじゃないかと思って、買ってきました」

わたしはリュックから折りたたみ式の木の盤と、駒を取り出した。折りたたみ式将棋盤八百円、駒百円(税抜き)。安い！ というか、何故今までいつまでもマグネットでべたべたやっていたのやら。

「おおお、流石透子大先生！ 大会ベスト4！」

「もう、やめてよー」

「じゃあ早速やってみようよ」

わたしはいそいそと駒の封を開いた。安っぽい木の駒がばらばらと台に広がる。

「どうやるのかな」

「えっと、そうだ。NHKの録画見ればいいよ。始まる時に前年の優勝者が一手指してるから」

漣はそう言うついでにテレビをつけてNHKの将棋番組の録画を再生した。前年の優勝者は羽川名人。将棋に興味がない人も名前くらいは知ってるだろう、かつて全タイトルを制し七冠王になった、将棋の歴史上最強の棋士だ。

将棋を始めてから一応NHKの朝の講座とNHK杯将棋トーナメントは毎週チェックしていたのだけど、ここに注意して見た事はなかった。わたしと漣はテレビ画面をじっと見つめる。

名人の右手が7六にある歩をぐっと摘まみ、持ち上げられた駒はゆっくりと空中を舞い、ピシリと音を立てて盤に打ち込まれる。

「おおおー」

「かつこいいねえ」

そのシーンを何度も繰り返して頭にインプットする。それを思い浮かべながら、駒を握り、ピシリと盤に打ち込む。

「どうかな？」

「うーん」

漣は難しい顔をして首を傾げる。

「何か違う気がする」

「掴んだ瞬間の指の形が分かんないね」

それからわたし達は過去の録画も漁って対局中に駒の持ち方が分かるシーンを探した。その日はずっとそんな感じだった。ただし、指の動き

を見るだけのつもりがいつの間にか対局そのものに見入ったり、展開にあれこれ言ったりしていたので、結構気もそぞろだった。

「おおよそ理解してきたら、如何にかっこいい感じに駒を打つための研究が始まった。」

「滞空時間が大事なんじゃない？」

「盤に置く時の力の入れ方も——こう、ググッと感じに」

「でもさ、秒読みで時間がない時にささっと駒を滑らせるのもかっこいいよね」

「分かる分かる！ ぎりぎりまで指さないとドキドキするよね！」

「珍しく、指す所までいかないまま日が暮れかけてきた。」

「あちゃ、もうこんな時間かあ。そろそろ帰らないと」

「ねえ、一局だけ指そうよ。折角新しいの持ってきてくれたんだし」

わたしは頷いて駒を並べる。駒の並べ方は大橋流と伊藤流と二つあって、プロ棋士は大橋流で並べるのが多いそうだ。わたしも大橋流で並べている。

この半年で、定跡や手筋以外のトリビア的知識も色々ついてきた。

「あれ？」

漣の布陣がいつもと違っていた。漣の陣地に、飛車がいる。

「そろそろいいかなって」

「そうやって漣は微笑んだ。」

「本当？」

二枚落ちの期間が随分長かったのでここで急に次のステップに進めた事にわたしは驚いた。

「うん。最近では二枚落ちでもかなり安定して勝てる様になってきたし、沖田六段にも良い将棋が指せたみたいだしね」

「うん、あー、そうね。うん」

沖田六段との将棋は内容は今思うと最後以外は悪くなかったけれど、失敗した時に涙目になって沖田六段をぎよっとさせてしまったのは、結構ビターな記憶である。

そんなわたしの歯切れの悪さを感じ取ったのだろう漣はくすくすと笑う。

「最後に着地失敗したの気にしてるの？」

「それもあるけど、まあ色々ね」

漣は「ははあ」という顔をする。

「それだけ頑張ってやってたって事だから、悪い事じゃないと思うけどなあ。想像すると何か可愛いし」

「いやいや、やめてよ」

「でも沖田六段も言ってたんでしょ。自分の気持ちをコントロールするのは本当に難しい事だって。状況が状況だし仕方ないと思うけどな」

「流石にもう泣いたりしないよ？ でもまた終わる際にさーって周りが見えなくなったら困るよね」

「それもそうだねえ。勝ちを意識した瞬間が一番危ないっていうしね。心が無防備になるっていうのかな」

漣はそう言って何かを考える様に俯いた。視線の先には駒が並べられた将棋の盤があるけど、それについて考えているわけではないだろう。

「わたしね——」

漣は一言一言を考える様に、ぼつりぼつりと言った。

「勝つのは最後でいいと思うんだ。とりあえず負けなければ将棋は終わらないし、そうしたら、相手の人の事も将棋の事を、もっと考えられて、それで分かる事もあるんじゃないかな。勝つのはそれからでもいいんじゃないかって」

「勝つのは最後——」

「うん、勝敗がつくってというのはその将棋が終わるってことでしょ？」

でもその将棋が終わっちゃう前に、まだまだ起こる事も考える事もあるんじゃないかって。わたしはそう思いながら指してるな。だって将棋って深いから。わたしなんか見えてる世界なんかより、もっとずっとずっと深いから——ね？」

漣はいつもそういう気持ちで指しているから、負けそうな時も決して諦めたりしないし、勝ちそうな時も気が急いたりしないのだろう。

本当に、将棋バカだ。

「はあ——」

「え、なに？ わたし何か変なこと言った？」

「指そう。角落ち。負けないからね」

「うん！」

駒を持つ漣はベッドの上で上半身を起こしたまま指している。プロの様に、畳の部屋に正座なんて出来ない。ほとんど陽の光を浴びない漣の指は、透き通る様に白い。

でも、さっきまでずっと二人で研究して練習していた駒の持ち方は凄く様になっていて、ピシリと響いた音はまるで弱々しさを感ぜさせなかった。

そんな漣の姿が何だかプロの棋士と同じくらい、わたしにはかっこよく見えたのだ。

★「ねえ、漣」

この半年というものの学校と塾と病院を歩き来する生活を送っていたわただしだけ、それに新たに美吉野将棋センターが加わった。沖田六段が紹介してくれた将棋道場で、彼はよくそこで指導将棋をしたり講座を開

いたりしているらしい。美里さんもその道場によく出入りしているそうだ。というか、そもそもこの将棋大会の参加者自体が、その将棋センターに通う子供達ばかりだったらしい。だから、沖田六段は出場者全体の棋力をおおよそ把握していて、わたしを中高生の部に入れたのだろう。

そして午後の部開始時にわたしに声を掛けてきた小太りのおじさんは、白川恵造さんといって、この道場の席主であり美里さんの父親でもあった。

美里さんは細身で美人だから、失礼ながらあまり似ていなかったのも、初めて聞いた時は結構驚いた。でもよく話してみると、どこことなく人の良さそうな雰囲気は共通するものがあつた。外見ではなく、性格は似ているのかもしれない。

漣を除けば、対局数は美里さんが一番多いと思う。漣とはずっと角落ちでしか指してないので、平手の実戦経験を養うのは専ら道場だった。

とはいえ、あくまでわたしの目標は漣であり、漣と互角に遊ぶために将棋をやっているという事は変わらなかった。

そうやって季節は巡り、冬になった。冬休みも間近に迫った十二月の半ば。とりあえず、漣の陣地に角が乗る事はまだなかった。

「ああー、また負けたあ」

投了した美里さんは悔しげに天を仰ぐ。この頃は平手の序盤もきちんと勉強する様になって、序盤から滅茶苦茶指して大作戦負けする事も少なくなっていた。

この将棋道場に初めて行った時、わたしは初段の段位を貰った。初段というレベルは初心者が十五級からスタートし一級をクリアし、ようやくたどり着ける地点だったので、いきなり初段と言われた時のわたしは驚いて目を白黒させた。

「少なくとも、中終盤は三段以上の実力はあるから自信を持っていよいよ。」

序盤は五級くらいだけど。昇段の楽しみもあった方が面白いだろうからね」

との事だった。実際、ぼんぼんと昇段出来て、現在は四段まで行っている。何となくもうすぐ五段にいけそうである。

「透子ちゃんはどうぞ強くなってるね」

脇からわたしと美里さんの対局を見ていた白川さんが言った。

「うーん、そうでしょうか？」

わたしは上がっていく段位とは裏腹に、自分の実力の向上をあまり感じられないでいた。

「そうだよ。初めてデパートで指した時は結構いい勝負だったのに、最近はまだで相手にならないもの」

美里さんが溜め息混じりに言う。

「うーん」

それでもわたしはあまり納得がいかに首を傾げる。というのも、ここ最近漣と指しているも、差が縮まっている気がしないのだ。

二枚落ちの頃はやるうちに段々勝率が上がっていったけど、今は角落ち戦は始めた当初とまるで変わらぬ。何回かに一回勝てるかどうか、という感じがずっと続いている。わたしが本当に強くなっているのなら、もつと勝てるようになっていてもよさそうなものだけだ。

——もしかして、漣も強くなってる？

それは、有り得る。わたしも大概将棋に染まった生活をしているけど、漣はそれ以上だ。インターネットで対局もたくさんしているだろうし、元々凄まじく強かったから忘れていたけど、漣だつてわたしと一つしか違わないのだからまだまだ伸びしろはあったのだろう。

考えてみれば当然の事だったのだけど、少し気が遠くなる。高いハードルを超えるつもりで頑張っていたのに、ハードルの方も勝手に高くなっ

ていたみたいな感じだ。

——でもわたしも一応強くなってるみたいだし、いつか追いつけるのかなあ。

まあ、いつになるのやらと言った所か。

「透子ちゃんはプロを目指してるのかい？」

白川さんが、まるで午後の天気を探るような自然な調子で言った。

「え？ プロ？」

しかしわたしの方は、まるで予想していない間だった。今まで考えた事もない。わたしにとって、自分とはプロは住む世界の違う存在だった。

「あー、それはわたしも気になってた。物凄い熱心じゃってるもんねえ」

美里さんも我が意を得たりとばかりに便乗する。

「でもプロって、プロでしょう？ わたしなんかになれるものじゃないですよ？」

「いや、そんな事ないと思うよ。透子ちゃんの上達速度ってあれだよ。ちよつとおかしいレベルだよ。奨励会を突破して四段になれるかまでは分からないけど、女流プロなら普通にいけるんじゃないかなあ？ それだけの才能はあると思うけど」

美里さんはわたしの方をまじまじと見つめて言った。

「えつと——」

その時のわたしは、そもそも奨励会が何かすらよく分かっていなかったもので、もごもご何か曖昧な返答をするしかなかった。

「まあまあ、透子ちゃんはまだ将棋を始めて一年も経ってないんだから、そんな所までとても考えられないだろう」

白川さんが笑って助け船を出してくれてわたしはホッとした。そもそもこの話を始めたのはこの人だというのはさておき。

「奨励会とかは先の話だけど、そろそろ透子ちゃんも大きな大会に出てみたいんじゃないかい？」

「大きな大会——？」

デパートでの大会に味を占めていたわたしはこちらの話題には興味をそそられた。

「春から小学生名人戦がある。ひとまずそれを目標にやってみたらどうだろう？」

「そんなのあるんですね」

「ああ、小学生のトップを決める戦いだからね。ここで好成绩をおさめた小学生が、将来プロになってタイトルを取るなんて事もよくある」

「なるほど——」

そんな天才小学生が集う大会でわたしが勝ち進むなんてとても無理だと思ふけど。でも、もしかしたら、と思ふ事がある。

——漣なら、かなりいけるんじゃない？

ちよつと、興味がある。

「透子ちゃんなら、きつとかなり上の方までいけるよ」

美里さんが楽しげに言う。

「それは、やってみたい——かも」

聞くところによると、三月に各都道府県で県代表を決める。四月に東日本代表と西日本代表で別れてリーグ戦を行う。そのリーグ通過者でトーナメントを行い、そのベスト4が四月末に決勝大会に進出出来るらしい。決勝までいけばその模様はNHKが全国中継するそうだ。まあ、わたしは取りあえず都道府県別の代表を目指すのが目標といたところか。今まで漫然と漣を目標にしている、それが今のわたしの最終目標である事には変わりはないけど、一つこういう大きな大会に標準を定めるのも、上達にはいいかもしれないと思った。時期的にもわたしが将棋を始

めてから一年くらいになるし、いい節目だ。

——それと、もう一つ。

よし、決めた。

「わたし、その大会に出ます」

決然としたわたしの言葉に美里さんが喜ばしげに手を叩く。

「それじゃあ三月までに特訓だね！ わたしに手伝える事があったら言うてね」

「お、お願いします」

中終盤の腕力でねじ伏せているものの、とにかく平手の序盤の知識が不足しているわたしにとつて、定跡に明るい美里さんがそう言うてくれたのは頼もしかった。

白川さんはそんなわたし達を微笑ましいものを見るようにうんうんと頷いている。

「それじゃあ、この大会の結果如何でさっきの質問をもう一度させてもらおうでしょうか」

「何ですか？」

「プロを目指すかどうか。この大会は将来プロとして活躍するような全国の才能達が集まる。その中の自分の立ち位置が分ければ、考え方もまた違ってくるかも知れないよ」

「は、はあ——」

そもそもわたしは昔から自分の将来の夢というものは何もなかった。国語の時間の作文で将来の夢を書くのが課題になった時など、あまりに書く事がなさ過ぎて途方に暮れたものだ。最終的にはお菓子屋さんとか適当にでっち上げて書くのだけど、どうもそういう将来の話に苦手意識が出来てしまっているようだ。

そんなわたしにいきなりプロ棋士になるのか等と聞かれても、よく分

からないと答えるしかない。

ただ、この小学生名人戦という舞台設定がわたしに一つの決心をさせた事は、一つの事実であった。

わたしは漣の病気がどんなものか知らない。私を知っている幾つかの事柄——心臓の方に障害がある事、幼い頃からそうであった事、一年の殆どを病院で過ごしている事。それらは、直接漣から聞いたのではなく、親しく付き合っていていく中で何となく察していった事である。

わたしは漣に対して、漣の病気に關しての質問をした事がない。今まで、一度も。

何となく顔色が悪そうな時は体調について尋ねることはあるけど、病状そのものについて聞くのとは全く違う。

わたしが質問すれば、漣は答えてくれたと思う。

「どんな病気なの？」

「身体は大丈夫なの？」

「退院出来る目処はあるの？」

漣は簡単に答えてくれるだろう。

いつもの様に軽快な口調で、明るく、将棋についての質問に答えるのと変わらない調子で。

ねえ、漣。

——その病気は治る病気なの？

わたしは聞けなかった。

どうせ聞くのなら会ってすぐに聞けばよかったのだ。だけど、そのタイミングを何となく逃してしまった。そしてわたしだけが退院して学校

に通って大会に出て将棋道場に行つて、その間も漣はずっと、ずっと病院にいて——そうやっているうちにわたしから尋ねるのがすっかり怖くなつてしまった。

だから自分からそれを話題にはせず、漣が自ら語ってくれるのを待つ事にした。

でももしかしたら、漣の方も、わたしの方から尋ねるのを待っていたのかもしれない。

漣は賢い娘だから、わたしがまるで漣の病状に無頓着だとは思っていないだろう。心の奥で気を揉んでいる事はきつと漣も分かっているはずだ。

——はあ。

溜息が出る。

気が合つてるのかすれ違つているのか。宙に浮いた問いかけは時間が経つほど、触れない聖域になつていく。

だから、小学生名人戦だった。

——漣と一緒に、小学生名人戦に出たい。

あのデパートの将棋大会を経験してから、漣と何かしらの大会に出場するのはずっと夢に見ていた。

あれだけ強くて将棋が好きな漣が、大会という舞台でどんな指し手を見せるのか興味があった。それになにより、わたしが出場したと聞いただけであんなに喜んでいた漣だ。自分だつて出てみたいに決まっている。

漣を小学生名人戦に誘おう。

これがわたしのもう一つの決意。

だけど、そのためには漣の病状を確かめないといけない。

出られないと自分で分かっている人間を誘うなんてただ残酷で、漣を傷つけるだけだ。見切り発車で無神経な誘いをするわけにはいかない。

確かめないといけないのだ。

結局、これはただの口実だったのかもしれない。

漣をもっと知りたいと思いつながらもずっと踏み込めないでいた領域。

友達なら、自ら語ってくれるのを黙って待つべきか。

友達なら、わたしから聞くべきか。

分からない。多分、正解なんてないのだ。人と人との関わり方は、難

解な将棋より難しいものなのかもしれない。

小学生名人戦は、臆病な自分への起爆剤だった。

——とはいえ。

「はあ」

病室の前でまた溜め息を吐く。

いつもなら迷う間もなくさっさと入る部屋に、今日は何だか入りづら

い。わたしはずっとドアの前を溜め息を吐きながら行ったり来たりして

いた。

「あら、透子ちゃん？」

「ひやいっ！」

不意に声を掛けられてわたしは思わず飛び上がった。しかも変な声も

出た。

振り返ってみると、漣のお母さんが立っていた。とても上品で穏やかな

人だ。

これだけ漣の所に通い詰めているのだから、おばさんに会った事も一

度や二度ではない。わたしにも、いつも優しくしてくれる。

「あ、おばさん。こんにちは」

「どうしたの？ 今日は何も検査はないから、漣はいるわよ？」

「あー、ハイ。そうですね。今から入ろうかと」

完全に虚を突かれたわたしは少しぎくしゃくした返事になった。そん

なわたしの様子に気づいてか気づかないでか、おばさんはどことなく嬉し

そうに微笑んだ。

何となく、機嫌が良さそうである。何か良い事でもあったのだろうか？

「ふふ、透子ちゃん。実は今日、とてもいいお知らせがあるの」

「いいお知らせ？」

「ほら、入りましょう」

「あ、はい！」

おばさんに促されてわたしは部屋に入る。大会に誘うまでのシミュレー

ションを何度か頭の中で繰り返していたのが全て吹き飛んでしまった。

どんな周到に読みを入れても予想外の一手で全て崩壊する。実に将棋的

だ。

「あ、ママに透子！」

ベッド上で上半身を起こして『詰将棋パラダイス』（通称詰めパラ）を

読んでいた漣は、わたし達に笑顔を見せた。

「見てよ透子！ やつとこの問題解けたよ！ 二週間かかっちゃった」

そうやって漣は嬉しげにその詰め将棋の図面を見せてきた。目眩がし

そうなくらい難解な問題だった。それを解くのも凄いけど、二週間も考

える根性も凄い。

「いやあ、最後の方は本当に芸術的だったなあ。色んな方向に伸びてい

た線が、最後の最後になって一つに収束されていくっていうか——何だ

か大長編ミステリーを読んだみたいなき感じでき。序盤の方にね、『鍵』

が落ちてたんだよ。わたしはそれをたまたま拾ってたから何とかなった

けど、それがなかったもう二週間——いや、ずっと解けなかったかもし

れない。本当、偶然で見つけた時は、これがこんな所で役に立つなんて

想像もしてなかったんだけどね！」

漣がこうなったらしばらく止まらない。おばさんの言っていた良いお

知らせというのは気になるけど、一旦漣の話を書く事に徹する。

「本当、透子ちゃんがお友達になってくれてよかったわねえ」

漣の詰将棋話の終わりに、おばさんがしみじみとした声音で言った。

「えへへ」

漣が照れくさそうにぎゅっと大きな熊のぬいぐるみを抱きしめる。わたしが漣の誕生日に買ってプレゼントしたものだ。将棋の穴熊をイメージして選んだのだけど、穴の要素はないので知らない人には普通のぬいぐるみである。

「この子、将棋が好きでしょう？ でもわたしは将棋はまるで分からないし、お父さんもそこまで強いわけでもないから、漣の話にはついていけなくて——透子ちゃんも凄く強いよね？ 透子ちゃんと知り合ってから、この子ったら凄く楽しそうで、今まで将棋の話が出来るお友達っていなかったから」

「いえ、そんな——」

わたしも今の詰将棋話は半分もついていけてませんので。

「漣も大事にしなさいよ。こんな子他にいないわよ？」

「分かってるよ——」

漣はそう言って口を失らせる。おばさんと話す時の漣は、わたしと話す時よりもちょっとだけ生意気な一面が見える。

「あの、それでさっき言ってたいいお知らせって？」

おばさんが心得た様に頷く。

「何それ？」

漣も何も知らないらしい。不思議そうな顔をしている。

「漣ね、ここ最近結構体調いいでしょう？」

「うん。まあ」

「——退院しても大丈夫って」

「えっ？」

漣もわたしも、一瞬言葉の意味が呑み込めずばかんとした表情になる。

「ほ、本当？」

「ええ、先生もこの調子なら自宅療養に切り替えられるって。無理は出ないけど、学校にも通えるようになるかもしれないわ」

おばさんのその言葉に、漣は何も言わなかった。

何も言わず、ただぬいぐるみをぎゅっと抱きしめた。強く、強く抱きしめていた。その様子に、何だかわたしの方がもらい泣きしそうになっていた。

「ねえ、お母さん。透子に話してもいいかな。わたしのこと」

漣の申し出におばさんはハツとした顔になった。しかし、程なくして黙って頷いた。

「漣の事？」

「と、うかわたしの身体の事。透子も気になってたでしょ？ わたしがずーっと入院してるから」

「う、うん。それは、そうだけど——」

やっぱり、と漣は笑った。

「聞かれたら答えたけど、やっぱり聞きづらいよね」

あつげらんと言ふ。まるで世間話をするのと変わらない調子だ。

「わたしはね、生まれつき心臓が弱かったんだ。わたしの身体の成長に、心臓がついていけないんだって。だから——元々、十年生きられないだろうと宣告されてたの」

「十、年？」

わたしは思わず絶句する。今のわたしが今年で十歳。わたしの人生がこの歳で終わるかもしれないなど、想像した事すらなかった。

漣は、それを承知の上で今まで生きてきたのか。

「そんな顔しないでよ。何だかんだでわたしもうすぐ一二歳だし、意外ともう十年くらい生きられるかもしれないよ」

漣はそう言うが、わたしの気持ちはまるで晴れない。

「でも、手術とかで、何とかなるんではしょ？」

わたしは縋る様に言ったが、漣は苦笑して首を横に振る。

「心臓移植すれば何とかなるらしいけど、ちょっと難しいかな。ドナーもないしお金もないし。期待はしてない」

「そんな——」

「仕方ないよ。わたしが心臓貰うって事は他の誰かが死んじゃうって事だし。そうになったら勿論感謝して頂くけど、そうならなかったら——仕方ないよ」

仕方ない。漣はそうやって、全てを受け入れているのだろうか。

——漣は、本当に強いな。

これではわたしは、悲しむ事も同情する事も出来ない。

だったら、わたしに何が出来たろう？

せめてわたしは、親友としてずっと側にいようと、そう思った。

——言ってみよう。

「ねえ、春にさ、小学生名人戦っていうのがあるんだって。全国の小学生が出場してて、決勝まで行ったらNHKで放送されるらしいよ。退院したらさ、わたしと一緒に出来ない？」

「小学生名人戦——」

漣は反芻して、チラリとおばさんの顔を窺う。

「いいんじゃないかしら？ でも、無理は禁物よ」

その言葉を聞いた途端、漣の顔がぱつと輝く。

「やった！ わたしも一度出てみたかったんだ！」

漣はわたしの手を取ってぶんぶん振り回す。

「ちよ、ちよっと！」

「そうと決まったら早速特訓しなきゃ！ 透子は序盤の対策だよ。色々やってるけど、今のところ矢倉が一番上手だから、矢倉を中心に勉強していったらいいと思うよ。わたしも勉強し直さないと！」

漣はいつも明るくて、辛そうな素振りを見せる事はない。体調が悪くて辛そうな事はあっても、わたしに愚痴を言ったり弱音を吐いたりした事は今まで一度もなかった。

だけど、だからといって漣が自分の境遇を平然と受け入れられているわけでもないと思う。漣だってきつと寂しいし苦しいし、わたしの様に皆と一緒に学校に行くような、そんな普通の生活がしたいのだ。でも漣は強くて、そして優しいから、そんな自分を他人に見せる事はない。

「NHKに行くぞー。おー！ ほら透子も一緒に！」

「お、おー」

「声が小さい！」

「おー！」

今の漣の喜びようは、そんな気持ちの裏返しでもあるのかもしれない。

その日の夕方、漣は熱を出した。

「えへへ、ちよっと興奮し過ぎちゃったのかも」

漣はそう言って苦笑した。

けれど、翌日になっても漣の熱は下がらなかった。

その翌日も、さらにその翌日も、漣の熱が下がる事はなかった。

★「透子の師匠として」

結局、漣の退院は延期になった。

あれから二週間はずっと熱が上がったり下がったりで、結局元の木阿弥というわけだ。

おばさんはあの時、曖昧な言い方をしないで、「もう退院出来る」とはっきり言っていた。その意味が、今のわたしには少し分かる。

多分、漣の体調が上向いたあたりから退院出来るかもしれない、という話が出ていて、ただ後でぬか喜びになってはいけなから、余程確証を得るまで漣にも黙っていたのだ。

それで、満を持して「良いお知らせ」をしたら、その日のうちに熱発してしまった、と。

なんだそれは。

こんな話があつていいのか。

漣はこんな生活をずっと続けていたのだろうか。

漣が大会に出られないとか、美吉野将棋センターにも連れて行きたかったとか、そういう残念さは確かにある。

でもそんな事より何より、漣の気持ちを思うと胸が張り裂けそうだった。

パチリ、パチリと病室に駒の音が響く。それでも漣の指し手は澱みも濁りもしない。いつもと変わらない綺麗な将棋。

「ん——」

わたしの一手に漣の手が止まる。そして澄んだ瞳で盤面をじっと見つめる。

この娘には、この暗い盤上の迷宮のどこまでが見えているのだろうか。年が明けても漣の状態は変わらない。もう、退院の話は完全に流れてしまっていた。

すつと歩を突き出す。軽視していた一手だった。でも改めて読んでみると、物凄く厳しい。今ここでは何でもないけど、普通に進めば十一手

後にわたしは致命的な一撃を貰うことになる。

——回避出来るかな。

強引にその順を避ける事は出来るけど、それはそれで別方面で多大な被害を受ける。回避手順はおおよそそんな手ばかり。こうなるともう収拾はつかない。時既に遅し——だ。

「ねえ透子」

「えっ？」

対局中に漣がわたしに話しかけるのは珍しいので、わたしは少し驚いた。

「もう一月だけど、小学生名人戦の予選もうすぐだよ。もう応募は済ませたの？」

「えっと——」

まだだった。当初の様に、ただ純粋に楽しみにする事が出来なくなつたため、なかなか応募まで進まないまま時間だけが経過していた。漣がこんな事になつても、出場してみたい気持ちはまだ残っているのがまた後ろめたい。

「まだなの？」

「うん」

「早くしないと締め切られちゃうよ？」

漣はわたしの顔の覗き込むようにして言った。

「わたし、出るのやめる」

「えっ？」

「だって、漣が出られないのにわたしだけ出るなんて——そんなのやだよ。わたしは漣と一緒に出たい。今度にしようよ。大会は他にもあるんだし、漣が元気になってから、一緒に出ればいいじゃない」

わたしの言葉に漣は驚いた様に瞳をぱちくりさせただけで、ややあつて

小さく微笑んだ。

「透子なら——そう言うんじゃないかと思った」

「え——」

「透子が出たいんでしょ。わたしの事は気にしないで、出たらいよいよ」

「でも——」

漣は困った様に小首を傾げる。

「うーん、何て言ったらいいかな。やっぱり将棋って二人で指すものなんだよ。透子だってわたしと会って将棋を覚えて、デパートの大会に出て、色んな人と出会えたわけでしょ。学年とか、大人と子供とか、性別とか、そういうの関係なしに人と人とを結びつける力が、将棋にはあると思うんだ」

水瀬漣はとても優しい。自分がどんなに辛い時だって、周りの人間の感情を繊細に感じ取って、気を使う事が出来る。

「小学生名人戦なんて絶好の機会じゃない。きつと色んな人に会えるよ。将来プロになる子もいるかもしれないし、そうでなくても大人になっても将棋を続けるかもしれない。その大会を運営する人とか、色んな人を見て欲しい。だからそんな機会を、わたしなんか気に使って不意にするなんて、見過ごせないなあ。透子の師匠として——ね」

「漣——」

漣の言葉を受けたわたしの胸に去来したのは、感謝とか尊敬みたいな明るいものではなかった。何だか爆発しそうなの、張り裂けそうなくらい強くて、それでいて正体の分からない感情だった。

——どうして、漣は、そんなに。

それが喉まで出かかって、でもわたしは堪えた。

今の感情を漣にぶつける事は、何の意味もないし、解決にもならない。それもまた事実ではあると思う。でもわたしが堪えきったのは、我慢強

かったからでは決してない。

単に臆病だっただけだ。

「分かった。出るよ、わたし」

漣は嬉しそうにっこり笑って頷く。

「よしよし、その意気だ。特別サービスで現局面にヒントをあげよう。透子の側に返しの手筋があつてまだまだ戦えるよ」

「え、本当？」

「もちろん、透子に分かるかな？」

わたしはまだ、漣に甘えていた。

二月十五日、わたしは一人で小学生名人戦県予選に出場した。

市民ホールは多くの小学生達で賑わっていた。広い部屋に長テーブルがずらつと並べられ、一つのテーブルにつき将棋盤が二つずつ乗っている。

その将棋盤は木でもマグネットでもなく、布だった。

「ふうん。こういうのもあるんだ」

大人数で大会をやるとなると、将棋盤を運ぶのも簡単ではないだろう。確かに布なら軽いதாகさん持ち運べるなあとわたしは妙に感心した。

当日、多少の緊張はあつたけど、そこまでガチガチになる事もなく、結果的にはいい精神状態で当日を迎えられたと思う。

やはりそれには、わたしに出場を決意させた漣の言葉によるものが大きい。将棋の勝ち負けにはもちろん拘るけど、それ以上に、様々な形で将棋に関わる人達を見ようと思つたのだ。

初めは漣としか繋がっていなかったわたしの将棋が、デパートの大会で沖田六段、美里さんに白川さんと出会い、この日小学生名人戦の予選にやって来たと思うと、何だか感慨深いものがあつた。

——世界は広いなあ。

市民ホールの将棋大会の会場でこんな事を考えていたのは、多分わたしのだけだ。

だからこそ、漣と一緒に出たかったのだけど。

いや、やめよう。誰よりも参加したいと思っていたのは漣なのだから。県代表選はまず、二勝抜け二敗失格のリーグ戦でまず予選を予選を行い、勝ち抜け者で決勝トーナメントを行う。その決勝トーナメントの優勝者が栄えある県代表となり、次のステップである東日本リーグへ進む事になる。

わたしは二連勝で予選リーグを突破した。短い期間ながらも序盤について特訓に特訓を重ねたのが吉と出たらしい。危なげなく勝ち進む事が出来た。

続いて決勝トーナメント、こちらはやはり一筋縄ではいかず、途中で苦戦に陥る事もままあった。

しかし、それでも漣よりも強いと思える様な子はいなかった。

まあ、だからといってそれでわたしが勝てるかという点、別に関係はないのだけど、その事を強く念じると劣勢でも不思議と心が折れなかった。

——漣よりマシ、漣よりマシ。だから諦めるな。きつとチャンスは来る。

漣に話したら気を悪くするかもしれない。まあ、漣とやる時、いかにノーチャンスで完封されているかの裏返しでもあるし、何だかんだと逆転して勝てたし、いいだろう。これもスバルタ指導の賜という奴だ。

勢いに乗ったわたしはあれよあれよという間に決勝トーナメントを勝ち進み、そしてそのまま優勝してしまった。

——あれ？

何だか自分でも状況をよく認識出来ていなかった。普通に指していた

らいつの間にか決勝まで進んでいて、気がついたら相手の玉を詰ましていた、という感じだ。

全然実感がなかった。実感がないので喜びもあまりわかず、優勝したのに表彰式では何だか不思議そうなぼけーとした顔をしていた。

後で送られてきた写真を見ても、準優勝の子の方がキリッとした顔つきをしているのに対し、わたしの方は間抜けそのものみたいな感じだった。

「えーっと、透子が普段はとても可愛いのはわたしはよく知ってるから、だからこの写真の透子が本当の透子じゃないってわたしはちゃんと分かってるよ。だから、写真うつりなんて気にする事ないよ。うん。透子は可愛いんだから、写真なんて——ね？ ね！」

漣がその写真を見て引き攣った顔で必死でわたしをフォローしていたのが忘れられない。そこまで酷いのかと暗澹とした気分になった。

そんなわけで、わたしは県大会を優勝した。漣が出場していたら全く違った結果になっていたかもしれないけど、それは言っても栓のないことだ。

それにしてもわたしが優勝するとは。自分で自分が信じられない。しかし一方で、将棋の内容そのものはかなり安定していたのもまた事実だった。

——もう一回予選リーグから始めても、また優勝出来る。

自分なんか——と思う一方で、客観的で冷徹な感触が、わたしにそう告げていた。

——自分の立ち位置が分かれば、考え方もまた違ってくるかも知れないよ。

わたしの力はどれ程のものなのだろう？

一体どこまで通じるのだろうか？

漣との距離感でしか将棋の力を測っていなかったわたしが、初めて自分の力を試してみたいと思ったのだ。

冬が過ぎ、少しずつ気候が暖かくなっていき春めいて来るにつれて、漣の体調は悪化していった。県予選が終わったあたりから、ずっと気怠そうにしている、わたしが見舞いに来てても以前の様にずっと将棋を指す、という感じではなくなっていた。

「ごめんね。今が大切な時期なのに——」  
「うん。いいの」

わたしの言葉を受けて漣が弱々しく微笑む。

元々漣と仲良くなるために指していたわけだ。大会の前に漣と練習将棋が指せない事など、わたしにとってはさして重要ではなかった。それより何より、漣の体調の方が心配だった。

出会ってそろそろ一年になるけど、将棋を指す元気もない漣は初めてだったのだ。

「明日、東日本大会だよね」

「うん」

「頑張ってるね。透子なら、良いところまでいけるんじゃないかと思う」

「う、うん——」

わたしはずっと、将棋を指している限り漣は大丈夫だと思っていた。どんなに身体が弱くても、病に蝕まれていても、将棋を指している漣は誰よりも楽しそうで、輝いていて、生命感があつた。

ただどそれを失った漣の身体は、年齢不相応に小さく、色が白く、今にもどこかに消えてしまいうさなくらい、弱々しかった。

——このままじゃ、いけない。

わたしは直感的にそう思った。でもわたしは医者ではないし、病気の

事なんて何も分からない。何か、何かわたしに出来る事はないだろうか。

「ねえ、漣。明日の大会でもしわたしが優勝して、決勝トーナメントまで行けたらさ、平手で——本気で勝負してくれないかな？」

気がついたら、わたしはそんな事を言っていた。

何かを言わずにはいられなかったわたしが言った言葉が、これだったのだ。

漣は気怠げではありながらも、以前の様な明るさのある顔で微笑んだ。

「うん、そうだね。透子も強くなったから、そろそろいいのかもかもしれない。やろう、平手で真剣勝負」

「よし、約束だよ。わたしも明日頑張るから、漣も——元気になってね。

もしわたしに負けたって、体調が悪かったなんて、無しだからね」

「あはは、言うねえ。自信ができてきたのかな？」

「う——」

いくら最近力がついてきた実感があるとはいえ、優勝出来るだろうとまでは全く思わなかった。まして平手で漣と渡り合えるとは、とてもじゃないけど、思えない。

直ぐに言葉に詰まったわたしを見て、漣はクスクスと笑った。

「励ましてくれようとしてるんだよね？　ありがと」

「え、いや。そんな——」

完全にしろどもどろ。全然駄目だ。

漣はばふん、とベッドに仰向けになる。

「透子は優しいな。だけどいつか——」

「えっ？」

「ねえ透子。あのさ——」

漣は真つ直ぐにわたしを見た。その漣の瞳は、いつもとはまるで違っていた。

まるで縋る様な、弱い視線がわたしの胸に刺さる。

「——ごめん、何でもない」

そう言って笑った。あの言葉の続きを、結局漣は口にしなかった。漣がこの時、何を告げようとしたのか。わたしには分からなかった。

東日本代表戦にステージが進み、会場を東京に移したからといって、会場がアリーナみたいな場所にパワーアップするという事はなかった。わたしが出た県大会の市民ホールも最近建てられた立派な所だったので、そういう意味では大した違いはない。しかし、予選を勝ち抜いた子達が集まっているからなのか、予選とは違うピリピリした緊張感が会場全体に漂っている。

それに、プロの棋士も複数人来ているらしい。

「あつ！」

その中にわたしは知っている顔を見つけた。沖田六段が、年配の棋士と話をしていた。沖田六段も直ぐにわたしに気がついて、笑顔で軽く手を振った。

「やあ、来たね透子ちゃん。県予選を勝ち抜いたのは白川さんから聞いたんだ。今日は頑張ってるね」

「はい！」

わたしは力強く頷いた。沖田六段とは将棋大会以降も、美吉野将棋センターで何度か顔を合わせた事がある。その時も指導対局をして貰った事もあり、プロ棋士だからと最初に会った時の様な緊張は覚える事はなくなった。

でも沖田六段はかっこいいので違う意味でのドキドキはある。

これは漣にも秘密だ。

「沖田、この娘がお前の言っていた子供か？」

さっきまで沖田さんと話していた、眼鏡を掛けた白髪交じりの年配棋士が、わたしの方に目を向けて言った。

この人は本やテレビで見た事があった。剣崎勇八段、沖田六段の師匠だ。こちらには当然慣れていない。わたしに緊張が走る。

「え、えつと——初めまして、新庄透子と言います。沖田さんにはいつもお世話になってます」

そう言ってぺこりと頭を下げる。将棋棋士は師弟制度を持っているため、全ての棋士に師匠はいる。師匠はその業界での親みたいなものだ——と漣が言っていた。ならこれで大丈夫だろうか？ 失礼になってなければいいけれど。

「はっはっは、礼儀正しいじゃないか」

剣崎八段はそんなわたしの様子を見て豪快に笑った。その声が大きかったので、わたしは思わずぎくつとした。

「師匠、怖がらせてますよ」

「え、マジか」

「師匠はただでさえ顔が怖いんだから——」

沖田六段にそう言われた剣崎八段は苦虫を噛み潰した様な顔になる。それでもわたしと向き直った時は、何とか頑張って笑顔を作ろうとしている様だった。

その顔がまた怖いんだけど。

「面白い子供がいるって沖田の奴が言うもんだから、どんなものか見てみたかったんだ」

「はあ——」

面白い、ですか。沖田さんにそう言われていたというのは、喜んでいいものかどうか判別がつかない。

「立場上特定の子供の応援は出来ないが、お嬢ちゃんの対局は注目させ

て貰うとするかな。ま、そんな事は気にせず今日明日は精一杯頑張るな」

「はい、ガンバリマス」

緊張で声がかチコチになっていた。この人見知り克服される日は来るのか来ないのか。

さて、ついに本番だ。東日本大会は、各県の代表者二四名と海外からの招待選手——今年は北欧から一名、上海から一名の計二六人を七組に分けてのリーグがまず行われる。その勝ち抜き者でトーナメントを行い、優勝者と準優勝者が東日本代表として、五月に行われる小学生名人戦決勝トーナメントに出られる、というわけだ。

予選リーグは一回戦は中盤の相手の失着を突き、そこで得たリードを最後まで守りきって勝利した。その勝ちで勢いに乗ったわたしはそのまま三連勝で予選リーグを突破し、大会二日目の決勝トーナメントまで駒を進めた。

さて、決勝トーナメント一回戦の相手は——フィンランドからの招待選手だった。金色の髪に青色の瞳、なんだかお人形みたいだ。将棋を指しにはるばる日本まで来たのだろうか。

そんな情熱を遙か異国の彼女が持っている事にわたしは嬉しさを感じた。

漣はわたしが将棋をすると言ったとき、とても喜んでくれたけど、それはもしかしたらこんな気持ちだったのかもしれない。

——でも、それと勝負は別だからね。

彼女の名前を確認する。Antia Hakkarainen さんね。うん、読めません。アニタでいいかな。完全にローマ字読みだけだ。

「ヨロシクオネガイシマス」

アニタは片言だけど、しっかりと日本語で挨拶をした。

「よろしくお願いします」

わたしも頭を下げて、盤面を見下ろす。スイッチを対局モードに切り替えて意識を集中していく。

お互い相居飛車で、戦型は矢倉になった。しっかりと定跡を勉強してきている感じがする。フィンランドの本屋に将棋の本が気楽に置いてあるとは思えないけど、一体どうやって調べてきているんだろう。

そう言えば、漣が外国人と交流出来る将棋のサイトがあるみたいな話を聞いた事がある。そういうので学んでいるのだろうか。

いづれにせよ、予選リーグを突破してここまで来ているのだ。絶対に油断は出来ない。

駒がぶつかり合い、局面が中盤戦入っていく。プロは最終盤の詰む詰まないというあたりでまで定跡化している形もあるらしいけど、わたしには当然関係ない。既に未知の局面である。

——ここだ。

ここを中盤の勝負所とみたわたしは丹念に読んでいく。思い出せる類型と比較、その局面と比べて今のわたしは得をしているか？ 損をしているか？ 似た筋の攻めは通用するか？

さらに深く読む。自分が指す手と相手が返す手の繰り返しわたしの脳内で放射状に広がっていく。

将棋指しは何手先まで読めるのか？ という質問をよく耳にする。何手も先まで読んでいる事もあれば、三手先も読めない局面もあるから一概には言えない。それを将棋の手順は一本道とは限らない。一つの手に三つの応手があると、それを五手先まで読んだら十五手だ。さらに枝分かれすれば膨大な手数を読むことになる。

大事なのは読む事だけではない。いくらたくさん読んでも指せるのは一手だけ、その取捨選択こそが、勝敗を分ける。

——あれ？

読みに没入していくうち、わたしは不思議な感覚を覚えた。まるで水が流れるように、脳内を符合が駆け巡っている。いつもなら迷う取捨選択が自然に出来ていく。

頭の中にある盤面の隅から隅までが綺麗によく見える。深海に潜っていく様に深く読んでいるのに、それでいて空を飛ぶ様な広さを同時に感じる。

意識が広がって、対局相手の息づかいまで聞こえてくる様だ。

——なんだろう、これ。

まるで、自分がこの空間と一体化したみたいだ。

普段ならもつと決断に迷う様な手を、気づけばわたしは自然に指していた。

わたしは少しずつ、しかし着実にリードを積み重ねていく。

難解な局面の未来が閃光の様に脳裏を過ぎる。

わたしは躊躇わずにそこに踏み込んだ。

しかし、そこに落とし穴があった。

——あ、あれ？

行けると思ってたかなり際どい変化に踏み込んだわたしだったが、いざ

その局面を目の前になると難しくよく分からない。

さっき読んでいる時、決まりそうな手順が見えたと思ったのだけど、思い出せなかった。

いや、あれは本当に浮かんでいたのだろうか。こうなってみると何だか幻だったような気さえしてくる。

——というか、これって。

さっきまでの不思議な集中状態が、いつの間にか解けていた。

スポーツ選手は集中力が極限まで高まったとき、ゾーンと呼ばれる特

殊な精神状態に入ると聞いた事がある。さっきまでのわたしはそれに近い状態だったのかもしれない。だとすれば、元々そんなに長続きする様なものでもなかったのかしれないけど。

——ここで、これは、どうしよう。

この局面には何かがある。

わたしの直感はそう告げていた。しかし、それが分からない。さっきまで確かに見えていたのに。

プロなら正解が分かるのだろう。多分漣でも見つけられるだろう。けどわたしは、盤上の深い闇に光を見出す事が出来ない。

もどかしい。

不甲斐ない自分が恨めしい。躍動する駒達に応えられないわたしが悔しい。

決勝トーナメントは二十分切れ負け。切れ負けという事は、時間制限が予め決まっていて、それをオーバーするとその場で負けというルールだ。この時のわたしの残り時間は十分ほど、まだ半分ほど残っていた。

ここでわたしは、この局面に残り時間のうち九分四〇秒を投入して考えた。

——見えた！

先ほどのわたしの直感は間違っただけではなかった。一度は霧散したイメージを時間ギリギリで再び捕まえた。

しかし、残り時間がない。当たり前だ。一手に一秒も掛けずに指さなければならぬ。

勝ちまでの手順は見えている。とにかく急いで指せ。

早く！ 早く！

相手玉が完全に寄りのルートに入った。もう一息だ。

「あ——」

しかし、無情にもわたしの対局時計は止まった。  
時間切れ、負けだ。

負けるときこそ、胸を張ってはつきり言わないといけない。わたしは全力で戦った。対局中のミスや自分の弱さが嫌になる事はあっても、真剣に指した事に関しては一点の曇りも無い。

だから、どんなに悔しくても、曖昧に濁すなんて事はせず、はつきりと宣言するのだ。

「負けました」

こうしてわたしの初めての小学生名人戦は、東日本大会ベスト8で幕を閉じた。

「——ふう」

閉会式を終えて、ようやく気が抜けたわたしは息を吐いた。一回戦で負けたのだからずっと張り詰めていても仕方がないだろうに、なかなか収まらなかった。

徐々に人がまばらになっていく会場に、わたしはしばらく佇んでいた。戦闘モードみたいな対局時の緊張状態は解けて来たものの、まだ頭の中では今日指した将棋の内容がぐるぐる回っていた。

難解な局面、正解があると告げる直感、それが分からないわたし。

「負けちゃった——か」

眩くと改めて実感が湧いてくる。胸にすぎずきとした痛みが広がる。優勝するって言ったのに。

それで、平手で真剣勝負するって、漣と約束したのに。

「——悔しいなあ」

何でわたしはこんなに弱いんだろう。

「悔しいよ」

痛いくらいに拳を強く握って、わたしは呟いた。

「お嬢ちゃん、どうして負けたと思う？」

「えっ？」

不意に声を掛けられた。振り返ってみると、剣崎八段が立っていた。どこか真剣そうな顔つきをしていて、不思議とわたしはそれを怖いとは感じなかった。

「時間が——足りませんでした」

「ああ、見た。時間切れ負けだったな。だけど、どうしてあの局面に九分四〇秒も使った？分かってるだろう？ 形勢自体は悪くはなかった。次善手を選んでいても、構わない局面だったはずだ」

そう、あの局面。形勢自体はこちらが優勢だった。だから、あんな無理をして最善手を探す必要もまたなかった。次善手で妥協していても、

十分だったのだ。むしろあんなに時間を使っては、それが最善手であっても勝負そのものの勝ち目はとても薄くなる。

「そうしなくちゃいけないと——思ったからです」

「そうしなくちゃ——か」

——ああ、そうか。

いくら研ぎ澄まされた直感で正解がどこかにあると分かったとはいえ、あんな無謀な事をした理由が自分でも理解出来てなかった。

「ただ今、一つだけ心当たりが思い浮かんだ。」

「盤上から最善の一手を見つけるのが棋士だって、友達からそう教わったんです。きつと、だからなんだと思います」

「盤上から最善の一手を見つけるのが棋士——か。くく、あはははははは！ 自分が言っている事が分かっているか？ それは沖田にも、俺にも——羽川にだって難しい事なんだぞ。それを小学生が——ははっ！」

突然、剣崎八段が笑い出した。思わぬ反応にわたしは面食らう。

「面白い娘がいるからどうしても見てくれと沖田が言うからわざわざ来てみれば——なるほど、これは面白いかもしれない」

劍崎八段は笑いを止め、再び真剣な顔つきになる。「もう一度聞く。棋士新庄透子はどうして負けた？」

その問いにわたしは再び考える。どうしてわたしは負けたんだろう。

時間がなかったから？ 次善手で妥協しなかったから？ 違う。

「——弱いからです。あの手を九分四〇秒じゃなくて、四〇秒で見つけられていたら、勝てました。イメージがあやふやだったから、分からなくなりました。それはわたしが——弱いからです」

劍崎八段は頷く。

「ああ、お前は弱い。他の誰にも見えない何かを創造する力があるのに、それを実現する力がまだない。だが、強くなれば、きつとお嬢ちゃん理想を盤上に表現出来る様になるかもしれない。今と比べものにならないくらい強くなれば——」

強くなる。

今の弱いわたしよりも、ずっとずっと強くなる。

大局感のイメージにわたしの実力が追いつくくらいに。

それは、それが出来た時のわたしは、きつと水瀬漣をも超えている。

それくらいじゃなきゃ、出来ない事だ。

「なあ、プロを目指す気はないか？ その気があるなら、俺の門下に迎えてやる」

わたしはそれを、求めているのだろうか？

★「無神経なんだよ」

ここがわたしの人生の一つの分水嶺だった。今まではわたしはプロになりたいか否か、なりたいとしてそれが本当に可能かどうか、くらいの事しか考えていなかった。

それも周りにプロの話をされて何となく妄想しただけで、まるで具体的なものとして捉えていなかった。

しかし、それがにわかにも現実味を帯びてきた。

劍崎八段に弟子入りを誘われた事。それは勿論大きい。

しかし、それだけでは無い。

——強くなるために、自分が理想とするものに少しでも近づくために、プロを目指す。

劍崎八段との出会いは、人生の結果として見ていた『プロ棋士になる』

という夢の実現を、より強くなるための手段へと変容させてしまった、わたしが本当の意味で、プロになる事への関心を持った瞬間だった。

とはいえ、即答出来る様なものではない。何もかも、分からない事だらけなのだ。

——漣に、聞いてみよう。

結局、そういう事になる。

病室の扉を開ける。

まず敗戦の報告からやらないといけない。東日本大会で負けたわたしは漣との約束を果たせなかった。まあ、角落ちでもほとんど勝てない現状、平手で勝負したって結果は目に見えていたかもしれないけど、それでも残念だった。

漣はこの日も、ベッドにぐったりと横になっていた。少し前までは、パソコンで将棋を指しているか、本を読みながら棋譜並べをしているか、詰将棋を解いているか——必ずそのどれかだった。

「ただ、最近はそのような姿を見る事はなくなりました。」

「身体がきつくて、それもままならないのだ。」

「漣はわたしに気がつくのと、目許に置いていた右手をどかし、ちらりと私の方を見た。」

「東日本大会だけだね。ごめん、負けちゃった」

「——そう、なんだ」

それからわたしは、東日本大会での将棋の様子を語って聞かせた。

自分でも信じられないくらい深く入り込んで、何だか不思議な感覚に陥った事。

途中その集中状態が途切れ、難解な局面の中で抱えていた読みのイメージが霧散した事。

再びそれを掴むために残り時間の大半を消費した事。

それで時間が足りずに負けた事。

漣はそれを黙って聞いていた。感情を失ったかのように、ただ淡々と。

普段の漣はもっと感情豊かだ。いつも大袈裟なくらい喜んだり驚いたりする。

初めは、今日は余程体調が悪いのだろうと思った。だからあまり長居はせずに、用件だけ話したら早めにお暇しようと考えていた。

「ただ、それは少し違っていた。体調というより、機嫌が悪くて塞ぎ込んでいる感じだ。」

「こんな漣は初めて見た。どう対応していいものか分からない。」

「それでさ、九分四〇秒も考えちゃったんだよ。そんなに使ったら勝てるものも勝てないって。馬鹿だよ、あはは」

少し焦りを覚えたわたしは、わざと明るい感じで語る。でも明らかに慣れていなくて、テンションが空回転している気がする。

「うーん、そんな事ないよ。透子は棋士だから。それも元々——わたし

が言った事だから」

漣はぼつりと言った。表情は変えず、どこか冷めた口調だった。それでもわたしはぼつと黙っていた漣がようやく口を開いた事にホッとした。

——透子は棋士だから。

そしてその言葉を心の中で反芻する。

あの事、今話そうか。

「それでね、漣。大会が終わった後に、劍崎八段から声を掛けられたんだ。わたしはどうして負けたんだと思うかって、そう聞かれた。だからわたしは、弱いから、最善手を見つけるのに九分四〇秒も掛かるから負けたんだって答えたの」

「それで？」

「わたしは、他の誰にも見えない何かを創造する力があるのに、それに実力が追いついていない。わたしが思う事を実現するためには、今とは比べ物にならないくらい強くならないといけないって、そう言われた。だから——」

わたしの言葉の途中から、漣は少し眉間に皺を寄せながら、目をぎゅつと瞑った。

「だから、劍崎八段の弟子になってプロを目指さないかって、そう聞かれた」

今のわたしの発言内容は結構衝撃的だと思うのだけど、しかし漣はさしたる反応を見せなかった。ただ短く「そう——」と答えた。

「それで、なるの？ 弟子に」

わたしは首を横に振る。まだ分からない。こんな事、すぐには決められない。

何せ一年前は将棋も知らなかった人間だ。定跡の知識もさることながら、業界そのものについてもほとんど分からないのだ。

「分かんない。いきなりだったし、プロになったらなんて、今まで真面目に考えた事なかったから。どうしたら、いいのかな——」

「自分で決めなよ。自分の人生でしょ」

漣は短く答えた。それは漣に似つかわしくない投げやりな返答だったけど、わたしはなおも言葉を続ける。

「でもわたし、将棋界の事とか全然分からないから、漣の意見も聞きたいと思って——」

「——うるさいな」

「え？」

今、なんて——？

「うるさいって言ってるの！ 何よそれ、自慢のつもり？ 透子ばっかり大会に出て、色んな人と指して、プロに弟子入りを誘われた？ わたしは！ わたしはずっと病院から出られないのに！」

突如、漣は怒り出した。怒って、わたしに向かって怒鳴りつけてきた。漣の剣幕に、わたしは血の気が引くのを感じた。

「わたし、そんなつもりじゃ——」

そんなつもりじゃない。それは嘘ではない。

だけど漣が、病院の外の世界に出て行けるわたしを見て、その事に痛みを感じていた事に思い至っていなかったかというと、それは嘘だ。

漣は優しい。どんな時だって他人に気を使うし、苦しくても決して他人に弱音を吐かない。

それは漣が自分の境遇に痛痒を感じていないからでは決していない。単純に、水瀬漣という少女が並外れて我慢強いからに過ぎないのだ。

わたしはそれを知っていた。一年間とはいえ、他のどの友達よりも深く漣に関わっていたから、気づいていた。

だけどどうしていいのか分からず、結局何もしなかった。

わたしは、漣を追い詰めていたのだろうか。

「れ、漣——わたしは——」

わたしは何かを言おうとしていた。それは反論だったかもしれないし、言い訳だったかもしれない。

しかし二の句が継げない。言うべき言葉が見つからない。

「透子は、透子は——！」

なおも漣は怒鳴る。瞳に涙を一杯に溜めて。

「無神経なんだよ！」

刃物の様な言葉がグサリと胸に突き刺さる。心の傷口から罪悪感がじわじわと溢れだしてくる。胸中がどす黒い感覚で一杯になる。

「何よ突然怒り出して！ 意味が分からないよ！ わたしに言いたい事があつたならさっさと言えばよかったじゃない！」

黒い感情のままに、わたしも大声を上げていた。

違う、こんな事が言いたいんじゃない。

「大会だって、わたしに出てって言ったのは漣じゃない！ それをいきなり怒り出して、わたしが自慢のつもりだとか無神経だとか、自分勝手だよ！」

本心とは裏腹の酷い言葉がわたしの口をついて出てくる。

これを言っているのは本当にわたしなんだろうか？

わたしは、漣をこんな風に思っているのか？

「——出てって！」

漣が枕を投げつけてきた。不意を突かれたわたしは顔面にまともに食らってしまった思わずよろけた。

「出てってよ！ 二度と来ないで！ 透子なんか、透子なんか——」

漣は最後には泣き出しそうな顔で俯いた。

「もう、顔も見たくない！」

「——！」

わたしの中で、何か切れる音がした。血が上っていた頭がさっと冷たくなり、また何か言おうとしていた悪口を辛うじて飲み込ませた。代わりに、漣との関係が取り返しのつかない事になったのを、わたしは否応なく感じた。

わたしは黙って漣に背を向け、逃げるように病室から出て行った。

★「大切だから」

週末、天気は快晴。わたしの心とは裏腹に心地の良い日射しだ。漣と喧嘩してから一週間が経つ。あれから一度も漣と会っていないし、電話もしていない。仲直りするならば自分から病院に行かないといけないのだけど、それでわたしはどんな顔をして何を言えいいのか、まるで分からない。

休日のこの時間帯は、何か別の用事がない限りはいつも漣の所に行っていたけど、今日は近所の公園にいた。

病院に行くのが気が進まないなら、美吉野将棋センターにでも行くこうと思っていたのだけど、歩いているうちに、将棋を指すのも嫌らしくなってしまう。

思考に重しが乗った様に重たい。あれからずっとこんな感じである。こんな状態ではどうせ将棋を指してもろくな事にならないだろう。

ベンチに座って公園の景色を眺める。子供達がサッカーで遊んでいた、老人がゲートボールをしたりしている。

何の変哲もない、そこにあって当たり前の景色である。こうと意識しなければ、わたしの目に止まる事すらなかっただろう。

だけど、漣にとってはそうではない。

この当たり前の景色すら、漣には許されていないかった。

リュックを開くと中には詰将棋の本が入っていた。無意識的に将棋をやるうとしている自分に気づいてわたしは思わず苦笑する。

——すっかり将棋に取り憑かれてるよね、わたし。

およそ一年前までは考えられない事だった。でも、こんなになってもわたしは将棋から離れようとはしないらしい。

日課になっていたから惰性で続いているのもあるかもしれないけど、それだけではないはずだ。

——そんな将棋が面白いて、教えてくれたのは漣なのに。

漣に会いたい。会って、仲直りがしたい。

また以前の様に、将棋を指したりお話ししたりしたい。

だけ。

——無神経なんだよ！

あの時、漣に言われた言葉はまだわたしの心に刺さったままになっていた。

わたしだって自分の無神経さに自覚がなかったわけじゃない。だけど、どうしたらいいか分からなかった。病気の事はわたしにはどうしようもないし、それを置いてもわたしは漣と仲良くなりたかったのだ。

結局、それも漣を傷つけていたのか。

会いに行っても、また拒絶されるかもしれない。それもまた怖い。

「嫌われちゃったのかな——」

自分で言った事なのに、思ったよりかなり心に響いて声に出した事を後悔する。

ああもう、何かまた泣きたくなってきた。

「あれ、透子ちゃん？」

「えっ？」

誰かに呼ばれて顔を上げると、ショートパンツにランニングシャツを着た美里さんが立っていた。手にはレールを握っていて、その先にはドーベルマンが繋がっている。

「あ、美里さんこんにちは。犬の散歩ですか」

「うん、まあ散歩っていうかほとんどランニングだけだね。最初はただの散歩だったんだけど、この子に合わせるうちにいつの間にか陸上部の自主トレみたいになっちゃった」

ドーベルマンはわたしに関心を持ったのか、鼻先を近づけてくる。わたしは特に犬嫌いというわけではないのだけど、ドーベルマンくらいのサイズが無造作に近づいてきたらちよつと怖い。

「こーらハル。止まりなさい」

言われてハルはピタリと止まる。躰が行き届いているらしい。

「撫でも大丈夫よ」

恐る恐る顎の下を撫でてあげると、ハルは心地よさそうにまぶたを閉じた。

「かわいいですね」

「家族じゃわたししかこの子の散歩について行けなくて大変よ。お父さんがやればいいのに。いい運動になると思わない？」

「あはは」

わたしが笑顔をみせたのを見て、美里さんはうんうんと頷いた。

「ちよつと横に座ってもいいかな？」

「あ、はいどうぞ」

美里さんはハルをベンチに繋いでから、わたしの隣に腰掛けた。

「あー、疲れた。将棋部には過酷過ぎるよほんと」

「いつもここを散歩してるんですか？」

「うん、大体同じコースを同じ時間に回ってるかなあ。そしたらいつも

はいない透子ちゃんがいたからちよつと驚いちゃった」

確かに、いつもは病院かそうでなければ将棋センターに行くのに、どちらにも行かず場所的に中途半端な公園に来たのは初めてだ。

「いつもは友達がいる病院に行ってるんだっけ？ 今日行かないの？」

「う——」

いきなり核心ど真ん中を聞かれて、心の準備が出来ていなかったわたしは思わず言葉に詰まる。駄目だ、何か言わないと——誤魔化しの言葉を必死で考えたが何一つ浮かばない。

代わりに自分の表情が歪んでいくのを感じる。

「え、嘘？ いきなり地雷踏んだ？」

わたしの反応が想定外らしく美里さんは明らかに慌てている。

「あ、ごめんなさい。大丈夫です——」

「う、うん——」

わたし達はしばし無言のまま座っていたが、しばらくして美里さんの方から切り出した。

「わたしが聞いていい事なのかどうか分からないけど、聞くね。嫌だったら答えなくていいよ。——友達と、何かあったの？」

わたしは美里さんの顔を見た。興味半分や好奇心といった感じではまるでない、真剣な目をしている。この人になら、打ち明けてもいいかもしれないと思った。

「はい——喧嘩、しちゃいました」

わたしは美里さんにこれまでのいきさつを語った。

漣との出会い、彼女の身体が悪いらしい事、将棋を教わった事、退院出来るかもしれないけど結局出来なかった事、わたしだけが小学生名人戦に出て剣崎八段に弟子入りを誘われて、その話をしたら今までにないくらい怒った事。

長い話だったけど、美里さんは途中で一切口を挟まず、黙って聞いていた。

「わたしは無神経だって、そう言われました。わたしはそういうつもりはなかったけど、でもその子がわたしを見てどう思うか全く自覚がなかったわけでもなくって——わたしは、ずっとあの子を傷つけていたのかも」

話終えたのを確かめてから、美里さんが口を開いた。

「透子ちゃんは、その子と仲直りしたいの？」

「はい。したいです」

それは間違いない。以前の様に漣の所に遊びに行つて、将棋を指したりお話ししたりしたい。元の関係に戻りたい。

どちらの言い分が正しいとか、どちらが先に仕掛けたから悪いとか、そんな事はどうでもいい。わたしが謝つて済むのならいくらでも謝る。だけど。

「わたしはもう、嫌われちゃったのかも。もう、顔も見たくないって。だったらわたしが、いくら謝つたって——」

「そう、ね——」

美里さんはまるで将棋を指してる時に難解な局面で長考している時みたいに俯いた。それからずっとその体勢のまま黙っていた。

美里さんが何かを考えているのが分かったから、わたしもそれ以上は何も言わず、ぼんやりと前方を見つめた。

男の子達はまだサッカーをやっている。漣がもし健康だったら、何かスポーツでもやっていたらどうか。そもそも将棋を指す事はせず、わたしと出会う事もなく、どこかのサッカー倶楽部にでも入ってワールドカップを目指す——そんな未来もあったのだろうか。

そんな事を考えた。

すつと何かを考えていた美里さんがようやく顔を上げて言った。

「あのね、さつきは透子ちゃんを見つけてすぐ声を掛けたみたいな風で話しかけたけど、実はもうちよつと前から透子ちゃんが座ってるの見てたんだ。それ見たら何だか暗いっていうか、何かに悩んでもみたいな感じがしたから、多分剣崎八段との弟子入りの事で悩んでるんじゃないかって、そう思ったのね」

「ああ——」

確かにその事も悩みの一つではあった。漣との事も、それがきっかけと言えなくもない。きっかけというより、最後の一押し——か。

「わたしと最初に指した時の事、覚えてる？ 美吉野モールの将棋大会で、初戦の相手はどんな人だろうって待ってたら、ちっちゃな女の子がびくびくしながらやって来て——驚いちゃった。でも、指してみたら、もう滅茶苦茶強くて。わたし、負けたのに感動したの。こんな強い小学生がいるんだなって——」

「そんな——わたしは、教わったとおり指してたですから——」

「将棋、教えてくれたのその子なんだよね？」

「はい」

「透子ちゃんは強いし、才能もある。弟子入りの事を聞いた時も、わたしは少しも意外だつて思わなかった。将棋って本当に才能の世界で、それについては物凄くシビアだから、自分には足りないって否応なく分からされるし、逆に輝く様な才能を持つてる子も分かっちゃうんだよね。そういう意味では、透子ちゃんは間違いなく天才の一人だと思う」

「だけど——と美里さんは続ける。サッカーをしていた子供達はいつの間にかいなくなっていた。

「だけど、透子ちゃんが短い間にあそこまで指せたのは、単に才能だけじゃない。透子ちゃんに将棋を教えてくれたその子が、どんなに丁寧に、大切に透子ちゃんの事を指導してきたか、透子ちゃんに負けたわたしな

ら分かるんだよ。筋の良い指し手、局面を見る力、駆け引きの上手さ、いまある知識を未知の場面に使える応用力——その子と指しているうちに、身についたものなんだよね」

わたしは力強く頷く。間違いなく、今あるわたしの将棋は漣がわたしに伝えたものだ。将棋盤の中と外で、漣はわたしに将棋ついてたくさんの事を教えてくれた。

「断言してもいいけど、嫌いな人にそんな風に将棋を教えるなんて、絶対にしてないよ。お互いにとって大切な存在だったから、透子ちゃんの将棋はここまで伸びたんだと思う」

「でも、わたしはもう——」

最初のうちはそうだったのかもしれないけど、今の漣について、わたしは自信を持ってない。そんなわたしを見て美里さんは困った様に頭をかいた。

「それくらい大切な友達の話、喧嘩したくらいで嫌いになったりなんかしないと思うな。透子ちゃんはその子の事、もう嫌いになった？」

「いいえ」

「その子が透子ちゃんに言った事、それはそれで嘘じゃないんだと思う人間ってほら、気持ちの中に色んな思いが混じり合って一つの心になっているものでしょ？ 何かすれ違ったり間違ったりして、悪い所だけが一気に出ちゃう事もあるかもしれないけど、それがその人の全てだなんて思わないであげて。今の透子ちゃんが傷ついているように、その子も傷ついているかもしれないから」

「漣も——」

そうだ、どうしてこんな事にも思い至らなかったのか。漣みたいな子が、周りにマイナスの感情を吐き出して、平気でいられるわけがない。だって、そうするのが嫌だから、これまでずっと我慢して我慢して、弱

音を吐かず、退院が流れても平気な振りまでしていたのだから。

「わたし、行かないと——」

咳いて、立ち上がる。漣の本当の気持ちやどんなものなのか、まだわたしは分からないけど、それでも行かないといけない。そう思った。

「仲直り、出来そう？」

ベンチに座ったまま、美里さんが尋ねる。

「分かりません。でも——行ってきます。行って、話をしたいです」

「うん。頑張ってるね」

「美里さんありがとうございます！」

行こう。勇気を出して。大切な物が確かにそこにあるのだから。

わたしは真つ直ぐに漣の病室へと向かった。院内は走るわけにはいかないので早歩き程度の速さで進む。その間に思考をまとめたかったが、とりとめのない事ばかりが浮かんで消えるばかりでまるでまとまる気が配がない。

半分混乱した状態のまま、漣の部屋の前まで辿り着いてしまった。

部屋の扉の取っ手に手を掛けて、またわたしの動きが止まる。

——また、拒絶されたらどうしよう。

そんな思いが脳裏を掠める。

——なんだか、こんなのばかりだな。

将棋を指す時も、弟子入りの事も、漣との関係性も、どれもそうだ。

わたしはいつも、扉に手を掛けたまま、開くのをためらっている。

向こう側にある未知なる物を恐れている。

——その子も傷ついているかもしれないから。

最後に背中を押したのは美里さんの言葉だった。

わたしは扉を一気に開く。見慣れた部屋の景色がわたしの視界に飛び

込む。これらは全て既知の事。わたしが恐れるものではない。

「漣」

わたしは未知なる少女の名前を呼ぶ。彼女は突如入ってきたわたしの方を見ていた。漣はまるで信じられないといった風に見開いていた。まるで夜道で幽霊にでもあったみたいなのに、心底驚いた顔をしている。

「うそ——透子、どうして——」

漣が呆然と呟く。

ここに来るまでの間、わたしは二通りの対応を考えていた。

一つは何食わぬ顔で以前と同じ様に振る舞い、喧嘩なんて初めからなかったみたいにする事。喧嘩した友達と仲直りがしたいなら、これは無難な選択だ。映画や漫画じゃあるまいし、いちいち白黒つける必要はない。とりあえず棚上げして、普通に遊んでいれば喧嘩した事なんてどうでもよくなって、二人の関係性は元の鞘に戻る。

もう一つは、自分の悪かった所、お互いの問題点にはつきり向き合って謝る事。

きつとどちらも正しくて、同じくらい間違っている。

「どうしてって、友達っていうのは喧嘩はするけど、でも、仲直りもするものだからだよ」

「透子——」

わたしは漣のベッドに歩み寄った。透子のベッドの隣、二人で将棋を指せるくらいの距離感まで。少し震えそうになりながら、漣の顔を見つめる。

改めて見ると、綺麗な子だな——と思った。まるで透き通った海のように、清らかで純粹な感じ。でもそんな漣の表情も、今は凄く不安げな影に覆われている。

心を決めて、わたしは一気に言葉を吐き出す。

「漣、ごめん！ わたし本当は漣の気持ちに気づいてた。分かったのに、どうしたらいいのか分からなくて、結局漣の優しさに甘えてた。それがずっと、漣を傷つけてたんだよね。今更謝って許して貰えるか分からないけど——ごめんなさい」

一気にそこまで言って頭を下げる。わたしが選んだのはしつかり謝る方。他のどうでもいいような喧嘩なら、棚上げして何となく水に流してもいいのだろうけど、この問題はそれではいけないと思った。

拳を握り、ぎゅっと目を瞑ったまま頭を下げ続ける。漣は、何も言わない。

どうしたんだろう？

まだ怒っているのだろうか？

——顔を上げた瞬間にまた枕を投げつけられるかも。

そう思いながら恐る恐る顔を上げると、涙で顔をくしゃくしゃにした漣の姿があった。

「う、うう。うううう——」

「れ、漣？」

戸惑うわたしに、漣はしがみつくように抱きついた。

「わ、わたしっ！ わたし、透子に酷い事っ——酷い事言ったから！

わたし嫌われちゃって——透子はもう来ないんじゃないかって——もう二度と会えないんじゃないかって！ ずっと！ うわああああああん」漣はわたしの胸に抱きついたまま泣きじゃくった。そんな漣を見ていると、わたしも感情を抑えきれなくなって、気がつけばわたしも涙声になっていた。

「二度と来ないなんて、そんな事あるわけっ！ うう——わたしの方こそ、酷い事ばかり！ ごめんなさい！ ごめんなさい！」

お互いがお互いに謝りながら、でも段々と自分の言っている言葉のわ

けも分からなくなっていくって、わたし達はただ二人で抱き合いながらずっと泣きじやくっていた。

★「またね」

桜が散り初夏の緑が見え始めるにつれて、漣の体調は少しずつ、確実に悪くなっていった。

以前の様に将棋を指す事は無くなった。もうそんな元気はない。口数も減って、わたしの話を聞いて微笑むだけだ。

——前はあんなにお喋りだったのにな。

内容は将棋の事ばかりだったけど、まるで尽きる事なくわたしに語って聞かせてくれていたのに。

その変化が、漣に残された時間を告げている様でわたしは辛かった。五月の半ば頃だっただろうか。初夏の心地よい風が窓から吹き込んで来ていたのを覚えている。この頃のわたし達は、お互いに何も語らず、ただ静かに同じ時間を過ごしている事が多かった。

「ねえ、透子——将棋、指そう？」

だから漣がそう言った時、わたしは少なからず驚いた。

「大丈夫なの？」

「うん。今日はちよっと調子いいみたい」

そう言って漣は微笑む。確かに、この日の漣は少しばかり顔色が良い様に思えた。

「じゃあ将棋盤出すよ」

わたしは床頭台を開けて将棋盤を手にとった時、漣がわたしを止めた。「久しぶりにマグネットでやりたいな。そこら辺に入ってるんじゃない？」

「マグネット？ 別に良いけど。あ、あったあった」

わたしが木の盤を買ってきただけから一度も使っていなかったのも、マグネット盤は結構奥の方に仕舞い込まれていた。

わたしはぺたぺたと駒を並べた。漣も上半身を起こして駒を並べている。

漣の陣地には、王飛車角金銀桂香歩——全ての駒が揃っていた。

「あれ、平手でいいの？」

不思議そうなたしに漣は頷く。

「うん、平手で行こう。これが——かもしれないし」

最後の方は小声で聞き取れなかった。

「研修会入会に、劍崎八段の弟子としても鍛えられた力。見せて貰おうかな」

「う、プレッシャー掛けないでしょ。やればやる程足りない事ばかりで困ってるんだから」

弱気なわたしに漣はくすくすと笑う。

「その足りない事を確実に、しかも凄いスピードで埋めて行くのが、透子の凄い所だと思うよ」

「そうかなあ」

一呼吸おいて、わたし達は向きあう。

「先手は透子でいいよ。というか、今日は後手の気分」

「じゃあお言葉に甘えて」

「よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

わたしは▲7六歩△8四歩▲2六歩の出だしから角換わり腰掛け銀という戦型を選んだ。元々終盤力頼みで序盤が弱かったわたしは、一つの戦型に専門化するよりは、幅広く対応出来るオールラウンダーを目指していた。

ぺたり、ぺたりと駒を動かしていく。角換わり腰掛け銀も定跡手順が長い。ある程度までは誰が指し手も同じ様な手順で、特定の局面に進んでいく。

「透子、覚えている？ わたし達、最初はずっとこのマグネットで指してたんだよね」

「覚えてるよ。なんで直ぐ木の盤持ってこなかったんだろね。そっちの方が不思議だよ」

「ふふ、そうだね」

ぺたり、ぺたり。わたしは普通に仕掛けず、あえて深く穴熊に困う趣向を見せた。漣はそれは許さないと猛然と襲いかかる。

「自分で言うのも難だけど、わたしって結構強いよね？」

漣が今更そんな事を言う。

「結構どころじゃないと思うけど」

漣の年齢と環境でその強さは、驚異的という他ない。最近はいんターネットで強くなる子供も多いとは聞けれど、漣はあまりに極端だ。

「自分でも不思議だったんだよ？ わたしは確かに将棋が大好きだし、強くなるために努力もしたよ。でも、水瀬漣が将棋を楽しむのに、ここまで強さが必要なのかなって」

「漣——」

「でも分かった。透子と指すためだったんだよきつと。わたしの強さは、そのために神様がくれたプレゼントだったんだ」

ぺたり、ぺたりと局面は終盤へ。少し不利かもしれない。でもわたしの玉はまだ穴熊の中にいて遠い。まだまだ勝負はこれからだ。

「せっかく友達が来て、その子も将棋を始めてくれたのに、簡単に追い抜かれたら——やっぱり詰まんないからね」

漣にほんの時々だけ垣間見える負けず嫌いな一面。盤外では勝ち負け

に拘らない漣だけど、盤の中では誰よりも負けず嫌いだ。

ぺたり。

漣はいきなり飛車を切った。

——え？

完全に予想外な一手が出て、私は驚く。銀と交換とかそういうものは全くない。強いて言うなら歩と交換してるけど、実質ただ捨てに等しい。

意味が分からない。理解出来ないけど、とにかくその飛車を取るしかない。一体どういうつもりだと訝りながら同銀と飛車を取る。

漣は馬を4七に引いてこちらに手を渡してきた。

——なにこれ？

わけが分からない。将棋において最も強力な駒である飛車をただで相手に渡して、そんな状況下で馬引きだけでわたしに手番まで与えるなんて。どうかしている。常識では考えられない指し回しだ。

しかも、何より信じがたいのが——

——これで、わたしの玉が捕まってる？

信じられない。信じられないけれど、読めば読むほど、考えれば考えるほど、この局面がもはやどうしようもない事が見えてくる。そんな馬鹿な話があるのか？ しかしどうあがいてもわたしの玉は受からない。

鈍重そうに見えた馬が滅茶苦茶に厳しい。

まだまだこれからの勝負だと思っていた局面から、たった三手で負けになったのだ。

「強すぎでしょ——」

わたしは殆ど呆れながら言った。もう強いか弱いかというレベルではない。異次元からいきなり斬りつけられたみたいだ。

「あはは。これ見つけた時、自分でも驚いたよ」

こんな手順、どうしたら見つかるというのか。  
きつと漣は愛されてるんだ。将棋の神様に。

粘る方法も考えたけど、わたしは諦めて綺麗に負ける形を作った。どんな時でも最後まで諦めないのは勝負の鉄則だけど、無理な物は無理だ。そういう意味では、既に勝負はついている。

この寄せは漣の作った芸術品だ。

棋譜が記録として残るわけではないけど、それでもこれを汚したくなかった、

「負けました」

最後まで指して、わたしは頭を下げる。

しかし漣はなんだか不思議なものを見るような目で、盤面を見つめていた。

しばらくそうやってじつと盤を見続けてから、ようやく何か納得したようにうんうんと二度頷いた。

「ありがとうございます」

漣は満足そうな、それでいてどこか疲れたような顔で微笑んだ。

「将棋って、楽しいね」

漣は言った。

「そうだね」

と、わたしは答える。

「将棋は、本当に楽しい」

もう一度、愛おしむように漣は言う。

「ごめんね透子」

唐突な謝罪にわたしは戸惑う。

「いきなり何を謝ってるの？」

「前に透子に怒った事あったよね。わたしね、ずっと透子に嫉妬してる

んだと思ってた。わたしがずっとここに縛りつけられてる間も、透子はどんだん世界を広げていっててさ。どうして透子だけが——って、そんな風に思ってた、透子に将棋を教えたのわたしなのにね。そんな自分が凄く嫌だった」

「それはもう、済んだ話だよ」

「うん。でも今なら思うの。あの時、弟子入りの話を聞いてわたしが我慢出来なくなったのは、ただ嫉妬したからじゃなくて、透子がわたしを離れて遠くに行ってしまう事を、実感したからじゃないかなって。透子に置いていかれる様な、見捨てられる様な気がして——寂しかったんだと思う。——ごめんね」

もう一度漣は謝った。わたしは改めてこの話をする漣の意図が汲みきれず、曖昧に頷くだけだった。

「透子と会えてよかった。透子に会えたから、わたしの命も、将棋も、意味のあるものになったんだと思う。先は長いだろうけど、頑張ってるね。透子なら、大丈夫」

「そんな——」

漣は穏やかな表情で将棋盤を見つめる。今の将棋が投了図のまま、まだ残っている。

記録に残らない一局。でもわたしが生涯忘れないだろう棋譜。

水瀬漣の将棋。

「わたしね。プロの棋士になりたかったんだ。プロとして将棋を指して、普及活動とか、たくさんやりたかった。子供達とかお年寄りとかに、将棋を教えて、みんなが指すの。タイトル戦も、出てみたかったな。最強の相手と、最高の舞台で、凄い勝負をしてみたかった。綺麗な和服だつて着てみたいなんて思ってた。色んな将棋を、もつとたくさん指したかった。わたしの知らない指し手を、作戦を、筋を——もつともつと見たかつ

た。将棋って面白いんだよって、こんなに深いんだよって、誰にでも伝わるような棋譜を、残したかった」

ぼつり、ぼつりと呟く様に漣は言う。そんな漣に、わたしは胸を衝かれる。

「どうして——」

どうして、そんな言い方をするの？

それじゃあ、まるで——

気がつけば、また視界が歪んでいる。わたしはまた涙を流しているらしい。

漣と会ってから、将棋を始めてから、こんなのはばかりだ。

別にわたし、泣き虫じゃなかったはずんだけどな。

いつか仲直りした時と同じ様な涙声で、わたしは叫ぶように言う。

「違うでしょ！ 漣は指すんだよ！ これからも！ ずっと！ わたしとだって何百局も何千局も指すんだよ！ タイトルを私達で争って、漣透子百番指しなんて本までだしちゃって、和服だって、着付けとか全然分かんないけど、漣はかわいいからきつと似合うよ。引退したら一緒に道場作ろうよ。漣は教えるの上手いからさ。またわたしみたいな子供に将棋を教えてあげてよ！ こんなに、やる事はたくさんあるんだよ！ だから、お願いだから——」

全てが過去の事のような、そんな言い方——しないで。

「そうだね。なんだか——楽しみになっちゃった」

漣は弱々しく微笑む。そしてゆっくりと横になった。

「ごめん——ちよつと、疲れたかも。少し、眠るね」

「また指してね。勝ち逃げは——許さないんだから」

「うん、またね——」

漣の今にも消えそうな吐息が聞こえてきて、わたしはまた、しばらく

涙が止まらなかった。

ねえ、漣。

もしも、もしもだよ？ 絶対にそんな事にはならないって信じてるけど、でももしも、今の将棋が漣の最後の対局で、漣がもう将棋を指せなくなるのなら——もしそうなら、わたしが指すよ。

わたしはまだまだ弱くて漣には敵わないけど、少しでも追いつけるように頑張るから。漣の代わりに、漣の分まで、わたしが指すよ。

これから何百局も何千局も、漣が指すはずだった将棋を、わたしは漣から確かに受け取ったんだって、そう思える様に。

だから、応援して——くれるかな？

その三日後、水瀬漣は帰らぬ人となった。

## 第一部『水瀬漣』了

## 『駒・zone』座談会

今回は『紙の駒・zone』に参加した皆さんに呼びかけて、web座談会をしました。  
『駒・zone』のこれまでや今後などについて、皆さんに語っていただきました。

**清水** とりあえず私から自己紹介しておきましょうか。編集長の清水らくはです。代表作は「七割未満」で、小説・短歌・詩で参加してます。次号では「エラー」の続編を書きたいと思っています。

**浮島** じゃあ私も僭越ながら自己紹介させていただきますね。詩歌同人・無責任・zoneの副責任者の浮島です。『駒・zone』では主に短歌関連の企画で参加しています。将棋に関しては素人も素人なのでたまにひどく「俺、ここに寄稿してもいいんだろうか……」とネガティブになります（笑）いままで関わってきた企画は主に「将棋短歌」という企画なので、これからも関われるとしたら将棋短歌を中心に参加させていただけたらなど考えています。

**贅楽夢** いつもニコニコあなたのTLに這いよる放漫、贅楽夢です。  
『駒・zone』には初め「三択将棋」での月子さんへの刺客として呼ばれたのですが、その後、気の迷いでいくつか小説を寄稿させていただきましたりしております。件の三択将棋で月子さんをボコボコにした時は「え？ ひよっとして、私、有段者いける？」と思ったのですが実際はどうなんだかよく判りません。将棋ウォーズのおかげで、以前より指す機会が増えたのは嬉しいかも。機会があれば町道場にも行ってみたいような気が

しなくもないのですが、多分一生行かないと思います。だって何だか怖い人がいそうなんだもん。

**ジエームズ** 「作者の願望を描いただけ」と評判の「Life is Lovely」シリーズでお馴染み、ジエームズ・千駄ヶ谷です。ちなみによく誤表記されますが「ジエームス」ではありませんのでお気をつけて。「Life is」の次の作品を鋭意作成中です。

**跳馬** こんにちは、主に将棋短歌で駒・zoneに参加させていただいている跳馬です。棋力はアマ二段程度、短歌は級位者といったところ。棋力も駒・zoneへの貢献度も中途半端な現在、その両方を上げていくため頑張っているところといます。短歌は今号に沢山載ってる…はず。

**まるぺけ** こんにちは。主に表紙と挿絵で駒・zoneに参加させて頂いてるまるぺけです。編集長にTwitterで送りつけた一枚の月子さんの落描きから偶然？ 『駒・zone』に関わっているのですが、あれから幾年月という感じです。

**清水** 今回は『紙の駒・zone』のメンバーに集ってもらいましたので、そちらの報告をしたいと思います。イベントや通販などでポチポチ売られています、特に将棋短歌が好評のようです。ただやはり、手に取っても「将棋のルールがわからないので……」などと遠慮される場合が多く、「観て楽しむ」感じをもっと普及できればなあ、と実感しています。まだまだ在庫有りますので、皆さんも宣伝などよろしくお願いします。

それで、次号駒 zone ではそれ以来の皆様にお願ひして一つのテーマをもとに作っていただければと考えていまして、それに向けての話も含めて座談会を企画しました。とりあえずは「駒 zone のこれまで」みたいな話からしていければと考えています。

**浮島** 「駒 zone のこれまで」という話ですが、正直なところ僕は「将棋の文芸をやってみようと思うんだけど」とらくはさんから持ちかけられたとき「いいねえ！面白そうだしやってみたら？」程度の感覚だったんですよ。僕は駒 zone の企画がスタートする前から悪ノリと暴走でらくはさんを「変な企画」に巻き込む側だったから「おしちやいなぞ」みたいな軽い感覚で応援してました。そんな企画があればよあれよという間に紙の同人誌まで作っちゃったんだからスゲエびつくりです。

**贅楽夢** 『駒 zone』をきっかけにわたしは「浮島」という詩人を知ったのですが、時にかっこ良く、時にはどこまでもネガティブに、深く深く言葉を操るその様に、かなり衝撃を受けた覚えがあります。詩人・浮島と将棋のファーストコンタクトって、らくはさんとの出会いが最初だったんですか？ それとも『駒 zone』がきっかけ？

**浮島** 将棋のルールやゲーム性自体には小学生のころから触りはしてましたよ。

高校生のときには将棋部の友達と遊んでました。「矢倉って何！？超かっけえ！！」とか変に知識を仕入れたせいで矢倉を無理やり作るうとしてるうちに敗北したりとか……。ただ観戦という視点をくれたのはやはりらくはさんとの出会いでした。プロ棋士の萌え動画とかを紹介されたり、ファンの間で共有されている「伝説」を教わったり。まるでオタクの仲間が「布教」する感じでしたね。奴は絶対に確信犯です。贅楽

夢さんはどうです？ 駒 zone をきっかけに何か変わったこととか。

**贅楽夢** 『駒 zone』に参加して変わったことですか。月子さんを三択将棋で撃破したのをきっかけに「自分の棋力って実際どのくらいなんだろう？」というのが気になり始めたことですかね。煩惱が芽生えたといえますね。個人的に月子さんは煩惱素材感がハンパないですよ。あれはいかん。毒婦です。その他は「駒 zone と私」に似たようなこと書きましたけど、世界観というか、文章を書く感覚が変わったこと、これが一番大きい。元々わたしは、何かしらの文章を書くことが、好きとは言わないけれど、それほど気にならないというか、誰も止めなければいっても書き続けてしまいかねないところがあるんですね。曲がりなりにも「小説」という形態で書く文章は、そういうのとは全然勝手が違ったというか、書きながら違っていった、みたいなところがあります。脳内で勝手に進行している別の世界の物語を見ながら、その様子をデッサンしていく感じ。この、「文字でデッサンする」という表現が的確かどうかわからないんですけど、とにかくその感覚は、とても新鮮でした。まあ私の場合は、まるげさんにいつも素晴らしいイラストをいただいているので、文字によるデッサンも何もあつたもんじゃありませんが（笑）

そう言えば、らくはさんや浮島さんの「詩」には、絵というよりは、街で切り取った一葉の写真、というイメージがあります。ひよっとして、詩と写真って相性がいいのかな、なんてことを思いました。らくはさんの場合は小説の方にもそんな感じを受けます。こういう言い方をすると怒られるかもしれませんが、ドラマや映画というよりはミュージックビデオ（プロモーションビデオ）のような、というか、そうそう、歌詞がストーリーリーになってるタイプのボカロ曲みたいな感じ？ とにかくワンシーンワンシーンの情景描写や言葉の使い方に力があるんです。力が

あるな、と感じたというのも、自分でも小説を書いてみたから気づいたことなんでしょね。あ、これはかなわんわー、って思いましたもの。いや、勝ち負けの問題じゃないんですけど。と、いうのはあくまで個人の感想なんですけがみなさんは如何です？

**清水** 絵的というのはありますね。「五割一分」でいえば、先生の方が下について、弟子が少し上について、でも関係性は逆っていう「イメージ」がずっと大事でした。これは例えば、順位戦のクラスがそういう風になってもきつと同じだろう、という。でも実は、最後で「隣に来てもいいよ」って三東先生が言ってる、その台詞のシーンこそが書きたかったんですよ。「七割未満」でも、最後のシーン、皆川さんが辻村君に「バーカ」って言うシーンが割と最初に思い浮かんでいて、そこに向かって書いていったのはあります。私の場合最初はビジュアルイメージがなくて、まるけさんとかに月子さんを描いてもらって随分変わりました。「本当に美少女だった」みたいな(笑)辻村君に至っては「なんとかつこよかった」っていう(笑)そこら辺はラノベ的な展開かもしれません。

あと、雑誌を作ろうと思った時は「ベース・オブ・シークレット」のイメージしかなかったんですよ。とりあえず創刊号は俺が書かんとしようがない、と。だからいつかは小説は書かなくてよくなるといいなー、と思ってたけど、そうもいかず。とにかく短編を同じテーマで書き続けるといのはなかなか大変で、ある意味西村京太郎のことをしているんではないかと。

**浮島** 「月子さん毒い」という指摘には納得。やはり本物のヒロインは皆川さんだったんだ。月子さんなんていなかった。皆川さんカワイイヤッター！

「力のある言葉」についてか……。短歌でいえば「詠む」と「作る」

の対比の話がすこしは繋がる話になるかもしれないです。というのも短歌を「詠む」か「作る」か、という話で言うところ「詠む」だと僕の場合「書かされる」「(勝手に)できてしまう」という動詞だと思っんです。「作る」というのはもう少し主体的な「自分」というものがやはり前提にあるんですよ。そして僕にとっての力のある言葉というのは「詠む」ものだと思うんです。

それは無意識の海の底からくる言葉、ともいえるかもしれないし宗教や儀礼的な話でいえば「憑依」するという現象でもあるのかもしれない。ぼくは心理学のほうを重視しているから多くは前者で語りますが、歌人の中には「歌詠みは巫女のようなものだ」という人もいらっしやいます。そういったものからやはり「書かされて」いるので実は自分の実力ではないんです。

その一方で小説の場合、意識的に「作る」ことに力を入れなければならぬ文芸であるというような気がしています。短歌は韻律の枠があるのである程度、好き勝手に暴れても形にはなってしまうのだけど小説は意識的に破たんさせないように気をつけなければいけません。そうすると「詠む」という行いがなかなか困難であるし、「力のある言葉」のもつ無意識性・霊性といったものは一行の表現の場よりも、いつそストーリーラインのほうに表現されやすいのではないかなというのは常々考えてます。「力のある言葉」というより「力のあるストーリー」でしょうか。男の子の腕をツクモさんが切り落とすのは「力強すぎる」超展開だと僕は思います。

そうそう。個人的には跳馬さんの歌で……

ゆっくりと棋譜を並べるそれだけで天野宗歩に会いに行ける(跳馬)

というこの歌が「詠んだ」ものなのか「作った」ものなのかが気にな

ります。

**跳馬** 前号で浮島さんが将棋短歌まとめ評を書いて下さったんですよね。「駒とおむすびとペンギン」で。あそこには将棋短歌が上手く分類されてて、「詠む」か「作る」かという話にも繋がってくるのかなと思います。

僕のこの歌は……うむ難しいですね。宗歩の将棋を並べて感慨に浸ったという直接体験は鮮明に覚えています、そこからどうこの歌が生まれたのか。製作過程を覚えていないということは、さらっと「詠んだ」のかもしれないですね。

なんとなくですが、贅楽夢さんの小説にはストーリーにやられる感覚を、らくはさんの小説には言葉で打ち抜かれる感覚を覚えます。無論イメージの問題で、誰その小説はストーリー中心だ、と言っている訳ではないですよ。どちらの作品も僕は大好きです。

**清水** 私の場合短歌や詩はストーリーを作って構成していくので、「降ってくる」ようなことはほぼないんです。しむしむさんの短歌なんかは、わりとすつとしていますよね。いや裏話的に言えば、さすがにそれは載せられん、という趣味全開のものもあるんですが(笑) にゃんこさんの手ピカジェルの歌なんか、想像のようで実は深いというか、「指す」事の中にある「指」をことさらに取り出すという文学性が込められている気もします。短歌はそういうそれぞれのアプローチを、文字制限によって膨らみ過ぎなくしている点が良いのだと思います。ルールがあること

によって技は一つしか使えないというか。  
あと、本当にすごい先生から初めて挑戦するような人まで載せることができます、「短歌」よりも「将棋」の方が枠として機能している点は「将棋短歌」のいい点だと思っています。例えば「将棋戯曲」だったらこんな

ことはまず無理ですからね。浮島さんが短歌を作っていたからこの流れができたようなものですので、これは浮島さんの手柄だと思います。

**ジエ** 短歌を「作る」か「詠む」という話はどうしても興味深い議論ですね。僕がすごく印象に残っている短歌の中で、浮島さんの「いつだってあなたのさした棒銀はいなづまみたいに透明でした」はすごく好きな歌の一つなのですが、たぶん「詠んだ」作品なのかなあと想像します。作爲的というよりは天から降ってきたイメージをそのまま言葉にしたような印象を受けます。これと同じくらい大好きな歌ですが、らくはさんの「人はいつ直進するのを諦めて右銀までも身近に置くの」は高度に作爲的というか、矢倉の後手番定跡で△5三銀と右銀を準備に参加させるような指し方などを背景にされていると思うのですが、直感だけでは作れない短歌かと思います。この2つの短歌については、できればお二人に当時の経緯なんかをお伺いしたいですね。ところで、久しぶりに『駒zone』バックナンバーを読み返してみたら、初期の『駒zone』に掲載されている短歌はほんとに名作揃いですね。最近の短歌が悪いというわけでは決してありませんが、vol.1～vol.2あたりの短歌は作り手の気迫が伝わってくるような短歌ばかりです。

それから、「文フリ」などに参加して感じたことですが、文芸誌をパッと見てまず目に飛び込んでくるのは詩や短歌なんです。ズラツと並んでいる見本誌を手にとつてめくる時に、小説をいきなり読み始める人は稀だと思います。そういう意味で詩や短歌は非常に重要な存在です。

**浮島** (お三方の発言を受けて)なるほどなあ。なんというか、「詠む」か「作る」という話題は深まりやすいけれど、だからこそその人個人の姿勢というのが如実に反映されやすいのかもなあというのをすこし感じました。戦術？ 信条？ いろいろな喩えができそう。ジェームズさ

んの「作為」という表現は適切な切り込み方ですね。

「いなづま棒銀」の歌は作為ではないかもしれないけれど、らくはさんから棒銀という戦法について詳しくスカイプで教えてもらったエピソードが背景にあります。ある題について短歌を作るというのを「題詠」というのですが、その題を詠み込むには題自体の「言葉」をよく深く知らないといけないのです。意識的にやった作業はこれくらいですね……。むしろらくはさんから教えて頂いた「棒銀」の言葉や雰囲気というものが僕の頭の中の辞書と化学反応を起こして、あんなような歌ができたのかなあと思います。生きた言葉はやはり実体験にこそ宿りますから。笑って話しながらも、その生きたエピソードの中に「棒銀」のまつずぐさや愚直さ、そして眩しいくらいの鮮烈さや羨望などもイメージとして見ていたのかもしれない。やはり自分の功績ではないですね。口惜しいです。なんですかねえ……。なんだか蕎麦屋の実演販売のような気恥かしさが出てきました(笑)

**清水** ちよつとずれるかもしれないんですが、小説を書く三人って皆プロの世界を題材にっていて、結局「体験できないもの」を書いてるんですね。プロから観たらそんなことないよ、って表現もあると思うんですが、そこがフィクションの味でもあるというか、「作られた」将棋の世界の魅力を探求しているというか。だからこそ『紙の駒 zone』では三つの世界を融合させることもできたろうし。自分に関して言えば、月子さん以外は漠然としたモデルがいて、月子さんだけが「こういう子がいてもいいんじゃない」で出来ている。現実世界に月子さんを放り込む実験をしているというか。女性棋士は現実化するかもしれないし、人気女流棋士はファンと結婚したし、ひよっとしたら月萌さんみたいな存在も実在しているかもしれない(笑)と考えれば、私たちは世界を「作る」んだけど、世界も新しい世界を「作って」いて、追いかけてこのような

ものをしていると感じることはあります。

あ、この話は実は今回のテーマにつながるので、少し語っておきますね。まるべきさんの前号の指摘で気が付いたんですが、みんな男性を主人公にしてるのに、その視点から少女の物語を書いていたんですね。もちろん主人公の成長とかも書かれてはいるんですが、どうしても女性の魅力の方が書きやすいというか。そこで次号ではできるだけ少年の魅力を書いてみたいし、そのためには少女からの視点が必要になるんじゃないかと思うのです。そんなわけで、「少年」の魅力を引き出すにはどうすればいいか、皆様の意見を聞きたいと思っています。

**眺馬** 勝手な印象ですが、らくはさんの作品では少女が大問題を抱えていたり、痛々しく切実に将棋を指していたりと、少女の儂さや脆さを描いている場合が多いような気がしますね。少年が出てくる作品というところ、『駒 zone』掲載作ではないですが『海81とマス』(注)なんかが思い当たります。しかしあの作品も私たちの成長物語でありながら、蜜さんが何かを取り戻していく物語でもありますね。

しかし、「少女の成長」と聞くとなんだか美しいものを感じるのに、「少年の成長」となると妙に哀しくなるのは不思議だなあ。喪失感を覚えるこの感じ。少年の魅力はそのあたりにあるのではないのでしょうか。あとは「海の81マス」もそうですが、団体戦は少年の魅力が出やすい場だなと感じます。

**贅楽夢** そもそも「少年の魅力」って何なのでしょうかね？ みなさんが少年のどこに魅力を感じるか、ということをお聞きしたいなあ。ちなみに5歳くらいまでの男の子は女の子よりかわいい、というのがわたしの持論(?)でして。中学生くらいまでの純情そうな男の子もいいですね。電車の中で英単語帳見るふりをして、チラチラと窓際に立っている

美少女に視線を投げてる様子とか大好物です。いや、そういう話じやなかった。「魅力」って「かわいい」だけじゃないですしね。女の子の魅力は「かわいい」「美しい」「踏んづけられたい」のどれかに収斂するものですが、男の子はそうではない。そういう意味で少年の魅力には女の子とは別のレンジ（範囲？）があるんじゃないかと思えますけど、女性視点だとまた違いかも。でもわたしは「少年」というより「おっさん」の方に興味があったりしますが。

**清水** 『海の81マス』の話を出していただきありがとうございます。

あの作品も双子の少年の成長物語でありながら、やっぱり少女たちの方が目立つというか。考えてみたら、蜜さんはラムちゃんみたいな立ち位置なんですよ。実はすごくさびしくて、強気に問題を乗り越えていくしかないって言う。それに比べて少年たちって、あんまり我慢できないんですよ（笑）。プライドがあるんですけど、すぐじけちゃう。まだ取り繕うすべを知らなくて、将棋の強さで何とかするしかない。で、そのまんまプロになったような人も多いんじゃないかと思えます。おっさんの魅力は、そういう少年っぽさに「でも我慢しようとしている」「見栄えを気にしようとしている」点じゃないでしょうか。少年を魅力的に描くには、大人のふりをしているんだけど全然できてなくて、それでいて真っ直ぐに見つめる姿勢というか、そういうのを書かなくちゃいけないんじゃないかと思ってます。

贅楽夢さんの言葉を借りるなら、「踏んづけられたいけどそんなそぶりを隠そうとしているけど隠しきれない」ような様子が、少年の愛らしさというか、少女に常に負けてしまう残酷さみたいなものなんじゃないでしょうか。でも将棋だと少年が強いですよね。そこが少し他のことと違うというか、だいたい子供だと女の子の方が早熟ですからね。「強い女の子」を物語に登場させると、少年が「あるべき少年」として覚醒

する気がします。

**浮島** なんとなく皆さんの発言を読んでいると将棋ストーリーでいう「少年」というものは、どこか成長譚のようなニュアンスがついてくんだなあと感じました。少年漫画でよくみられる構図ではあるんですが、少年が成長していく教養小説において少女は鍵を握る人物であるように思います。だから彼女たちの成長というところからかといえれば脇道になりがちなんですけど、逆に主人公を成長させてくれる。

わたしはそういう少年の成長譚ももちろん好きなのだけれど、男の子が鍵を握っている物語も好きなんですよね。そういうと何か特別な感じがしてしまふけれど、まあ、たとえばトム・ソーヤの冒険でのハックだとか。銀河鉄道の夜のカンパネラもそうかな。銀河鉄道の夜風にいえば、途中下車してしまった少年の友達、親友っていう感じなのかな。ポリデュークスにとつてのカストール、双子の星っていう感じなのだろうか。将棋漫画とか読んでいても親友との別れてなんか切ないんですよね。鍵を握る少年。どうでしょう。

**清水** 教養小説でない方が少年の成長をテーマにしていると思います。わかりやすいですから、核にする要素としては簡単なんですよね。それに対して少女の成長はちよつと残酷なんです。何かを決意して捨てる物語になる。私が特に意識するのは「もののけ姫」のサンとか、「エウレカセブン」のエウレカとか、一見少年の成長物語でありながら、少女の方が「全ては救いきらない覚悟」を持つに至るような側面です。これは少年を主人公にしているから表現できるんですよ。少女にスポットを当てると、残酷すぎて物語が成立しないわけです。私が『五割一分』で三東先生を一人称に据えているのもそういう理由ですね。逆に少年の成長を一面的でない形で表現するには、少女の成長をよどみなく書かない

といけなくて、それが難しい気がしています。つまり、わかりやすい方の成長はフェイクなんですよね。悟空も突然大きくなったでしょ(笑) ピッコロやベジータの成長にこそ、物語の魅力が詰まっているわけです。と、研究みたいになってしまっているのでもう贅楽夢さんとジェームズさんにも聞きたいのですが、主人公は少年なわけですが、どんな立ち位置だと思っていますか。ちなみに辻村君はストレートに彼が何かを見つけていく物語にしたいと思って、徐々に魅力を引き出して行こうと考えてました。

**贅楽夢** そう言えばベジータって亡国の王子なんですよね。プライドの塊でもある。あと一歩でどうしても追いつけないライバルの背を追いなから、決して諦めるずに挑戦を続け、地球人の女性と結婚し、しまいは厳しくも慈愛に満ちた、教育熱心(格闘技に限る)な父親をやっている。GTでは娘に甘いパパになってるし。あれ?もうこれベジータ主役ではないじゃん、って以前から思っていました。

ツクモさんの場合はですねえ、「ツイッターからネタ拾おう」↓「フロロワーさん登場させよう」↓「あ、そうだ。あのまとめ(「消えた大橋分家の墓の謎」)を使おう」とだけ決めて、あとは自由に妄想の世界で遊んでいるうちに出来上がっていったんですね。ツイッターからネタを拾おうと考えたのは、駒 zone の読者層はツイッターのフロロワーさんが多いだろうから、企画としてアリだろうと思ったからです。そうそう、ご登場いただくツイッターさんには、許可をいただくためにDMでお手紙送りましたね。思い返せば、自分で言うのもなんですが恐ろしく丁寧な文章で、DM受け取った人は、ふだんのせいらむさんのキャラとの違いに驚愕して椅子からズリ落ちたに違いありません。

ということ、主人公は誰でも良かったんです。実は当初は三人称で書き始めていたんですね。ほんのちよっとだけですけど。でも、一人称

だと語り手の知りえないことは書けないので、必然的に「語られない物語」が増えていくんですね。そういうのってわたしは割とストレスだったりするんです。ただ、冷静に考えると「語られない物語」の分量を全て文字に起こしたら大変なことになるな、と。というかそういうのを全て書ききる力量が自分にあるわけがない。ってことで一人を選ぶとしたら誰だろう?ってことになる、これはもう懸くんしかいないだろう、と。理由は簡単で、彼以外の登場人物は全員悪人だからです(爆)。あ、ツイッターさんは別ですよ!(汗)。

**ジエ** 懸君、いいですよ。僕も大好きなキャラです。「紙駒」でコラボしたときの詰将棋の解説をするシーンは僕のお気に入りの一つですね。「ツクモさん」が『駒 zone』に掲載されたときは、将棋クラスタに衝撃が走りましたよね。今でもよく覚えています。ページをめくりながら「なんだこれは!?!」と思いつながらどんどん引き込まれていきました。僕は最初、ペンネームの「贅楽夢」の読み方が分からなくて、一体誰が書いているんだろうと不思議に思っていたのですが、ある時何かの拍子に気がついて、「お前かよ!」と思わず心のなかでツクコミを入れました。いや、「お前かよ」とはあまりに失礼な言い方ですが。しかし、「こいつあ、一本取られたぜ」と昔のコメディアンみたいに肩をすくめなくなるような作品ではありません。

まあされはさておき、ツクモさんの「語られない物語」があるとしたら大変興味深い話ですね。長考寺とか住職とかいろいろ曰くありげです。あちこちで伏線ばらまいていますし。気になる所だらけですね。

**清水** そうそう、タカハシくんも幸せすぎるので、ひと波乱あってもいいですよ、ええ。やっぱりこう、ライバルの男性棋士とか現れないかなあ、と期待しています。あと、次はどんなカフェかも(笑)

**贅楽夢** ところで僕の中の裏設定では、筋井九段と見築さんがいい感じになってるんですけど、こちらのパラレルワールドのこの後の展開はどうすれば……。

**じえ** それはタカハシが聞いたら卒倒しかねない情報ですね（笑）でも、○井九段の女流棋士好きを考えれば（そして女流棋士からの人気っぷりを考えれば）致し方なしですかね

**清水** 考えてみると、私の作品には藤○先生のキャラが出ていないんですよ。マンガやラノベでは将棋を題材にしたものが増えたので、実写でドラマ性のある作品があったらなあ、なども思っております。観る楽しみを伝えるには、棋士の人生を見てもらうのも大事だと思うんですよ。

話はまた変わりますが、『駒 zone』がここまで続けられた大きな理由の一つに、「イラスト」があるといます。主にまるぺけさんと若葉さんに描いてもらっていますが、表紙を含め描いていただいているまるぺけさんのイラストは、『駒 zone』のイメージを決めるほどのインパクトがあると考えています。そんな中、ここ二号では少しテイストが変わって、美少女以外にスポットが当たっている気がします。描いているまるぺけさんはどんなものを描きたいとか、描きやすいといったものはあるでしょうか。また、「こういう表紙を描きたいのでこういう物語があれば」みたいなリクエストはあるでしょうか。

**まるぺけ** ここ最近美少女的なイラストから外れているのは、最初は雑誌の表紙のようなピンナップ路線を狙っていたのが、そこにこだわる必要は特に無いのかもと思いたしたからです。描く前に作品を読ませて頂け

た時は（あくまで私の中ですが）ビジュアルが具体的に思い浮かんだシーンがあると手が勝手に動いている感じですよ。正直画力と絵柄が超不安定なのであまり大きいことは言えないのですが、男性キャラや少年キャラはたまたお爺さんキャラなども積極的に描いていきたいなあと思っております。いや、美少女も大好きなのですが！

**清水** ありがとうございます。次作公開に向けての意気込みとか、見どころなどを宣言などお願いできるでしょうか。ちなみにわたしは、人外のものやどう魅力的に書くかを考えながら書き始めてます。なんというか、電王戦で新しい「かわいさ」を発見してしまっただですよ……その感覚を生かしたいと思っております。

**跳馬** 人外のもの、ですか！そういういえば前作の「エラー」には半分人外が存在が登場してましたね……笑。「七割未満」での辻村君とコンピューターとの対戦シーンはとても印象的なのですが、次作がどんな作品になるのか楽しみにしています。

さて私の次作ですが……ちよつと短歌投稿で面白いことを考えてたりします。昨年受験であまり投稿できなかった分、ちよつとまとまった量詠もうかな、とか思ってた。よろしくお願いします！

**浮島** 次回作ですか……。とりあえず未定です。何が出来るだろう……。つていうレベル。何か書けそうであれば、がんばります。少し多忙な時期にも入りつつあるので、出来る範囲でなにか書けたらなあと思います。

**ジエ** 次回作の予定としては……。「いかにもラノベっぽいラノベ」をテーマに作るつもりです。ラノベ黎明期に流行っていたような素朴な作品ができればいいなと思っております。

**贅楽夢** えーと、何かにつけ意気込みタイプの人間ではないので、特に何も無いのですが、最近ちよっと生活のリズムというかスタイルが変わって来ているので、「原稿書きのための缶詰になる時間」を確保せんといかんなー、と思ったり。あと、そうですね。今回の座談会を通してふと思ったのは、いつかおっさん（大人の男性）が主人公の物語も書いてみたい、かな。

**清水** 皆様ありがとうございます！ これからもよろしくお願いいたします。



注 『海の81マス』 清水らくは執筆の小説。島育ちの双子と都会から来た少女の交流などを描く。ぜひ読んでみてください。

(<http://p.booklog.jp/book/41957>)

リバウンドしたボールが、ころころと転がってくる。吸い込まれるようにそれは、僕の手の中に納まった。

チームメイトと目があつた。明らかに「パスをよこせ」という顔だ。でも、彼にはマークがいている。僕はその場で両手を構え、ゆっくりとシュートを放った。

ボールはきれいな弧を描いてボードに当たり、そしてゴールの中に吸い込まれていった。

敵も味方も、呆然としていた。ただ僕だけが、このゴールを当然だと思っているようだった。

僕はバスケットボールがうまいのに、誰も気づいていないのだ。

小学三年生の時から眼鏡をかけている。痩せていて顔も地味で、そんな感じなのでクラスの中で特に目立たない存在になっていた。クラスの中でも特に地味なグループで、ぼんやりと毎日を過ごしていた。

そうすると、僕は何にもできないやつのように思われ始めた。確かに目立たないけれど、できないわけじゃない。それでもへらへらしているから、否定しないから、そういう人間だとますます思われるようになった。

バスケットをやっているても、パスが回ってこない。悪意などないのだ。効率的でないと思われている。けれども僕は、シュートがうまい。

このまま、誰にも何も気づかれなまま大人になってしまふのだろうか。両親ですら、僕のことあまり知らない。

そんな僕も、土曜日だけは張り切って家を出る。近所に将棋道場ができたのだ。実は将棋も得意な方で、親戚のおじちゃんにはすぐに負けなくなった。でも、誰も僕が強いことを知らないし、そもそも将棋ができることを知らないから、挑んでこない。

朝、お茶の入った水筒を受け取って道場に出かける。母さんも、ペットボトルから水筒に入れ替えることだけはしてくれるのだ。

道場に着くと、受付のおじさんがにやつと笑って「三百円」と言ってくる。子供は三百円で、一日指し放題だった。ほとんどが年上のおじさんやおじいさんばかりだったけれど、同級生たちと遊ぶよりよっぽど楽しかった。

でも、悔しい時も多々ある。強い人には全くかなわないし、差が縮まっている気がしないし、なんか切なくなった。

そんな日は、少し遠回りして帰る。家に帰ると全てがリセットされてしまう気がするから。気持ちの整理がつくまで歩く。

でも、時には失敗もする。考え事をしている間に、知らない場所にきてしまうのだ。今日も気が付くと、見たことのないマンションの前になっていた。

電信柱に書いてある地名は、見たことがあった。隣町まで来てしまったのだ。

「あつちかな……」

素直に来た道を変えればいいのだけれど、どうにかして近道をしようとしてさらに迷ってしまう。小さな公園は、それ以上進めない行き止まりになっていた。

ブランコと、滑り台。どこにでもあるような公園だった。そして滑り台のてっぺんに、女の子が座っていた。ただぼーっとしているように見える。

「あの」

僕が声をかけると、彼女はゆっくりとこちらを向いた。白地に青い襟の制服、あれは私立校の制服だ。

「なに」

「道に迷っちゃって。駅に出るにはどうしたらいいかな」

「駅に行くんだ。私も行こうかな」

彼女は滑り台をするつとおりて、僕の前に立った。

「遠いよ」

「私も駅から帰るから」

「え」

「さぼり」

今日は土曜日なのに、と思ったけれど、私立は授業があるかもしれないし、部活かもしれない。

「こっち」

「あ、うん」

彼女はすたすたと歩き始めたので、そのあとをついていく。

「名前は？」

「三東幸典」

「さんとう？ めずらしいのね。私は工藤朱里」

朱里はおしゃべりだった。ここから二駅のところに住んでいること、学校は嫌いだということ、妹の方が可愛いので親が不公平だということなど、いろいろと聞かせてくれた。僕の方は将棋をしている帰りだということがぐらいいしか伝えられなかった。

「電車に乗るんじゃないんだ」

「うん。この近く」

「そっか。じゃあ、またね」

「うん。また」

手を振っているときは気が付かなかったけれど、彼女が見えなくなっ

てから気づいた。

僕らはどうやって再会するのだろうか。

再会は、中学二年生の時だった。

すっかり道場で敵のいなくなっていた僕は、将来のことを考え始めていた。将棋なら、一番になれるんじゃないかと。

「いやあ、三東君強いなあ。おじさんに勝てるようになったもんなあ」  
道場でよく当たるおじさん、金本さんが僕の背中をたたき。自称六段だけど、多分二段ぐらいだ。

「プロなれるよ、プロになったらうちの娘にも将棋教えてやって」

何とも遠い未来の話である。だけど、プロになりたい気持ちは芽生えていた。

おじさんはハンチングを指でくるくる回しながら、次の対局に向かっていた。

僕は、道場を出る。残念ながら来週から期末テストなのだ。

もちろん、テストのことは考えたくない。このままプロ棋士を目指して、高校に行かないのもありかもしれない。両親はなんと言おうだろうか。師匠も探さなければならぬ。

いろいろと考え事をしながら歩いていたら、また迷って、そして同じように迷っていた。

目の前に、ブランコと滑り台が見える。そして、女の子も。

「久しぶり」

工藤さんは、すぐに僕に気づいた。

「久しぶり。またさぼり？」

「ほとんどさぼり。楽しくないもん」

制服はほぼ同じだから、一貫校なのだろう。

「三東君は、やっぱり道場？」

「うん」

「強いんだ」

「……うん」

「強そうな顔してるもんね」

「初めて言われた」

「メガネのせいかも」

工藤さんは、少し影があつて、それでもとつてもきれいだつた。普段女子と話すことも少ないぼくは、緊張しているのを隠しながら、しばらく話していた。

「将来プロになるんだ」

「うん、目指したいなつて」

「私は東京行きたい」

「え」

「東京行つてね、ロフト付きのおしゃれな部屋に住むのが夢かなあ」

女の子の夢は難しい。でも、夢を語る工藤さんの顔は悪くなかつた。

その次の再会は、高校だつた。

中学三年生の時、奨励会に入った。紹介された師匠は弟子のことにあまり興味がなく、「可能性は二割ちよつとかな」とだけ言つた。

プロになれる気満々だつたので、単純にびつくりした。しかし実際に、多くの人が奨励会を去つていく。

東京まで通うのはきついでけれど、最初のうちはとても楽しかつた。いろんな人と将棋を指す機会があるというのは単純にうれしかつた。

でも、そんな時間は長く続かない。全国各地から、強い子供たちが集まつてきている。僕より強い小学生が何人もいる。くじけそうになつた。

両親は将棋のことには興味がなかつたが、高校には行かなければならないとしつこく言つてきた。だから、入学した。何の目的もなく、ただ卒業するためだけに高校に来た。

そこに、朱里もいたのだ。

「びつくりしたね」

「本当に」

朱里は、エスカレーターを降りたのだ。まあなんとなく、全く理由が推測できないわけでもなかつた。

「将棋はどう？」

「まあまあかな」

「いいペース？」

「よくはないよ」

「でも、可能性はあるんでしょ」

「二割ちよつとね」

「ふうん」

工藤さんは前よりも少し明るくなつていた。きつと、エスカレーターは酔いやすかつたのだろう。

「三東君と私が付き合う確率は何割？」

「え」

「何割？」

「五割……一分ぐらいかな」

「可能性大だね！」

実際には、九割九分だと思つたし、その日から付き合い始めた。

あの頃から何が変わつただろうか。バスケの試合でボールが回つてきたときのことをたまに思い出す。

僕は、パスを貰えればと思っていた。けれどもそれは、みんなが素人の、小さな世界での話だった。

将棋も同じだ。大きな世界では、僕は無力だ。

「幸典、できるよ」

朱里はいつもそんなことを言う。誰かに励まされるのに慣れていないぼくは、戸惑ってしまふ。

「でも、大変だよ」

「頑張れる」

僕は高校でもやっぱり目立たなくて、その一方で朱里は案外目立つ存在だった。進学校出身の朱里はみんなより勉強ができたし、運動神経もよかったし、何よりかわいかった。少し無愛想なところもあったけれど、そういうところが好きな人もいる。

なんで僕なんかとなんだらう。それは、みんなも僕も思っていた。でも、朱里はずっとこちらを向いていてくれた。

それに似合うような人間になりたいと思った。きつと、一流にはなれない。でも、朱里の期待に応えられる自分でありたい。

それでも、ふとした拍子に気が抜けてしまうのだった。連敗して帰ってきたあとなど、何日か将棋に関するものを遠ざけてしまうことがあった。年下のプロが誕生し、後輩で退会する奴も出てきて、不安は募るばかりだった。

「私、夢かなえるよ」

「え」

「東京に行って、幸典と一緒に住む」

彼女は有言実行型だ。拒否しなかったし、もちろん卒業したらその通りにした。

朱里は前向きな僕が好きだというから、どんな時も前を向こうと決めた。自分の中で、なんでプロ棋士になりたかったのかもよくわからなく

なっていた。それでも、僕ががんばれば朱里の笑顔が増えるなら、今の理由はそれで十分だった。

少年の日の僕は、何かできても、頑張ろうとしない人間だった。本当はできるのにか思って、自分の世界の中で満足していた。

プロにならなければいけない。今までの自分を超えていかないと。

「夢、かなっちゃった」

ロフトに上った朱里は、満面の笑みで言った。

二人で住むことになった部屋は、決して広いとは言えなかったけれど、彼女の望み通りロフトがついていた。僕を見下ろす彼女の顔は、本当に幸せそうだった。

僕は笑顔を返しながらも、内心では黒い塊のようなものを抱えていた。僕はまだ何も仕事をしていなくて、将来どうなるのか全く分からない。

朱里は今も刺激があつて幸せかもしれないけど、そのうち僕に愛想を尽かしてしまうかもしれない。

「幸典は大丈夫だよ」

彼女は何度もそう繰り返す。けれどもそのたびに「二割ちよつと」が、僕にのしかかってくるのだ。八割近くは、大丈夫じゃない。

それでも、努力はきつと、少しだけ確率を上げてくれる。僕みたいな人間にもきつと、チャンスはあるはずなのだ。

朱里がこちらを向いていない隙に、僕は漫画の入った段ボールのふたを閉め、ガムテープを巻いた。これは、プロになるまでは開けない箱だ。

「先生……あの、先生」

肩をかくと揺らされる。いつの間にか眠ってしまっていたらしい。

「う、うん」

「あの、風邪ひくから……その、寝るなら布団で……」

目を開けるとツインテールがゆらゆらと揺れているのが見えた。ああ、そうだった。今この部屋にいるのは。

「ああ、こんな時間か。月子さんも寝ない」と

「はい。あ、でももう少し勉強します」

「ほどほどにね」

長い夢を見ていたようだ。不安だった日々。

明日から月子さんは三段リーグを戦う。女性として初めてだったが、僕としては自分の弟子として初めてでもある。

月子さんがロフトに上がっていくのを見届けると、僕は本棚へと目を移した。表には将棋の本が並んでいるが、その奥には漫画本が並んでいる。僕はプロになって、あの箱を開けたのだ。

もう一度あの箱を開けたら、もう少し頑張れるうか。あと、今でもバスケットでゴールはできるだろうか。あと、今でもバ

幸いにも弟子の方は、もっともっと上を目指せる器だ。そして彼女は今、自分のために戦っている。

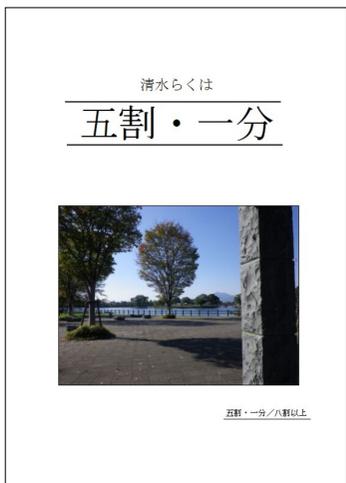
再び僕はロフトを見上げて、そして、笑顔でいられる。月子さんも心から笑顔でいられる日が来れば。それが今の、僕の願いだった。



『紙の駒・zone』

税込378円

[https://www.dlmarket.jp/products/detail.php?product\\_id=274853](https://www.dlmarket.jp/products/detail.php?product_id=274853)



『五割・一分』

税込324円

[https://www.dlmarket.jp/products/detail.php?product\\_id=234426](https://www.dlmarket.jp/products/detail.php?product_id=234426)

## 祝福

### ジエームズ・千駄ヶ谷

Prologue 「孤独の中の神の祝福」

黒鐘はづきと初めて出会ったあの夏の日のことは、今でも鮮明に憶えている。

あの頃は正真正銘の十六歳で、高校一年生になったばかりだった。四月に将棋部に入部した僕は、いくつかの出会いを経て、通常とは少し違った道を歩むことになる。

僕の通っていた高校の将棋部は本当にこぢんまりとした集まりで、他の他には部長である二年生の蝶名橋と同級生の御乃木の二人だけしか在籍していない、本当に公式な部活動として成立していたかどうかとも怪しいくらいの弱小部活だった。

毎週決まった活動日のようなものも一応あるにはあったが誰もそんなことは気にしておらず、一日の授業が終わると何となく部室に集まり、世間話をしたりゲームをしたり、時には将棋を指したりと、今思い出しただけでも自由奔放な活動だった。

ただ、自由気ままではあったが将棋の実力は意外にもしっかりしていたのではないかと思う。蝶名橋はいわゆる神童というのか、生まれ持ったの天才型で将棋も勉強も滅法できる人であったし、御乃木も小学生の頃から将棋に親しんでいたらしく、地区予選では敵がないほどの実力者だった。

僕はというと、将棋を本格的に始めたのは高校生になってからで、まだ定跡も口々に覚えていないような初心者だった。ただ、将棋が下手だったからといって部活が楽しくなかったかという点、そんなことは全くな

い。暇な時間があると必ず部室を訪れて、定跡書や詰将棋の本や、時には将棋マンガを読みふけていた。

「ぎんちゃんはさ、将棋の何がそんなに楽しいわけ？」と、幼なじみの秋谷ゆかなはしばしば僕の将棋熱に疑問を呈した。多くの将棋指しが答えに迷うであろうその問いかけに、当時の僕はやはり答えに窮していた。

短い人生の中で偶然将棋に出会い、至極当然の帰結として自分も将棋を指すようになったとありのままを述べる他ない。しかし、その根拠を説明することは難しい。

蝶名橋と御乃木の将棋はいつも目が眩むほどハイスピードで、複雑で、当時の僕にとつては雲の上の戦いだった。チェスクロックをバシバシ叩き合いながら高度な中終盤を展開する様子は惚れ惚れするほどカッコよく、いつも憧れていた。二人のような将棋が指したくて、日々がむしやうらに将棋を指した。

あれこれ思い悩むよりもまず実戦を指すというのが、当時の僕のやり方だった。将棋に費やした時間だけを問題とするなら、人生の中で一番勉強した時期であったかもしれない。

とにかく、あの頃の僕の将棋は単純で、無邪気で、真っ直ぐで、そして僕は将棋のことを何ひとつ分かっていなかった。それは将棋が弱かったということも当然あるが、強さを求める理由を持っていなかったという点も大きな問題だった。

「RCのレベル上げみたいに棋力つて上がんないんですかねー」と、あの頃の僕はよく愚痴をこぼしていた。なにしろ部長や御乃木との実力差は明らかで、二枚落ちや四枚落ちの手合いが縮まらないことへの焦りは多少以上には持っていたし、そのハンデがどの程度の距離なのか感じないわけにはいかなかった。ある時「阪奈君はまだ壁にぶつかるほど将棋指していないと思いますよ」と御乃木に諭されたことがある。

当時の僕にとっては部長や御乃木がまさに「壁」だったわけで、所詮

初心者の苦悩は分かってももらえないと反駁したくなったことを記憶しているが、実際のところ彼の指摘は実に正確だったと思う。思い返してみると、その時の僕は将棋を始めてからひとつの壁にさえぶつかっていなかった。平地だけを選んで歩いて、そのくせ頂上に登れないとぼやいていた。

蝶名橋や御乃木がどのような壁に直面し、どのような心境で将棋と対峙していたのか今となっては知る術もない。しかし、ひとつの壁を乗り越えるためには相応の犠牲を支払わなければならないということ、今の僕は知っている。

ところで、あの頃の蝶名橋は「孤独の中の神の祝福」というクラシックの名曲を好んで聴いていた。この曲は十七分間の短いピアノ曲で、一八五〇年台にリストによって製作された一連の楽曲の中の一つである。この曲に持たされていた宗教的な要素を当時の蝶名橋がどの程度意識していたのかは分からないが、少なくとも彼はこの曲に何か特別な意味合いを持たせていたような節がある。彼が部室で初めてこの曲をかけたあの日から、僕の人生は少々風変わりな道をたどることになる。

## 第一章

高校生になって初めての夏休みを目前に控えた土曜日の放課後、部室のソファでだらしなく寝そべり、ぼんやりしていた時のことだ。部長は熱心に将棋年鑑の棋譜を並べ、御乃木はこの小汚い部室の中で優雅にも紅茶を淹れようと、使い古された金属製のポットを物置から引つ張り出しにかかっていた。

「プロっていうのはさ、やっぱりプロだからプロなんだよな。最近そう思う」本のページをめくっていた蝶名橋が突然語り出した。

「そうですか」と僕はあいまいに相槌を打った。

「プロ棋士が仮に、ある時突然アマチュア棋士になったとするだろ。そしてたらやっぱりプロの実力は発揮できないんじゃないかね。俺はそう思う」

「はあ。まあ、何となく言っている意味は分かりますけど」と僕は答えた。

この時期の蝶名橋は、こういった話題を好んでいた。彼の中でそういう流行が起きていたのだと思う。

御乃木は二人の会話には参加せず、取り出したポットの水洗いを始めている。

「つまりさ、神がいるんだ」

「神ですか？」

部長が何のことを言っているのかわからず、一瞬話題についていけないようになった。彼の話は、しばしば飛躍して聞く者を戸惑わせる。

「いわゆる神様って意味じゃない。勝負における神性という意味だ。プロ棋士の指す将棋には神が宿っている」

言いたいことが少しずつ見えてきた。

「俺のレベルでは具体的な違いを指摘するのは難しいけどな。でも、たぶん何か決定的な違いがあると思うんだ。だから、アマチュアは結局のところプロには勝てないわけだ。勝敗の結果じゃなく、一局の価値という意味で」

蝶名橋は僕に将棋年鑑のある一ページを示した。そこには、当時のトップアマとプロ棋士との対局の棋譜が掲載されていた。結果は、どうやらプロ棋士の勝利のようだった。

「アマチュアの将棋指しって結局なんなんだろうな？」と複雑そうな表情で蝶名橋はつぶやいた。

御乃木はポットに引き続き、棚の奥に眠っていたカセットコンロを引つ張り出していた。コンロはあちこちが錆びついていて、本格的に年季の

入った品に見える。点火した瞬間爆発してもおかしくなさそうだ。雑多な荷物が置かれている長机を整理し、その中央にカセットコンロを設置した。

「アマチュアの将棋にも神が宿ることはあり得るだろうか」と蝶名橋は自問自答するように言った。

御乃木は、部長の話には我関せずといった調子でコンロの金具に付着した鍍をティッシュペーパーで丁寧に拭き取ると、こちらも期限切れが疑わしい外見のガスボンベを取り付けた。

ゆっくりとコンロのツマミを回す。

チツ、チツ、チツと圧電素子が音を立て、やがてポツと小さな破裂音が響いた。

「阪奈くんッ！君はどう思うかねッ！？」

コンロの火が灯った瞬間、蝶名橋が突然大声を發した。

僕は思わず「ふえっ」と変な声を漏らした。

気持ちが高ぶった時に突然大声を發するのは蝶名橋の悪い癖で、彼が奇人扱いされている理由の一つである。彼にとつて、思索にふけることは呼吸をするように当然のことのようだった。

コンロの灯火は穏やかな青色を示していた。どうやら部室の爆発事故は免れたようだった。

「ときに御乃木君、君は部室に一つしか無い机を占拠して、一体何を始める気かね？」

正氣に戻ったのか、蝶名橋はようやく御乃木の方へ視線を向けた。

「ふふっ、見てわからないんですか？部長。アフターヌーンティーですよ」と御乃木が得意げな表情で答えた。

長机の上にシュールな光景が展開されている。

いつもは都合良く荷物置き場のように扱われている大きな長机に本格的なティーセットが並べられ、ついさきほどもそこにあったはずの将棋

盤やらチェスクロックやらはいつの間にか姿を消している。

「いや、茶を淹れるためになぜそこまで大掛かりな準備が必要なのかを訊いているのだが」と蝶名橋が冷静な突っ込みを入れた。

部長の視線は、カセットコンロの上でシューシュー音をたてているステンレス製の背の高いやかんに注がれている。

「僕、電気ポットで機械的に沸騰させたお湯は好きじゃないんですよ。なんだかプラスチックみたいな香りがして」と御乃木が答えた。

御乃木は優雅な手つきでやかんの蓋をあげ、細長い電子温度計の先を湯の中に浸した。「オノっち、さてはお前本気だな？」と蝶名橋は笑みを浮かべながら言った。部長は御乃木のことをオノっちと呼んでいる。

学校の中でも御乃木をオノっちと呼んでいるのは部長だけだ。

「あ、ご心配なく。もちろん水道水なんて使ってませんよ。そんな初步的なミスはしていません。おっと、そろそろいい頃合いかな」と御乃木はマイペースに答えた。

「オノっち、俺が知りたいのはそういうことじゃない」と蝶名橋が言った。

よく見ると机の隅にミネラルウォーターのペットボトルが転がっている。わざわざこのために持ってきたのか、重かっただろうに。

御乃木はピピッと電子音を響かせた温度計のモニタを一瞥すると、銀色のキャデイスプーンを使って慎重に茶葉を計量した。あらかじめ湯を入れて温めておいたティーポットに茶葉を投入し、少しの間待ってから湯を注いだ。

甘い上品な香りがあたりに立ちこめる。

「どうです。いい香りでしょう」御乃木は自慢げな笑みを浮かべている。「いい香りなのは認めるけどな。しかし、神聖な部室でこのような。いやしかし思いの外いい香りだな」

湯気の立ち昇るティーカップを受け取ると、蝶名橋は紅茶をすすった。

左手の指先でリズムを刻んでいる。機嫌が良い時の蝶名橋の癖だ。

「あっぱれだ。俺は感動したぞ！」

蝶名橋は再び突然の奇声を発した。窓ガラスが振動しそうなほどの大声だった。思わず御乃木と顔を見合わせる。部長のそばにいと、少なくとも退屈はしない。

「お褒めに預かり光栄です」と御乃木が苦笑交じりに答えた。

「そうだ。そういうえば俺も皆に見せたいものがあるな」と、蝶名橋はおもむろに鞆から古いCDケースを取り出した。

「見せたいというか、聞いて欲しいものかな。『孤独の中の神の祝福』という曲なんだが」

蝶名橋は持参したCD-ROMを埃の被ったラジカセにセットした。基本的にこの部屋の道具は埃をかぶりすぎている。蝶名橋がボタンを操作してトラックを合わせると、かすかな摩擦音の後に続いてメロディが流れ始めた。上品で落ち着いた曲調だった。

「諸君、この曲を知っているか？」と蝶名橋が言った。

どこかで聴いたことがあるような気もしたが、正直なところ分からなかった。御乃木が何か答えてくれるのではないかと視線を送ってみたが、どうやらその気はないらしい。

「いい曲だと思います。僕はクラシックのことは全然わかりませんけど」と僕は言った。

「ふむ」と蝶名橋はうなづいた。

「まあ、この曲は初心者向きじゃないからな。知らなくても許す。いや、実はな、この曲を聴いているとき、異常に詰将棋が解ける気がしてな。気のせいかもしれないんだが。それで、ひたすらエンドレスにして流していたんだ」

詰将棋が解けるようになる音楽が本当にあるとしたらすごい大発見だが、まあ、クラシックを聞いて集中力を高めるといっている話ではない話ではな

いし、あながち間違いとも言い切れないかもしれない。

「こいつをBGMにしなごら一局どうだ？」

「ぜひお願いします」と僕は即答した。条件がどうであれ、練習将棋は望むところだったし、BGMの効果とやらを試してみたい気持ちもあつた。

「 gentlemen 少しは強くなったかな？」と蝶名橋は含みを持った笑みを浮かべた。

「どうせ僕は弱いですよ」と言いながら、僕は床の隅に放置されていた盤駒を回収した。

将棋部には到底似つかわしくない上品なデザインのティーカップを手に将棋を嗜む様子は、その後の三年間の中でも最も優雅な光景だったのではないかと思う。

「これでスイーツでもあればなあ」と駒をならべながら僕は思わずつぶやいた。

「 gentlemen ちゃん、いいこと言った」

蝶名橋の手つきに力が込められている。

「御乃木君」部長の目が輝きを増し始めた。

「なんですか、部長」

「これは極秘情報なのだが。駅前新しいパン屋がオープンしたのは知ってるかね？」と蝶名橋は鋭い視線を飛ばしながら言った。

「ええ。知っていますけど」と御乃木は答えた。

「私が過日入手した情報によれば、その店のナポレオン・パイは実に絶品だそうだ」と蝶名橋は厳かな口調で言った。

「はあ」御乃木が呆れ顔でつぶやく。

「時に、今からナポレオンパイを仕入れてくるというのはいかがかな？むろん、代金は先輩である私が出そう」蝶名橋が神妙な面持ちで言った。

「で、誰が買いに行くんです？」御乃木は冷やかな視線で部長を見つ

めている。

「いや、それはさ、後輩である君が」

「お断りします」即答だった。

「いや、そこをなんとか。今度妹の友達紹介するからさあ」

「この間も同じことを言ったとき全然紹介してくれないじゃないですか」

二人が押し問答を始めたそのとき、

バタン、と勢い良くドアが開かれる音がした。

「ちいっす、みんな元気にしてるかい？」

バタバタと足音を響かせながら場違いに陽気なノリで入ってきた男は、我が将棋部の顧問、里見誠士朗だ。

日焼けした肌と茶髪に染めたチリチリ頭はとても高校の教師には見えないが、これでもれつきとした物理教師である。

「この間は世話を掛けたな、蝶名橋」

「いえ、礼にはおよびません」

メガネをクイツと上げながら答える蝶名橋。

なにやら意味ありげな会話を交わしているが、きつと何か下らない約束でもしていたに違いない。

「おっと、クラシックを聴きながらティータイムかい？この部はいつからそんなオシヤレになったんだ？」とオーバーアクション気味に肩をすくめながら里見は言った。

里見のしゃべり方はいつもアメリカ映画の吹き替えを思わせた。意識してそうしているのかどうかは未だにわからない。

「俺にも一杯いただけかな？」と自分の紅茶をリクエストすると、

「お前等に重要な報告がある」と改まった口調で里見が告げた。

里見の「重要な話」がまともだったためしは、記憶の範囲で一度もなかった。前回は、どこの高校の女子制服が一番かわいいかという地元紙に掲載されたアンケートの結果報告だったし（ちなみにウチの高校は県

内五位だった）、その前は学校近くのうまいラーメン屋を発見したというあまりにも普通の内容だった。だから、どうせ今回もしようもない話題に違いないとみな高をくくっていた。

しかし、今回ばかりは違った。里見は重々しく宣言した。

「今日この日から我が将棋部に新しいメンバーが加わることになった」

小さな部室にどよめきが起こった。

どよめきと言っても、僕と部長と御乃木の三人しかいないけれど。

この時期に新入部員が入るなんて誰も予想していなかった。

「てめえらが見たこともないようなキューティー・ハニーだからな。覚悟しろよ」

里見はゴホンと咳払いをすると、扉の外で待っていた少女を招き入れた。

「黒鐘はづき君だ」

とたとたつと部室の入り口から姿を現した少女は、「あの、黒鐘はづきです」と言ってぺこりと頭を下げた。

黒髪ロングだった。

僕は何度もまばたきをして、目の前の景色を確かめた。

白いブラウスが神々しく輝いてみえた。

「おらおら、阪奈！なにニヤけてんだよ！」と里見が煽るように言った。

「いや、別に何も」と僕は慌てて答えた。

自分では平静を保っているつもりだったが、実際はどうだったか分からない。

「黒鐘は先月転校してきたばかりのニューカマーだ。彼女の担任から将棋部に入りたいという希望を聞いてな。さっそく連れてきたってわけだ。

みんな、仲良くしてやってくれよ」

里見は芝居がかかった口調でそういうと、オーバーな動きでソファを指し示し、立ち尽くしている黒鐘に腰掛けるよう促した。

「さあ、特別に質問タイムだ。今なら五割引で受け付けてやるぜ」と里見はブルース・リーのような手招きをしながら言った。

黒鐘は恐縮したような表情でちよこんと椅子に座っている。

「将棋は、以前からなさっていたのですか？」少しの沈黙の後、御乃木が口火を切った。

「ほんの、少し」と黒鐘は控えめな声で答えた。謙遜しているのか、本当に自信がないのか僕には判別できなかった。

「言っておくが、黒鐘の実力を知ったら腰を抜かすぞ。何を隠そう、この俺が負けたくらいだからな」と里見が口を挟んだ。

おおつ、と蝶名橋が声をあげた。将棋部の顧問である里見は少なくとも有段者のはずで、つまりは黒鐘も有段者以上の実力があるということだ。

「そんなこと、ないです」黒鐘は恥ずかしそうに顔を左右に振った。

「あの、ご趣味は？」と蝶名橋が尋ねた。「お見合いじゃねえんだぜ」と里見が茶々を入れる。

「将棋くらいしか、ないんです。本当に」と黒鐘は答えた。

その口ぶりから、おそらくそれはその通りなのだろうと察せられた。

「こんな薄汚い部室で申し訳ないねえ。それでも普段よりは綺麗なんだからねえ」と場を和ませるように里見が言った。

「いえ、とんでもないです。想像していたよりもずっと素敵です」と部室の様子を見渡しながら黒鐘は言った。たしかに机の上ではティーカップが湯気を立てており、CDプレイヤーからはリストの演奏が流れている。これは誤解を生みかねないな、と僕は思った。

「気に入ってくれてよかった。見ようによっちゃあなかなかいかけた部屋だろう？」意味ありげな笑みを浮かべながら里見はこう言った。

「さてさて、打ち解けてきたところで早速、ニューフェイスのお手並み拝見といこうぜ。ガイズ、心の準備はいいか？」

里見はエディ・マーフィーのようなアクションで将棋盤を指さした。

「さあ、誰から行く？」の問いかけに、蝶名橋は「では、私が」と手を上げた。

こうして、黒鐘対蝶名橋の一戦が始まった。

僕が座っていた席に黒鐘が座り、両者改めて駒を並べていく。

黒鐘は一枚一枚駒の重さを確認しているかのように、実に丁寧な動作で駒を並べた。そのペースに合わせるように、蝶名橋もゆっくりとした手つきで駒を配列した。

御乃木が蝶名橋の振り歩先で振り駒を行い、四枚の歩が表になった。

「蝶名橋、負けたら部長交代かもな」と里見が蝶名橋にプレッシャーをかける。

蝶名橋は一瞬、むっとした表情を浮かべたように見えたが、すぐに平静を取り戻すと、「お願いします」と丁寧に頭を下げた。両者ともお手本のように綺麗なお辞儀だった。こういう仕草は、真似しようと思っても意外と簡単にはできないものだ。正直ちよつとうらやましいと思う。

▲7六歩 △8四歩 ▲6八銀

対局は矢倉の出だしで始まった。部長は何でも指せるオールラウンダーだが基本的には振り飛車を好んでおり、今回の戦型は新入部員を試すという意図が感じられる。

テンポよく指し手が進み、オーソドックスな定跡型をたどってゆく。蝶名橋はやや前傾姿勢となり、上体を小刻みに揺らしている。普段の対局姿勢と変わらないように見える。

一方の黒鐘は、背筋をピンと伸ばして綺麗な正座を保ったまま、ほとんど動きがない。動と静といった印象だ。

特に持ち時間の取り決めなく開始された対局だったが、開戦の瞬間まではお互いほとんどノータイムで進んだ。そして、互いの歩がいよいよぶつかり始めたタイミングで、ついに蝶名橋の指し手が止まった。

素人目にも難しい局面に見えた。突かれた歩を取るか、取らないか。歩で取るか、角で取るか。互いの駒の利きが交錯して矢倉戦らしい応酬になっている。

局面が少し進み、▲1七香△6四歩▲1八飛と、先手は雀刺しの狙いを明らかにした。

悩ましい局面に見えるが、黒鐘は時間を使わずどんどん指し手を進めていく。攻めている側の蝶名橋が小刻みに時間を使い、表情もやや苦しげに見える。

盤中央での折衝が続き、1筋の飛車が3八へと戻る。銀を取り合った後、互いに飛車当たりやに銀を打ち込む。形勢不明の好勝負に思えたが、黒鐘は指し手のスピードを緩めない。難解な終盤戦へと突入したかと思えたその時、

△8六桂打

黒鐘の指がしなった。

気がつけば痛打が決まっていた。先手玉の真上、歩の頭にガツンと打ち込む手で、成立していれば間違いない勝負は決まっているだろう。

ふう、と蝶名橋のため息をつく声が聞こえた。

数手進んだ局面は、はっきり後手の一手勝ちとなっていた。

やがて、蝶名橋の右手が駒台へ伸びた。

「負けました」とはっきりとした口調で投了を告げた。

綺麗な負け方だった。

「すげえ」と御乃木がつぶやいた。「強い」

里見は無言のままうんうんとうなずいている。

「いやあ」と蝶名橋が声を発する。

黒鐘は少し照れたような表情で決着がついた盤を見つめている。

蝶名橋はしばし無言で視線をさまよわせていたが、「攻め合った手はずだったかな」と感想を述べた。

里見と御乃木を交えながら、短い感想戦が行われた。

相矢倉は得意戦法だったかと問われた黒鐘は、「矢倉は、初めて覚えた将棋だから」と、ささやくように小さな声でつぶやいた。

感想戦の終わりに、

「はづき君、実に素晴らしい将棋だった。君は天才か！」と蝶名橋が感嘆の意を述べた。それが悔しさを隠す演技なのか、本当にそう思っているのか、僕には分からなかった。

黒鐘は顔を真赤にして頭をブンブンと横に振った。肩まで伸びたつややかな髪の毛がさざ波のように揺れていた。

「ところで、勝ったらご褒美をあげるっていう話だったな」と里見が唐突に発言した。

「いえ、あれはいいです、そんな」と黒鐘が答えた。どうやら何か事前の約束があったようだ。

「まあまあそう言わず。実はな、もう用意してあるんだ。大したものじゃないけどな」と言って里見はポケットから小さな封筒を取り出した。

中からでてきたのは、市内にある動物園の入園チケットだった。

「動物園に行ってみたって言ってる？実はみんなの分も買ってあるんだ」と里見が言った。

「せっかくだからみんなで楽しもうぜ。来週の日曜日なんてどうだい？」

里見は実に屈託ない笑顔を浮かべた。こういうときの里見の笑顔はほんとはずるいと思う。

黒鐘はきよんとした表情のままこくりとうなづいた。

☆☆☆

里見が手渡した動物園のチケットは全部で五枚あったらしい。当初部

員プラス里見の五人分と想定されていたようだが、里見が私用とやらで急遽都合が悪くなつてしまい、代わりのメンバーを探すこととなつた。部長に言わせれば、「生徒に混ざつて動物園にお出かけしようなんて発想はそもそも里見らしくない。はじめから何かたくらんでいたに違いない」ということになる。確かに里見はフレンドリーな教師ではあつたけれど教え子とつるんでいるようなところは目にすることがなかつたし、蝶名橋の言う通り何か考えがあつたのかもしれない。

ともかく、我々は話し合いの結果、一人の追加メンバーを招集することになつた。

秋谷ゆかな。

僕の昔からの知り合いであり、クラスメイトでもある。小さい頃は互いの家で遊んだこともあるし、いわゆるちよつとした幼なじみだ。中学生になつてからはその年頃の少年少女の常として、少し疎遠になつていったから、ゆかながメンバーに加わつたことは率直にいつてまあ喜ぶべきことではあつた。

もつとも、ゆかなを誘うことを提案したのは僕ではない。残念ながら僕は同級生の女子をスマートに動物園に誘うような社交性は持ちあわせていない。ゆかなにオファーを出したのは、我が部の絶対的エースにして変態紳士の呼び声高い蝶名橋と、それに面白がつて同調した御乃木である。

その日は朝から曇りがちな天気で、この時期としては珍しいほど涼しい気温だつた。絶好の行楽日和とはいかなかつたけれど、しかし炎天下の動物園を行軍するよりはずっとマシだつたと思う。

約束の時間の二十分も前に入園ゲートに着いてしまった僕は、カタログスタンドに差し込まれていたパンフレットを眺めながら落ち着かない気分です時間をつぶした。そもそも動物園に来るのはずいぶん久しぶりだつ

た。子供の頃は動物園といえれば無条件に楽しかつたはずだが、今こうして高校生の立場で来てみると、一体どんな気持ちで動物園を楽しめばいいのかうまくイメージできなかつた。

やがて、駅の方角から歩いてくる蝶名橋と御乃木の姿が目止まつた。僕は一人だけ早く来たことを悟られないよう、さきほどまで手にしていたパンフレットをそつとポケットに隠した。蝶名橋はジーパンにTシャツ姿と普段着そのままの格好で、僕は少しほつとした。御乃木は上品なダークグレーのポロシャツにベージュ色のチノパンを合わせていたが、こちらも彼の普段の格好とさして変わらない。

ほどなくして、黒鐘とゆかなの姿も見えた。

ゆかなはピンク色の薄手のカーディガンに白い膝丈のワンピースという組み合わせで、さらさらの長い髪をポニーテールに束ねていた。僕的には、いや僕に限らず全男子高校生にとってグツと来る服装だつた。

一方の黒鐘は、白いブラウスにプリーツスカートを着用していた。ややフォーマルな感はあるが、派手過ぎないところに好感が持てる。まるで制服のような服装、というか、ウチの高校の制服そのものに見えなかつた。

近づいてくる黒鐘を見て、疑問は確信へと変わった。あれは間違いない制服だ。しかし、同級生と出かける約束にわざわざ制服で現れる女子高生がいるものだろうか。黒鐘はづきは、やはり謎多き少女だつた。

ゲート前に集合すると、黒鐘が持参していたチケットを配つた。彼女は律儀にも「蝶名橋先輩」「御乃木君」「阪奈君」「秋谷さん」と名前を呼んで、一人ひとり手渡しした。

「お邪魔しちやつて、ほんとに良かったの？」

とゆかなが黒鐘に言つた。おそらく、ゆかなと黒鐘は初対面に近かつたと思う。

黒鐘はふるふると頭を振り、「だいじょうぶ。多いほうが楽しいから」と短く答えた。

動物園の入口を抜けるとまず左手にワラビーとテナガサルの展示がある。蝶名橋いわく、この動物園の「前菜」的存在だ。前菜を通り過ぎ少し奥へと進むと、次はプレーリードッグの住む庭園が現れる。柵で囲まれた広い砂地の中で十数頭のプレーリードッグが暮らす展示は以前から根強い人気があり、今日も子どもたちの歓声を集めている。

黒鐘はプレーリードッグの群れを見つけると、とてとてと小走りに近づいて手すりから身を乗り出した。興味深そうな表情でプレーリードッグを熱心に眺めている。

見ていると、ときどき穴からひよっこり顔を出したりして、実に愛らしい。

近くでは小学生の集団が「かわいい、かわいい」と口々に嬌声を上げている。

黒鐘のそばに近づいて、「かわいいね」というと、無言でこくんとうなずいた。

「プレーリードッグ好きなの？」と聞くと、「プレーリードッグ？」と疑問形で返ってきた。

初めて目にしたのだろうか。テレビとかに結構出ている気がするけれど。もしかすると黒鐘はテレビなんて見ないような家庭で育ったのかもしれない、と僕は思った。

「名前、知らなかった？」と訊ねると、頭をブンブン振って「し、知ってたよ」と少し慌てたように言った。

「ドッグって名前がついているけどさ、本当はリス科なんだよ」と以前誰かに教えてもらった受け売りを言ってみる。黒鐘はプレーリードッグの群れを見つめたまま「ふーん」とそっけなく返事を返した。

僕らから少し離れたところでは、残りのメンバーが穏やかでない会話を始めている。

「オノっち、お前知ってるか？アメリカではプレーリードッグって害獣の扱いで、駆除の対象にもなってるんだぜ。効率的に駆除するための専用の機械まで作られたんだぞ。あれは一度見たらびっくりするぞ」

「まじっすか、それ」

「やだ、こわーい」とゆかなの高い声が響く。

「掃除機みたいにプレーリードッグを巣穴から吸い出してな。機械の中に放り込んで駆除してしまうんだ。残酷という概念を体現したような機械だな」

「部長、なんでそんなこと知ってんすか」若干引き気味に御乃木が言った。

「蝶名橋先輩ってほんと変わってますよねー」

ゆかなの声は遠くてもよく聞こえる。

「部長の言うことは気にしないでいいから。ほら、ウチの部長ってちよつと変わってるからさ」と僕は言った。

「うん」と黒鐘はつぶやいた「でも、かわいいそう」

柵の周囲では着飾ったカップルが手をつないで歩き、家族を連れた中年の男性が子供の写真を撮っている。

「こういう景色をずっと眺めて暮らしたら幸せなんだろうなあ」と何気ないつもりで僕は言った。

「そうだね」と黒鐘はつぶやいた。

耳をすませると、何種類もの動物の鳴き声が聞こえる。

「ぎんちゃんさあ、昔犬飼ってたよね」と遠くから質問が飛んできた。

「そうだよ」と僕は答えた。

「あの犬、今も元気？」

「いや」と僕は言った。「だいぶ前に死んじゃったんだ。それでもずい

ぶん長生きしたんだけど」と僕は答えた。本当は飼いが死んだことなんて打ち明けたくなかったけれど、嘘をつく訳にも行かないので僕は正直に答えた。

「そっか、ずいぶんおじいちゃんだったもんね」とゆかなは少し気まずそうな表情で言った。

「でもさ、あいつはきつと」と僕は言った。でも、後の言葉がうまく続かなかった。

しばらくの間沈黙が続いた。

「そろそろ、次行こっか」とゆかな切り出した。

「あつちにゾウがいるみたいですよ」と御乃木が言った。

「はづきちゃん、行こ」とゆかなが黒鐘に呼びかけた。

しかし、黒鐘は黙ったままぶるぶると頭を振った。

「置いてっちゃうよ」とゆかなが言ったが、黒鐘はプレーリードッグの群れを見つめたまま動こうとしない。

「もうちょっと見てく？」と僕が聞くと、黒鐘はこくんとうなずいた。

「僕ももうちょっとここで見ていきます」という僕の言葉に対して蝶名橋は何か言いたげな表情を浮かべたが、「では、三人でゾウを見に行くでしょう」といつも通りの明るい声で宣言した。

珍しく、部長の性格に助けられた。

黒鐘は、無言のまま砂地を走り回るプレーリードッグを見つめている。はたして何を考えているのか、僕には分からない。

何を喋っても彼女の耳には届かないような気がして、僕は口をつぐんだ。

前にこの動物園に来たのはいつだっただろうか。たしか小学生のとき

の遠足だ。僕が通っていた小学校は、毎年一回この動物園に遠足に来ていたから、六年生の時が最後だったと思う。みんなでお揃いの体操着を着て行列をつくって歩くのがいい加減恥ずかしくなっていたのを憶えている。五人か六人位の班でひとまとまりになって見学する決まりだったはずだが、必ず男女混合のグループを作る、という小学校特有の決まりがあつて、思春期に入りたての子供の繊細な心をかきみだしていた。その時僕とゆかなは同じ班で、行動を共にした。もともと幼なじみであることは皆に知られていたし、周りの同級生にからかわれたことはある種必然の流れだったかもしれない。

当時の僕は周囲の仲間からかわれることを極端に気にしていて、その遠足中からゆかなとほとんど口を利かなくなってしまう。今思うと、ずいぶん一方的にひどい態度をとってしまったものだと思う。

そのせいで、その後の二人の距離が遠のいたことも間違いない。結果的に中学校では一度も同じクラスにならなかつたけれど、いずれにせよ仲良く話す機会はなかつたかもしれない。

黒鐘はまだプレーリードッグの巣穴を見つめている。

少し目を細めて、ほっぺたを丸くして、ただじつと見ている。

「動物園、好きなの？」と、僕は意を決して黒鐘に話しかけた。

「うん。今日すきになったかも」と黒鐘は答えた。

「もしかして、今まで来たことなかつた？」と聞くと、黒鐘はふるふるど静かに首を振った。

「プレーリードッグ、もう少し見ていく？」と尋ねると、黒鐘は無言でこくりとうなづいた。

僕が初めてこの動物園を訪れたのはいつだったか。はつきりとは憶えていない。

まだ小学生になる前の小さな頃、おそらくは母に連れられて何度か来ていたはずだ。そのときから、この柵の中に彼らは棲んでいた。当時の阪奈少年も夢中になってこの動物たちを眺めていたはずだが、記憶が不鮮明でやはりはつきりとは思いつけない。

雲の隙間からすつと陽が差し、プレリードッグたちは驚いて次々と巣穴に潜った。

黒鐘がようやく柵の向こうから視線を外した。

「ごめん」

唐突に謝られた。どうやら、部長たちとはぐれてしまったことを謝っているらしい。

「いいって。どうせ園内にいるんだし、順番に歩いて行けばまたどこかで会えるよ」と僕は言った。

「阪奈くん」

名前を呼ばれると少しドキリとする。

「阪奈くんは、動物とか好き？」黒鐘に面と向かって何かを聞かれたのは、この時が初めてだったかもしれない。

「うん、好きかな。動物園とかも、昔よく来てたし」と僕は答えた。

「どんな動物が好き？」と黒鐘は質問を追加した。

「ええっと、犬とか猫とかも好きだけど、動物園に来るんだったらゾウとかサイとかも好きかなあ。体が大きい動物が好きかも」と僕は言った。黒鐘は「ふーん」と興味深そうな表情でゆっくりうなずいた。

「阪奈くん、兄弟いるの？」

急に質問が変わった。どういうことだろう。

「僕は一人っ子なんだ」と僕は正直に答えた。

少し不安になる。一人っ子というものに対して良いイメージを抱いている人はあまりいないのではないだろうか。もしかしたら黒鐘も一人っ

子という存在をよく思っていないかもしれない。

「あの、黒鐘さんは兄弟いるの？」と、僕は黒鐘の反応を待たずに聞き返した。

「いる。お兄ちゃんが一人。でも遠くに住んでる」と黒鐘は答えた。

「へえ、そうなんだ。写真とかある？」と僕は言った。

「あるよ。携帯に入ってる」というと、黒鐘は慣れた手つきで携帯電話を操作して僕に手渡した。セーラー服を来た黒鐘と、紺のスーツを着た背の高い男性が画面に映っている。

「これは、私が中学生の時の写真。だから、これは前の制服。この人がお兄ちゃん、これが私」と黒鐘は言った。

説明しながら僕の手元を覗きこんでくる黒鐘の髪の毛が僕の顔に触れそうになって、また少しドキリとした。黒鐘の頭から、ほのかに甘いおいがする。たぶん、ウチにあるような安物のシャンプーとは全然違うやつを使っているのだと思う。

ありがとう、と言って携帯電話を返すと、黒鐘は少し照れたようにそっぽを向いた。

それから僕と黒鐘は、順路を示す標識に従って歩を進めた。

ヘラジカ、ウオンバット、ペリカン、シロサイ、フタコブラクダ。黒鐘は一つひとつの動物を興味深くじっくりと観察した。どんな動物もおざなりにせず時間を費やすのが彼女のやり方の方ようだった。

僕は彼女の妨げにならないように、自分から余計な話をしないよう気を付けたが、どうやらそれは杞憂のようだった。黒鐘は、意外にもよく喋った。

動物園の一番奥に位置するヒツジとヤギのふれあいコーナーまで来たところで、部長たちの姿が目に入った。

蝶名橋は砂にまみれながら楽しそうにヤギとじゃれあっていた。

御乃木とゆかながぼかんとした表情で蝶名橋を眺めている様子が印象的だった。

無事に合流を果たすと、一同はお土産売り場へと向かった。

駅の売店ほどの大きさの店内で、ぬいぐるみや、子供向けのおもちやや、カレンダーなど動物にちなんだグッズが販売されていた。

「部長、何か買ってくださいよー」とゆかなが猫などで声で蝶名橋に話しかけているが、そっけなくあしらわれている。

「そうだ、入部祝いとして、黒鐘君に何か買ってあげるのはどうだろう」と蝶名橋が案を提示した。

「あ、それいいですね。そうしましょう」とすぐさま御乃木が応じた。

「私のはー？」とゆかなは不満そうな声を上げたが、やがて蝶名橋の提案を受け入れた。

欲しいグッズを選ぶよう促された黒鐘はしげしげと陳列棚を見渡したが、こういう場に慣れていないのだろうか、戸惑っている。

数分間迷った末に、困ったような表情でこちらを向いた。

「どれでもいいからさ、欲しいやつを教えてください」と僕は黒鐘に助け舟のつもりで声をかけた。

黒鐘はしばし考慮して分かったという風に小さくうなずくと、こう言った。

「阪奈君の、好きなやつがいい」

「っ！」

思わず顔が熱くなった。

部長と御乃木が目を見合わせている様子が視界の端に映った。ゆかなは両手を口元に当て驚いた表情でこちらを見ている。どうしたものか。

黒鐘の方へ視線を送ってみたが、自分の役目は果たしたとばかりにそっぽを向いていた。

「そ、そっか。ほんとに僕が選んだやつでいいの？」と確認するように言って、陳列棚に歩み寄った。ゾウやキリン、ラクダなどのぬいぐるみが何段にも渡って並んでいる。そういえば、女の子のプレゼントを選ぶなんてそれまで一度もやったことがなかった。

一同の視線を浴びながら一分ほど少考したが、どれも決め手に欠け、いいアイデアは浮かばなかった。

しかし、棚のすみっこにちよこんと鎮座するそれを見つけたとき、あっ、と思った。これだ。これしかない。

可愛らしくデフォルメされていたせいで始め何の動物か分からなかったけれど、よく見るとお尻に取り付けられたタグに「Prairie」と表記されていた。僕はそのひととき可愛らしいぬいぐるみを手にとると、「これどうかな？」と黒鐘に提示した。

レジ行つて精算し、ラッピングを依頼した。パステルカラーの包装に包まれた商品を受け取ると、そのまま黒鐘に歩み寄つてプレゼントを差し出した。

「気に入ってくれるといいんだけど」と言うと、

「ありがと」と黒鐘は少しそっぽを向きながら小さな声で答えてくれた。

動物園からの帰り道、ゆかなは強硬に「はづきちちゃんと一緒に帰る」と主張した。「女子同士の大事な相談がある」というのがゆかなの言い分だった。僕としては余韻を味わいたい気持ちもあり、「途中まで一緒に行こうよ」と抵抗を試みたが、ゆかなの意志は変わらなかった。

「一体何の話をするつもりなんだ？」と蝶名橋が興味深そうに尋ねると、

「そんなの教えられるわけ無いでしょ」とゆかなが答えた。

「そんなこと言っていると、俺らも阪奈の家で反省会やっちゃうぞ。それでもいいのかな？」と、蝶名橋はニヤニヤ笑いながら言った。それ「なにそれ」とゆかなは意外そうな口調で返した。少しむくれたような

表情を浮かべている。

「ぎんちゃんに余計なこと言わないでよね」と釘を差すようにゆかなが言うのと、「さあ、それはどうか」と言って蝶名橋は肩をすくめた。

「あんなバカはほつといて、早く行こ」とゆかなは黒鐘を促した。

「ゆかなさんはああ見えて乱暴者ですからね。気をつけるんですよ」と御乃木がおどけた口調で言った。

「帰るまでが遠足だな」と蝶名橋はつぶやいた。

第二章へ続く

駒・zoneガールズ  
第三章 「十字飛車」

欠片食器

「しっかしどうしたものかねー」

三人の少女は、たき火を囲んでいた。背後には、駒ゾーンから通じる穴。

「待つしかない。将の命令だ」

将は三人に、二日経ったらこの場所で集合、と伝えていた。それは、全滅を避けるためという意味も含まれていた。

「まったく、香車さんたちにも困ったものですわ。お利口さんに見えて向こう見ずなんですから」

「まあそう言うな。あたしたちだって迷惑かけることあるんだから」

「あら、そうかしら」

その時、角の目つきが鋭くなった。人差し指を口に当てる。草を分け入って歩く、足音が聞こえてきた。三人が、武器に手をかける。

暗闇から現れて炎に照らされたのは、翼を持った人型だった。しかし体中に傷を負っていて、羽もぼろぼろになっていた。しかし

「使い魔か」

角が、鎌を振り上げて一歩近づく。それを、飛車は手で制した。

「怪我してるじゃないか」

「でも、使い魔ですわ」

「襲ってきたら斬ればいい。敵かどうかもまだわからないじゃないか」  
飛車は使い魔に微笑みかけた。使い魔は目を見開いて、喉を震わせながら言った。

「助けて……くれ……」

包帯を巻かれて眠っている使い魔は、木通あけびと名乗った。鼻筋の通った顔は非常に端正だったが、今は痣や傷が目立つ。

「どうするんですの」

「放っておくわけにはいかないだろう」

「放っておいても罰は当たらないと思いますけれど」  
すでに、山際に赤い光が差し始めている。待ち人は夜の間には来なかった。

「どうせここにいるしかないんだから、一人ぐらい増えてもいいじゃないか」

「スパイかもしれませんわ」

「だとしたら相当下手だぜ」

木通は穴を通って駒ゾーンに行きたいのだと語った。しかし今のところ、自力で向かえる体力はなさそうである。そしてなにより、駒ゾーンに使い魔の居場所はない。

「使い魔も、一枚岩じゃない」

「そうなのか」

「使い魔はもともと、普通の人間だった、と聞いた。悪魔によって、作り変えられた、と」

「Is incredible、の世は謎だらけだ」

飛車が大げさに手を広げたところ、顔を出した朝日が彼女の顔を染め始めた。おもわず金は嘔き出した。

「神々しいですわね」

角も、少しだけ笑った。

「とりあえず離れないと」

将は、大きくうなずきながら言った。

「でも、二人は大怪我だぞー」

「四人がかり、奇襲でようやく勝てたんだ。他のクラウンシールドが来たら勝ち目はない」

現在、銀は重傷で起き上がることができず、香車もけがをしており満足に戦うことは無理な状況である。そして駒ゾーン内では傷は一日のうちには治癒するものであったため、そうでない状態ではどのように怪我が治っていくのか誰にも予測できないのである。

「よし、私が銀ころりんを背負うー」

「じゃ、僕は香車ちゃんをつ」

「う、うん、そうしよう」

銀ちゃんは僕が、とはとても言えない将であった。

何はともあれ、急がねばならなかった。

五人は発電所を出て、山の中を少し進んだところでいったん休憩することにした。

「約束の時間は過ぎちゃったから、早く飛車ちゃんたちと合流しないと」

「あっ」

「どうしたの、歩ちゃん」

「雨の香り」

見上げた空には、確かに雲が広がり始めていた。

「まいったなあ」

「申し訳ない……」

香車は、声を絞り出した。

「いや、いいんだ。いつかは対決しなきゃいけないかったんだから。幸運にも一人倒せた」

「しかし、私の勝手は許容されるべきではない」

「うん、次からは頼むよ」

ぼつり、と雨粒が将の頬へと落ちてきた。彼は、大きなため息をできるだけ小さめに吐き出した。

「翼を切ってくれ」

起き上がるなり、木通は言った。

「何をおっしゃっているんですか」

「この翼は、悪魔の僕である証。これを切り落とせば、呪縛は解かれる」  
「でも、隠せるんだろ、それ。あたしたちのここに来たやつは、最初人間だった」

「悪魔によって処置されればしばらく隠せる。自分では、無理だ」

角が、鎌を持ち上げた。びっくりして飛車が立ちほだかる。

「おいおい、決断早すぎだろ」

「本人が、望んでいるんだ。裏切ったとしても、翼がない方が都合がいい」

「飛車ちゃんは、止める理由があると思うんですの？」

「だってよお、かつこいいじゃないか、翼」

大真面目な顔をする飛車に、角と金は冷やかな視線を向ける。

「飛車ちゃんは翼をはやしてエンジンでも付けるといいですわ」

「なんだよそれ」

「ツノはどうする」

角は、木通に尋ねる。

「それは……」

「変えられないものが、ある。形だけの覚悟は、覚悟ではない」  
「……そうだな」

木通は、ゆったりと頬を緩めた。しかし、すぐに顔全体がひきつった。「翼だけじゃすまないぞ、木通君」

大きな影だった。四人は、その影を見上げた。

「……亀渥きおう」

角が、キヤスキットのの中に視線を隠した。

「知ってるのか」

「あいつは、私が倒した」

飛車は、しっかりと亀渥と呼ばれたものを見た。最初の印象よりは背が低いことが分かった。しかし両手両足は太く、胸板はぶ暑い。翼は茶色く、広がった。

「そうだったね、クイーン。復活までの時間はまあ、退屈だった」

「お前に倒された仲間は、復活できない」

「そう、今となっては無駄死にだったってことだ」

角は鎌を振り上げ、飛車はハンマーを持ち上げ、そして金は傘を肩にかけた。

「どういう奴なんだ、あれは」

「見た通り、力が強い。あと……」

地面がえぐれるほどに蹴って、亀渥が飛び込んできた。まっすぐに、木通に向かっていった。

「させるか！」

その前に立ちかはらなかったのは、飛車だった。クロスハンマーを横殴りに振り回す。亀渥は地面に足を付け、両手でハンマーを受け止めた。

「ゴッ」

「力は強いけど、まあ、こんなものか」

亀渥はハンマーを押し返し、飛車の鳩尾に蹴りを打ち込んだ。飛車の体が吹っ飛ばされる。

「私もいましてよ」

金は、閉じたままの傘を突き出した。そのまま亀渥の肩口へと攻撃は当たったが、亀渥はびくともしなかった。

「ターゲット・シールドさ」

「びつくりしましたわ」

金の口元で、八重歯が光った。傘が開き、亀渥の視界を遮る。

「金開きですわ」

「ん？」

視界が遮られたものの、何の攻撃もないため亀渥が戸惑う。

「そしてタコ金ですわ」

「タコ？」

傘はそのままに、金の体が左側に動いていた。傘が落ちた時に、そこには誰もいない。

「まあ、予測できるよね」

すぐに、亀渥の体勢は金の方へと向いた。金はこぶしを振りかぶってしたが、唇をかみしめ、そして白い歯を見せた。

「ヒネリ飛車ですわ」

倒れていた飛車が、右側から出て亀渥の足元へと両足でキックを放つ。

不意を突かれた亀渥は十分な防御態勢が取れず、足をすくわれた。

「再び、眠れ」

そこに、鎌が追撃をかけた。避ける余裕は、ないはずだった。

「同じ手は食わないな」

亀渥の交差させた腕が、鎌の刃を受け止めていた。正確には、そこに張り付いた甲羅のような模様の小手が。

「いいコンビネーションだ。とはいえ、チャンスは過ぎたってことだ」

立ち上がった亀渥は角の襟元をつかむと、そのまま後方に投げ飛ばした。角の体は、木の枝にぶつかり、そのまま落ちた。

「駄目か……」

角は、笑いながら奥歯を噛みしめた。

角の前に広がっているのは、直視したくない現実だった。動かなくなつたクラウンシールドの一人、亀渥。そして。

「ビショップ……ルーク……」

仲間たちも動かなくなっていた。残されたのは、角ただ一人。

そんな彼女が駒ゾーンに戻った時、さらなる悲劇が待っていた。治療効果が、なくなっていたのだ。人々は急に、病気やけがで死ぬようになってた。

悪魔たちは、一つの駒ゾーンを滅ぼした。角のいた駒ゾーンには、玉石があふれていたのだ。それを使えるものの出現によって、駒ゾーンは危機の排出源となった。

「この世界は、負けた。ただ、お前たちも、無傷じゃない」

人間の魂を生きる糧とする悪魔にとって、駒ゾーンを失うことは自らの食糧源を断つことになる。角たちの戦いは、完全な無駄ではなかったのだ。

それでも。

「勝利、こそ」

角は、戦いをやめなかった。

「やめるわけには、いかない」

角は、再び鎌を手を取った。

飛車と金はずくまり、亀渥は木通の前に立っていた。

「見込みあると思つてただけだね、木通君」

木通は体を震わせて、一步も動くことができない。

「残念だ。ただ、君を追ってきたおかげでいい見つけものもできた。うん、よかったよ」

岩のような右のこぶしが、振りかぶられた。あとは、勢いに任せて殴るだけだった。

「こちらも、いい見つけものだった」

大きく斜めから振り下ろされる鎌。

「ちよつとだけ予想してた」

角は不意打ちの予定だったが、亀渥は反応した。拳を握っていないかっただ方の小手で、鎌を受け止めた。

「前の時より切れ味が悪いんじゃないか。あの時のものなら、傷はついてたかもしれない」

「そうか、いいことを聞いた」

角は鎌から手を離すと、懐から新たな武器を取り出した。亀渥の顔色が変わる。

「角換わり」

新たに表れたのは、小型の鎌剣、ハルパーだった。短い柄には、「**02**」の文字が刻まれている。

「それも持っていたのか」

「物持ちが、よくて」

湾曲した内側の刃が、巻き込むようにして小手を削る。ひびの入った小手は碎け散り、切られた肉から血が滴った。

「相変わらず見事だね。ただ、犠牲も大きかった」

ハルパーからも、刃がこぼれていた。角はそれを投げ捨て、再び元の鎌を拾った。

「この痛みは久しぶりだ。確かに、肉体が蝕まれるというのはこういうことだったよね」

「次は、命を貰う」

今度は鎌が右腕を狙ったが、亀湊は受け止めようとせず、その一撃をひらりとかわした。そして、肩から角に体当たりをする。角の体は吹っ飛び、背後にあった大木に打ち付けられた。

「腕一本では、追いつけないよ」

角の体はもう、角の思いを受け付けない。戦果は、小手一つ。

「ならば、私がもう一本を貰いますわ」

金が、立ち上がっていた。素早く亀湊へと駆け寄り、傘をまっすぐに突き出す。亀湊は左の小手でそれを防ぐが、先ほどとは違い傘は開かなかった。金が傘の手元をひねると、石突から黒い粉が噴き出した。

「うっ」

「出してから気づきましたけど、悪魔に毒はきかなさそうですわね」

「毒か。ならばその通りだよ」

「でも、これは利きますわ」

さらにひねると手元は抜け、その先には長くて太い針が備わっていた。

金は、その針を亀湊の左足に突き刺した。

「仕込み……っ」

「玉石が利いているはずですわ」

普通の傷は、すぐに元通りになってしまふ。しかし玉石によって加工された武器につけられた傷は、痛みを伴って、すぐには治らない。亀湊は、左足を引きずりながら後ずさった。

「なかなか、だ」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

「ただ、それでは勝てないかな」

右足を強く踏み出した亀湊の体が、ぐんと加速して金に接近する。金が防御態勢を取るよりも早く、亀湊の渾身の体当たりがやってきた。金の体は、地面にたたきつけられる。

「君たちは、両足をどうにかしなければならなかった」

「そうとも言えないさ！」

十字に光るハンマーが、亀湊めがけて飛んできた。一瞬腕を交差させた亀湊だったが、舌打ちしたのちに横つ飛びに避けようとした。しかし左足が言うことを聞かず、つんのめってしまう。ハンマーは腹部に直撃し、亀湊の口から鮮血が漏れた。

「倒れないのか……なんてこった」

負傷しながらもまだ立っている亀湊を見て、飛車は眉をひそめた。

「クラウンシールドをなめてもらっちゃ困る」

飛車は両手を顔の前に構えて、足を開いた。じり、じりと亀湊が間合いを詰めてくる。

「丸腰の君に勝ち目は無い」

[Not been determined!]

亀湊は左足をたたき、そして飛車にも突進してきた。飛車は逃げず、低い体勢から亀湊の腰にしがみついた。亀湊の体が、びたりと止まる。

「なんだと」

「強さを決めるのは力や重さだけじゃない。バランスが大事なんだよ」

亀湊は右足に力を込めるが、飛車の体は全く動かなかった。

「なかなか面白いね。こちらも、本気を出させてもらうよ」

亀湊が、突然全身の力を抜いた。飛車は支えを失い、亀湊と共に倒れこむ。そして、後ろには崖があった。亀湊は飛車の体を引っ張り込み、彼女を巻き添えに崖を転がり落ちていった。

しばらくして二人は大木の根っこに体を打ち付け、そのまま飛車だけさらに転がった。しばらくうずくまっていたが、ゆっくりと彼女は立ち上がる。

「いてて……なんだってんだ」

「これで、君に勝ち目はないということだよ」

翼についた土を払いながら、亀湊は飛車に近づいてきた。

「なんだと」

「武器がなければ、致命傷を与えられないからね」

「む」

飛車は崖の上を眺めた。ハンマーは、見えない。

「万全だよ」

「それは、どうかね」

亀湊の右の拳が、飛車の顔めがけて飛んでくる。飛車は身をかがめてそれを避け、その腕をつかんで外側から足を払った。亀湊の巨体が見事に倒れた。

「ちよっと、裏返らせてもらう」

そう言うと飛車は、髪を結んでいたリボンを引きちぎった。赤い長髪が、翼のように広がる。そして亀湊の首を右腕で締め上げ、左腕を脇に挟み込んだ。

「Dragon Sleeper!」

強く締め上げられ、亀湊は身動きすることができなかつた。しかし、口元には笑みが浮かんでいた。

「人間ならば息が苦しくなるんだろうけど。悪魔は、窒息しない」

亀湊の翼が大きく盛り上がってきて、飛車の体を弾き飛ばした。立ち上がりながら、亀湊は首をゆっくりと回す。

「それに君の体力はなくなるばかりだ」

飛車はすぐに向き直り、亀湊の右足にタックルした。

「今度はなんだ」

「Dragon Screw!」

飛車は足をつかんだまま、体ごと回転した。行き場を失った足のエネルギーは、体へと伝わる。亀湊も、回転しながら地面に倒れていった。

「やはりな」

「なにがだるうね」

亀湊は、すぐに立ち上がる。しかし、少しふらつきながらだった。

「お前たちは確かに致命傷を負わない。でも、物質で体を構成している以上、ダメージがないわけじゃない。今も右足は、万全じゃない」

「そりゃ、元に戻るまでに少しは時間がかかるさ」

「その少しが、重要だろう」

飛車の右足が、鞭打つようにしなり、亀湊のこめかみを狙った。亀湊は右腕でそれをガードしようとしたが、二つの誤算があった。一つは、そちらの小手はすでに破壊されていたということ。もう一つは、うまく踏ん張ることができなかったということ。

「角と金のおかげだ」

亀湊の体がふらふらと揺れる。しかしその顔は、笑っていた。

「もう、体力の限界だろう。よくやったよ、でも結果は変わらない」

飛車は、亀湊よりも少し上を見ていた。太陽の光を反射して、十字に輝くものが見えていた。そして、目を細めて唇の端を上げる。

「ひとりには、つらいよな」

「なんだと」

飛車は、再び亀湊にタックルを仕掛ける。亀湊は飛車の体をとらえようとしますが、その動きは弱々しく、飛車はすりとその手をすり抜けた。

そして亀湊の背後に回ると、両脇の下から手をくぐらせ、頭の後ろで両手をロックさせた。

「それでどうするつもりかな。こちらが万全になったら力づくでも外せるのに」

「大丈夫、とどめを刺すから」

「うおおおっ!」

崖の上から、猛々しい声が響いた。木通のものだった。

「ごごご」という音とともにハンマーが崖を滑り落ちてくる。小さな木

を数本なぎ倒してすべり、飛車たちの背後でハンマーは止まった。

「な、何の音……」

「すぐにわかるぜ。Dragon Suplex!」

飛車は体を背後に逸らせて、そのまま亀渥の体を投げ飛ばした。そして、悪魔はハンマーの上に首から背中をたたきつけられた。

「これ……の音……か……」

数秒して、亀渥の体は動かなくなった。

「ったくよ、こんなのがあと六人もいるのかよ」

飛車も、その場にへたり込んだ。崖の上に視線を向けると、息を切らせながら木通がほほ笑んでいた。飛車も、歯茎を見せながら笑顔を作つて、そのまま地面に大の字になった。

「本当に申し訳なかった。私の独断で皆を危機に陥らせてしまった」

香車が深々と頭を下げる。まあまあ、と言おうとする飛車を手で制し、将が口を開いた。

「駒ガールズは一体感が命だと思ふ。だからやっぱり、こういうことはない方がいい」

いつになく厳しい口調の兄に、桂馬が目を丸くしている。

「弁明の余地もない」

「だから香車ちゃんには罰として……僕らのテスト勉強に付き合ってもらおう」

キョトンとする香車。そして、銀が吹き出した。

「ぜひ、お願いね」

「了解した。銀ちゃん以外に」

「あら」

何となくその場が和んだ中で、ずっと緊張した表情できよろきよろし

ている者がいた。木通だ。

「さて、彼だけど……」

使用に視線を向けられて、木通の体は飛び跳ねる。

「正直、どうしたらいいかはよくわからない。だからまあ、僕らは判断しないということで、見て見ぬふりをしようと思ふんだ。ひよっとしたら僕らと同じ道を通るかもしれないけど、まあ、彼が勝手にすることだ」

「いいと、思う」

角は、木通のこゝを見つめながら言った。木通は体がちがちにさせて視線を返す。角は、小さくうなずき、キャスケットをかぶった自らの頭をなでた。

「さて、とりあえず帰ろうか。こっちの世界にいたら、全然心が休まらないからね」

「人参もないしな」

「お風呂もありませんわ」

「いや、あるところにはありますよ……」

木通の言葉に、皆が声を上げて笑った。

勝利の余韻が、少しずつ傷を癒していくのだった。

あとがき

皆様お久しぶりです、第9号です。

現在コンピュータソフトが戦うトーナメントを観戦しながらこれを書いています。ソフトも将棋の世界には無くてはならないものになりましたね。

最近暇なときにGoogleの棋譜を眺めているのですが、そこでは不思議な感覚に襲われます。負けた方のソフトが弱く見えるんですね。実際には私よりはるかに強いだろうし、プロに勝てるソフトもあるわけですが、とにかく負けると弱く見えてしまいます。将棋の強さというのは相対的に見えてくるので、絶対的な強さはなかなか見えてこないようです。

普段プロの将棋を観ているも、解説や事前の成績などの付加情報がなければ、同様に感じられるのかもしれませんが。あるラインを越えて洗練された強さになってくると、強さよりも弱さが目立ってしまうのでしょうか。いくらソフトが強くなっても、それを解説してくれる人がいないと「よくわからない」状態になってしまうのではないかと思います。

普段将棋を観戦して楽しめるのも、解説や中継で様々な付加情報が伝えられるからだだと思います。そしてその中には「物語」もあります。対局者のみならず、関係者、関係団体、そしてファンの物語も将棋を盛り上げる要素だと思います。

そんな要素の中に、「フィクション」もあってよいのではないかと思います。現実では起こりえない物語が、現実を楽しむエッセンスになることもあるのではないのでしょうか。

そんな思いから今回、私はかなり突飛な話を書きました。どうせなら絶対に見られない話を書こう、と思ったのです。でも、ちよつとぐらい現実になるかもしれませぬね？

他にも個性的な作品が集まりました。特に今回、平川さんには私からお願ひして寄稿していただきました。現代詩においても画期的と言える、不思議な作品をぜひお楽しみください。

また、今回から縦書きレイアウトにしてみました。これまでの方がファイル作成は楽だったのですが、どうしてもレイアウトを調節することが難しく、句読点が文頭に着たりと不満もありました。PDFだけになってしまふのは申し訳ありませんが、「見た目も完成させたい」という私のわがままからこうなりました。ご了承ください。

今回はイラストも多く、ひろちさんには素敵な挿絵を何枚も書いていただきました。営業の皆川さんは出番がなかったのですが、インド人として転生しています(笑)また若葉さんの駒娘集合絵もいいです。駒ガールズ、とどこどこにちゃんと将棋要素が入っているのでそのあたりも楽しんでください。

次号はついに十号です。記念的なことをやる……かはわかりませんが、ぜひお楽しみにお待ちください。

編集長 清水らくは

作者紹介

執筆

清水らくは

浮島

ジエームズ・千駄ヶ谷

跳馬

平川綾真智

欠片食器

手の目

黒崎立体

しむしむ

贅楽夢

どっともっと

宮戸川

ユーベ将棋部部長

イラスト

ひろち

若葉

編集長

清水らくは

@rakuha

広報

金本月子

@tsukiko\_sann

営業

皆川許心

@MinagawaMotomi